鴻臚館

鴻臚館跡16

－平成15年度発掘調査報告書－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第８７５集

２００６

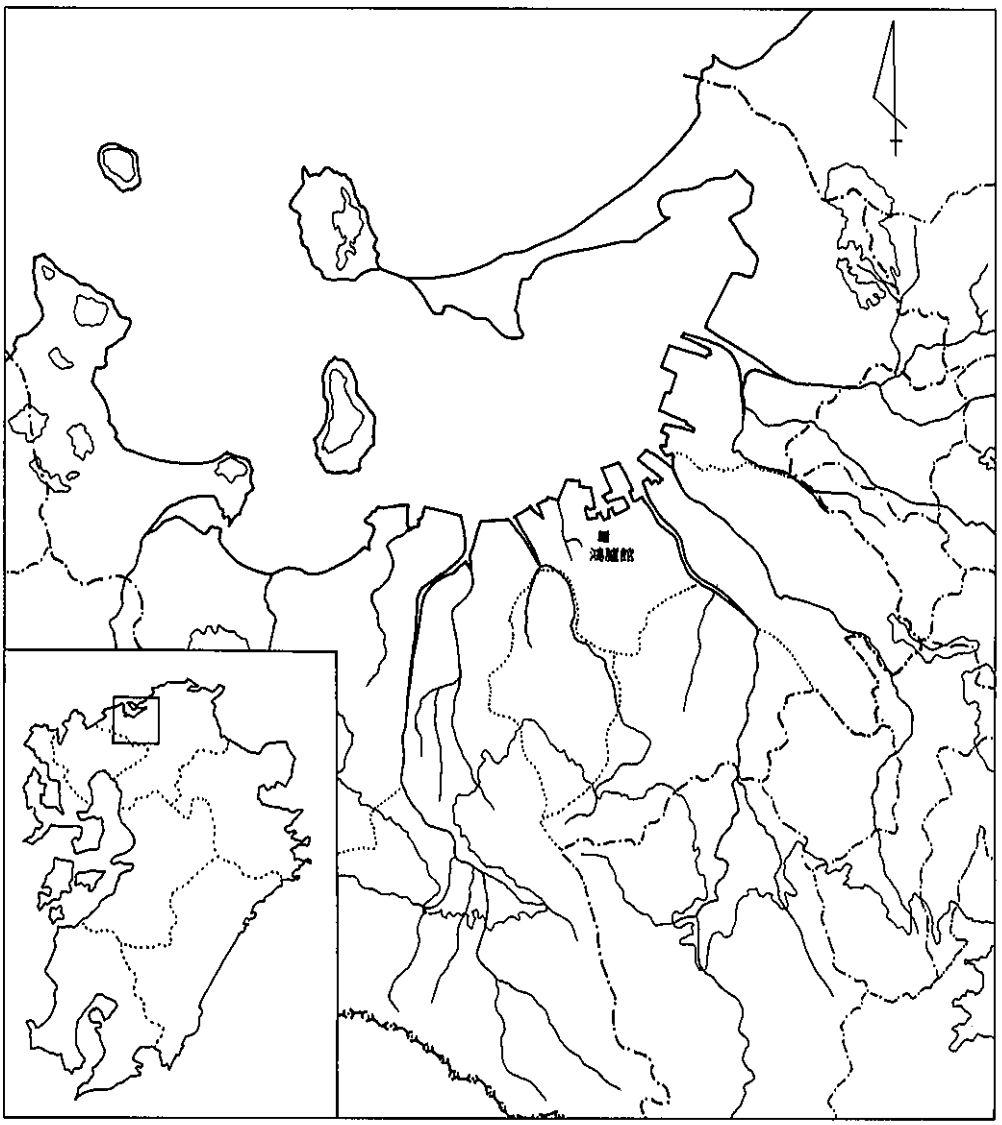
福岡市教育委員会

鴻臚館

鴻臚館跡16

－平成15年度発掘調査報告書－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第８７５集



２００６

福岡市教育委員会



1. 平成15年度調査区遠景（北東より）



2. 平成11～15年度調査区モザイク写真

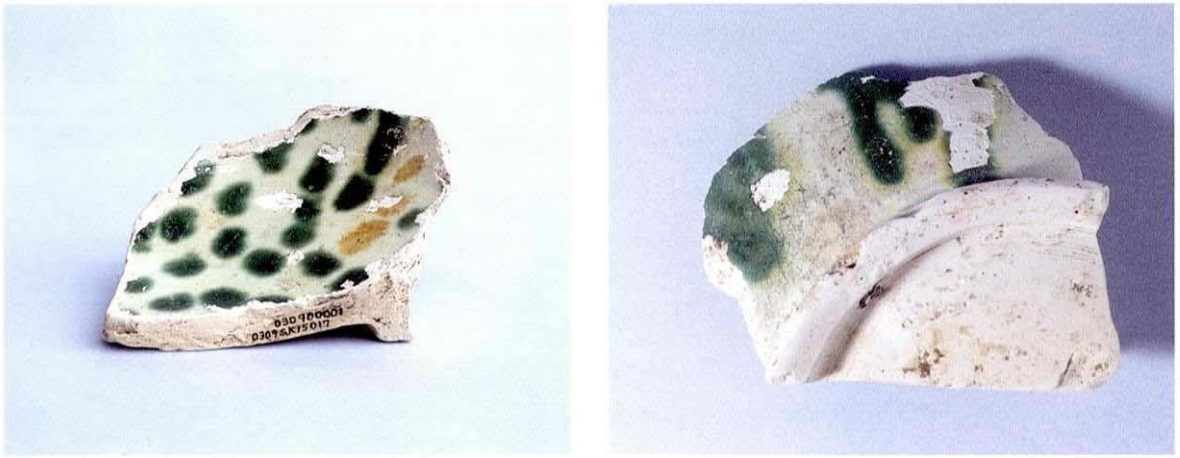
巻頭図版 2



1．北館便所遺構　SK1124・1125（北より）



2．南館出土梵鐘鋳造遺構　SK15027（西より）



1．SK15017出土唐三彩盤



2．SD15052出土石印



3．SK15014出土イスラム陶器片

巻頭図版 4



1．03－4区出土新羅石製蓋



2. SK1124出土土師器皿



3. SK15014出土青磁香炉蓋



4. SD15052出土陶器おろし皿



5. SD15052出土青磁毛彫り碗



6. SD15098出土青磁花文碗

序

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末、福岡市中央区の国史跡福岡城跡内にある平和台野球場外野席スタンド改修工事の際の発見を契機として、翌63年から本格的に開始いたしました。平成15年度には国に史跡指定申請を行ない、平成16年９月30日付けの官報号外で告示されました。

本市では、鴻臚館跡の全容解明を目的として、昭和63年度に鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置し、その御指導の下で、発掘調査と関連資料の収集等を継続して推進しております。

これまでの調査で、鴻臚館の遺構が広がると予想されておりました平和台野球場は平成10年度に解体撤去工事が行われ、平成11年度からいよいよ平和台野球場跡地の本格的な発掘調査に着手いたしました。

平成11年度の調査では、これまで見つかっていた鴻臚館建物の北側にも、谷を埋め立てた堀状の遺構や、多量の瓦や陶磁器を検出するなどの新しい発見があり、平成12年度の調査では奈良時代の建物区画が見つかり、堀北側にさらに別区画の建物が存在していたことが明らかになりました。

平成13年度の調査では、この建物が南北同一構造、規模であることが判明し、更に平安時代の文献に現れる「鴻臚北館」の一部と思われる礎石建物も新たに見つかりました。そして、平成14年度調査では、鴻臚館を造営するにあたって行われた大規模な造成工事の一端が明らかとなりました。その後の平成15年・16年調査では、南館と北館を隔てる谷の底から柱穴を検出し、北館と南館が橋で結ばれていたことが明らかになりました。平成17年度調査では、鴻臚館東側の谷部で掘立柱建物跡を検出、鴻臚館東門への導入部の景観が明らかになりつつあります。

本書は、平成15年度に実施した、平和台野球場跡地の発掘調査成果を内容とする報告書です。本報告書が、鴻臚館跡をはじめ本市の埋蔵文化財に対するご理解とご認識の一助となれば幸いであります。

発掘調査から本報告書の刊行にいたるまで、ご理解とご協力をいただいた財務省福岡財務支局、福岡市都市整備局、また、温かくご指導いただいた鴻臚館跡調査研究指導委員会の各先生方、文化庁、福岡県教育庁の皆様方には深甚なる謝意を表します。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　植木　とみ子

例　言

1．本書は、平成15年度に実施した鴻臚館跡第21次調査について、その概要を報告するものである。
2．本書の編集・執筆は、大庭康時が担当した。
3．鴻臚館跡の発掘調査においては、平面直角座標系第Ⅱ座標系に則って測量を行なっており、本書に使用した方位もこれによる。真北方位より、0°19′西偏する。
4．遺構番号・名称については、平成15年度を著す“15”に続けて3桁の通し番号とした。
遺構の性格を示す英文字の略号は次の通りである。
例　塀・柵列：SA、　建物：SB、　溝・堀：SD、　道・通路：SF、　池：SG、
炉：SH、　土坑：SK、　埋立遺構：SM、　柱穴：SP、　性格不明の遺構：SX
6．本書で使用した航空写真、及びそれに基づくデジタルモザイク写真に関しては、（株）写測エンジニアリングに撮影・作成委託した成果である。
7．本調査に関わる遺構実測図は、大庭康時、降矢哲男（調査当時九州大学）、Rasmus Brethvad（デンマーク、オーフス大学）が作成した。
8．遺物実測は、大庭、降矢、丹羽崇史（九州大学）、赤坂有美（整理調査員）、井上涼子（整理調査員）、俵寛司（整理調査員）がおこなった。
9．遺構実測図・遺物実測図の浄書には、宮園・井上・大庭があたった。
10．本文中に示した瓦の分類は、『鴻臚館跡13』福岡市教委2003に掲載された叩き文様による分類に準拠している。なお、分類図はFig.70に掲載した。
11．平成15年度の調査は、以下の方々の参加で実施した。記して感謝の意を表します。

[発掘作業]
牛尾成正、大橋善平、嘉藤栄志、鐘ケ江正良、斎藤善弘、坂本ハツ子、島津明男、杉村文子、鈴木敏男、高田甚一郎、谷吉美、堤篤史、土斐崎初栄、永井鈴子、仲野正徳、原幸子、古山昭、脇坂レイコ、降矢哲男（九州大学）、竜知江（福岡大学）、Rasmus Brethvad（デンマーク、オーフス大学）

[整理作業]
整理調査員　赤坂有美、井上涼子、降矢哲男、宮園登美枝、俵寛司
整理作業員　金石邦子・木下華代・冨永静子・堀一恵

本文目次

第一章　序説…… 1
　1．調査計画…… 1
　2．鴻臚館の立地と歴史的環境…… 2
　3．鴻臚館跡の既往の発掘調査と成果…… 6
　4．平成15年度の調査事業概要…… 9
　　（1）発掘調査の組織…… 9
　　①　調査および整備指導…… 9
　　②　発掘調査事業主体…… 9
　　（2）調査事業の概要…… 9
　　①　鴻臚館跡調査研究指導委員会…… 9
　　②　発掘調査…… 10
　　③　公開事業…… 10

第二章　平成15年度調査の記録…… 11
　1．発掘調査の方法と経過…… 11
　　（1）発掘調査の方法…… 11
　　（2）発掘調査の経過…… 11
　2　調査の概要…… 12
　　（1）基本層序…… 12
　　（2）上層遺構の概要…… 14
　　（3）下層遺構の概要…… 14
　3．遺構と遺物…… 19
　　（1）03－1区…… 19
　　（2）03－2区…… 19
　　（3）03－3区…… 21
　　A．上層遺構群（中世～）…… 24
　　SB15011…… 24
　　SK15013…… 25
　　SK15016・SK15020・SK15026…… 25
　　SK15080・SK15086・SK15121…… 25
　　B．下層遺構群…… 26
　①　第Ⅰ期の遺構（7世紀後半）…… 26
　②　第Ⅱ期の遺構（8世紀前半）…… 26
　　SA15012…… 26
　　2トレンチ北側部分盛り土整地層・SA1237…… 28
　③　第Ⅲ期の遺構（8世紀後半～9世紀前半）…… 34
　　SK15027（梵鐘鋳造遺構）…… 34

④ 第Ⅲ期以前の遺構…… 38
SX15193…… 38
SP15301・15302（橋脚遺構）…… 40
⑤ 第Ⅳ期の遺構（9世紀後半～10世紀前半）…… 42
SK15014…… 42
SK15015A…… 54
SK15017…… 58
SK15022…… 65
SK15027B…… 67
SK15028…… 67
⑥ 第Ⅴ期の遺構（10世紀後半～11世紀前半）…… 68
SK15015C…… 68
SD15052…… 70
SD15098…… 81
（4）０３－４区…… 85
SK1124…… 86
SK1125…… 95
（5）その他の出土遺物…… 102

第三章 まとめ…… 104
1．鴻臚館跡の国史跡指定について…… 104
2．北館第Ⅱ期便所遺構について…… 104
3．北館第Ⅱ期の時期比定について…… 105
4．南館第Ⅴ期区画について…… 105
5．石印について…… 105
6．梵鐘鋳造遺構について…… 106

表紙題字は故遠藤一馬元福岡市長の揮毫による

第一章　序　説

1．調査計画

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末の平和台野球場外野席における関連遺構と遺物の発見を契機とする。昭和63年度には鴻臚館跡調査研究指導委員会が組織され、全容解明のための本格的な発掘調査が開始された。発掘調査は下表の「鴻臚館跡調査中期計画」の下で実施している。

中期計画は、鴻臚館跡推定地が国史跡福岡城跡内に立地しているために、文化庁をはじめとする関係各機関と協議の上、「舞鶴城址将来構想」の下で進められている城内各施設の移転事業計画を参考にしながら策定し、平成5年度第2回指導委員会で了承を受けた。

第Ⅰ期調査は平和台野球場外周南側部分を対象に、昭和63年度～平成4年度にかけて調査を実施。この地区では、奈良時代から平安時代までの建物遺構群と中国産陶磁器をはじめとする大量の遺物が出土し、鴻臚館跡の可能性が高いことが確認された。またこの地区は、５年度から７年度にかけて、平和台野球場撤去後の本格的整備までの当面の仮整備という位置づけで第Ⅰ期整備を実施した。

第Ⅱ期調査は、５年度と６年度に福岡城三の丸西郭にある「舞鶴公園西広場」を調査対象地として、福岡城跡西辺部における鴻臚館関連遺構と遺物の有無確認、および旧地形復元を目的に調査を実施した。その結果、福岡城西北域における築城当時の地業の状況と当時の海岸線の復元が可能となった。

第Ⅲ期調査は、第Ⅱ期調査区南側の福岡城土塁部分を対象に平成７～９年度に実施し、平成10年度には平和台野球場解体工事に伴う立会調査と解体後の試掘調査を実施した。

平和台野球場跡地部分の本格的発掘調査は、面積が広大なため南半部と北半部に分けて実施することとした。南半部を第Ⅳ期調査として、当初平成11年度～14年度を予定していたが、平成11年度・14年度調査で遺構の遺存状況が予想以上に良好なことが明らかになり、17年度まで調査を延長することが平成14年度指導委員会で了承された。北半部は、第Ⅴ期調査として平成18年度から実施することになる。また第Ⅴ期調査終了後、調査結果に基づいて、本格整備を実施する計画である。

第Ⅵ期調査は、鴻臚館跡の全容解明にとって必要と思われる地点について調査を行うもので、第Ⅳ期調査以降の成果およびその進捗状況をみながら、調査地点等は検討して行く予定である。

Tab. 1　鴻臚館跡調査中期計画表（平成17年12月現在）　　※網かけ部分は本報告の対象とする事業年度

		対象地区	昭62～平4	平5～平6年	7年	8～10年	11	12	13	14	15	16	17	18	19～23年	24～28年	備　考
発掘調査	緊急調査	平和台野球場外野席	―														鴻臚館の発見
	第Ⅰ期調査	旧テニスコート	――														指導委員会の設置 本格的調査の開始 第Ⅰ期の整備対象地
	第Ⅱ期調査	西　広　場		――													範囲確認調査 旧地形の復元
	第Ⅲ期調査	野球場外周南側土塁他野球場跡地			――	――											範囲確認調査 野球場解体立会調査 野球場跡地試掘調査
	第Ⅳ期調査	野球場南区					――	――	――	――	■	■	――				平成11年から調査着手 （7カ年計画）予定
	第Ⅴ期調査	野球場北区													――		平成18年から調査着手 （3カ年計画）予定
	第Ⅵ期調査	舞鶴競技場等重要地点														――	
整備	第Ⅰ期整備	旧テニスコート															平成７年８月10日完成
	第Ⅱ期整備	球　場　跡　地										――	――	――	――	――	第Ⅳ期調査の結果を検討のうえ計画

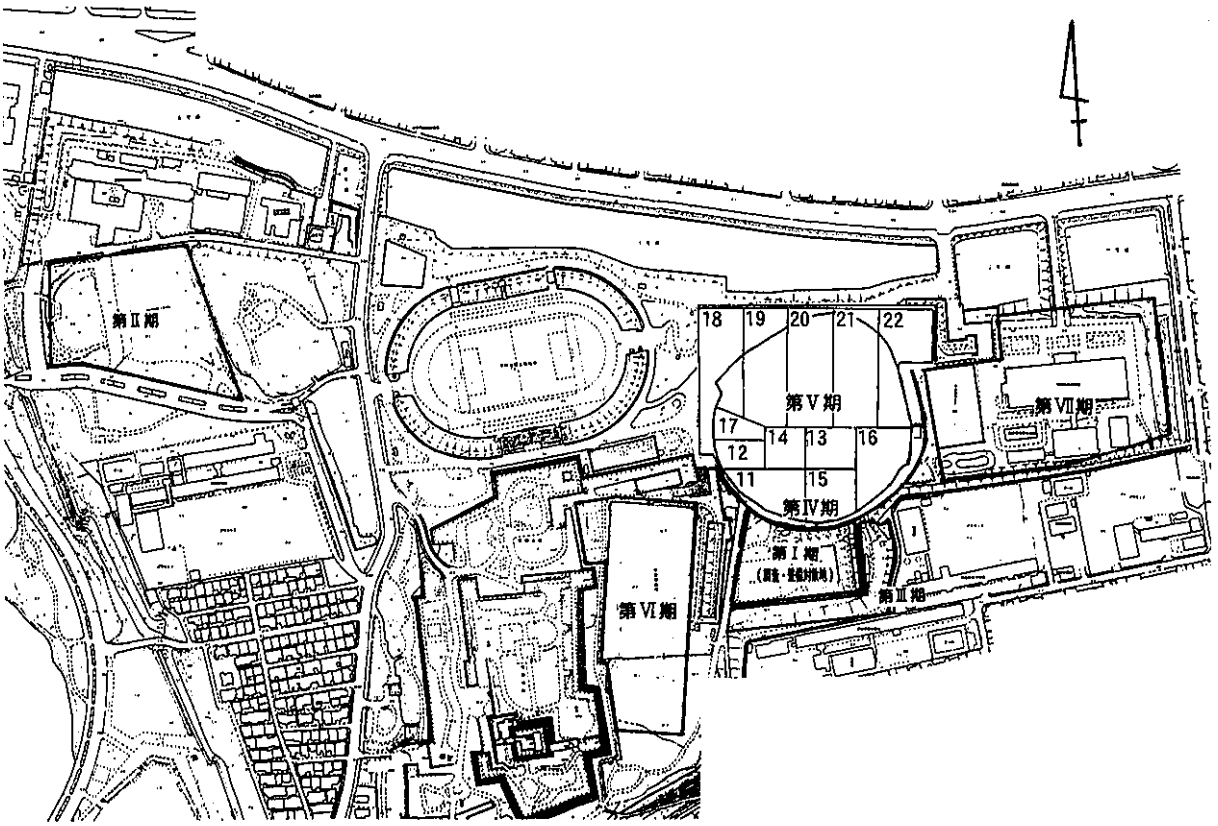


Fig.1　鴻臚館跡発掘調査基本計画図（平成16年3月31日現在）

2．鴻臚館の立地と歴史的環境

鴻臚館は、博多湾のほぼ中央部の海岸際に位置する。

博多湾は、東から北側にかけて海の中道・志賀島に遮られ、西側には今津湾を擁した毘沙門山、さらには蒙古山が張り出す巾着状を呈する。志賀島と蒙古山の間はわずか7km、志賀島と毘沙門山の間は6kmにすぎず、玄界島・能古島がそれぞれの中央部に座り、開口部を二分する。博多湾そのものが、玄界灘の風涛から守られた、天然の良港とさえ言える地形に恵まれている。

博多湾岸には、東から粕屋平野、福岡平野、早良平野等の沖積平野がならぶが、鴻臚館は、福岡平野と早良平野を画する丘陵の先端に立地している。東側には低地から後背湿地がひろがり、西側には現在の大濠公園の入り江から南西に潟が広がっていた。北側はすぐ海に落ちるが、大濠につづく入り江の開口部を隔てて荒津山が隆起しており、埋め立てが進んだ現在でも福岡港として機能している。

鴻臚館は、博多湾に突き出した出島のような景観を持ち、博多湾岸を一望できるとともに、逆に周囲からその出入りが監視しやすく、かつ良港に恵まれるという地形条件を兼ね備えていた。

福岡平野は、わが国で最も早く水稲耕作を受け入れた地域であることに示されるように、朝鮮半島・中国大陸との交流史に彩られている。鴻臚館も、その歴史の一部として営まれた遺跡に他ならないといえる。

663年、朝鮮半島の百済を救援した倭の大軍は、白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗する。朝鮮半島での敗戦を受けた天智朝は、664年福岡平野の最奥部を水城で画し、665年大野城・基肄城の二城を築いた。そして、これらに守られた内懐に大宰府を造営した。大宰府の前身とされる筑紫大宰は福岡平野に置かれたと推測されているが、その所在地は明らかではない。いずれにしても、この時期の

大宰府の退転と海岸部の外交施設の造営とが無関係とは考えられないであろう。『日本書紀』には、663年以降来日する新羅や唐の使節を筑紫で饗応した記事が続くが、饗応・滞在に充てられた施設の名称は記されておらず、鴻臚館の前身である筑紫館の初見は688年まで下る。鴻臚館という名称は、弘仁年間（810～824）に唐の外交を司る官署である「鴻臚寺」に倣って改称したものと考えられている。

鴻臚館は、平安京・難波・筑紫

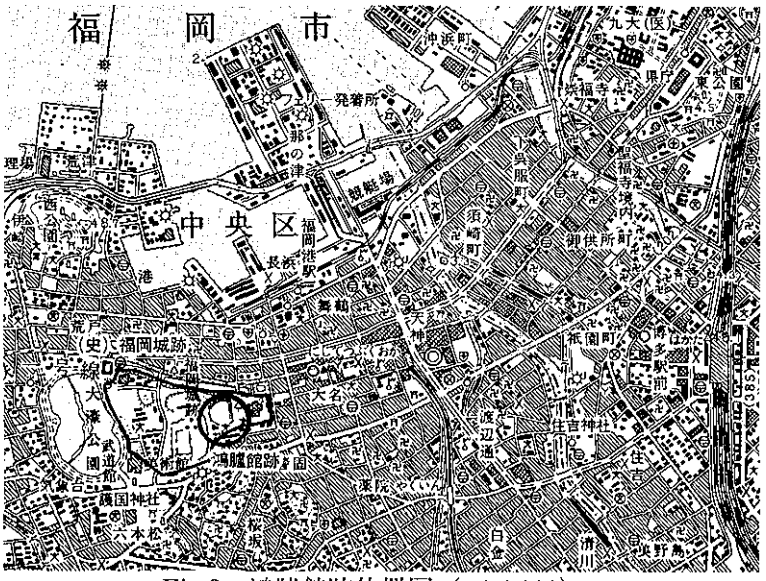


Fig.2　鴻臚館跡位置図（1/50,000）

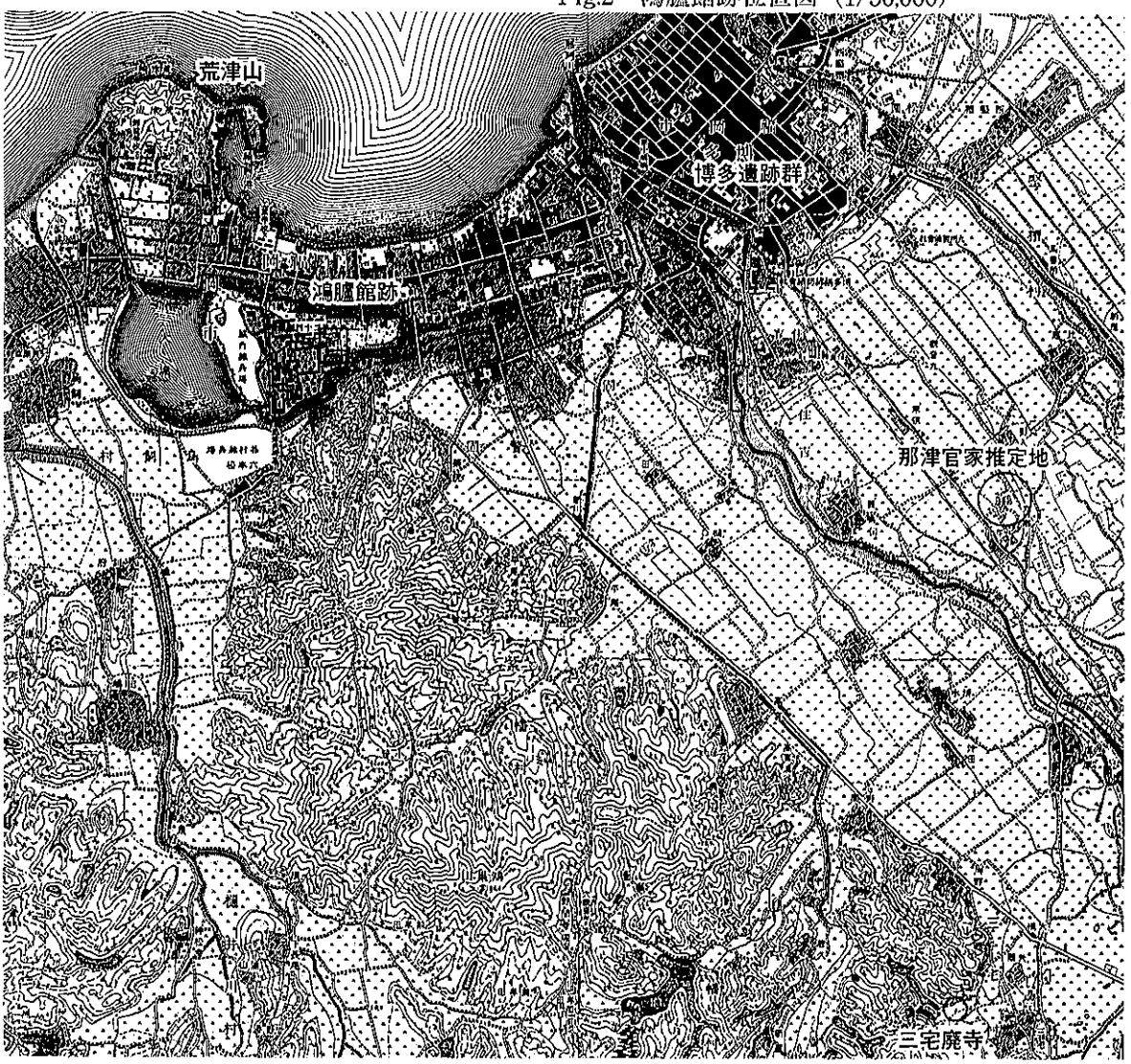


Fig.3　鴻臚館跡周辺地形図（明治33年、1/40,000）
アミは推定自然地形

の三ヶ所に置かれた。筑紫の鴻臚館は大宰府の管理下に置かれ、来日する外国船の監視と検問、乗員・貨物の収容と饗応を行った。また、警固所も併置され、博多湾の防衛機能も担っていた。

実際のところ、その当初こそ鴻臚館は遣唐使・遣新羅使の宿泊施設、新羅から来日した使節の受け入れ施設として機能したが、9世紀には新羅商人、10世紀以後は呉越・北宋商人の交易施設と化していった。

鴻臚館における貿易は、国家による管理貿易であった。西海道諸国に来着した交易船は、その国司によって博多湾に回航させられ、大宰府による臨検の後、鴻臚館に収容される。その後、交易が終了するまでの間、彼らは鴻臚館での滞在を余儀なくされた。基本的には、外国人の自由な国内往来は許されておらず、鴻臚館は交易所としてのみならず、隔離的な宿所として機能したのである。

筑紫鴻臚館に関する文献史料は、1047年の「大宋国商客宿房放火犯人」の捕縛・禁獄記事（『扶桑略記』永承2年11月9日条）を最後とする。鴻臚館の発掘調査の所見からも11世紀後半以降の遺構・遺物が皆無に等しいことから、鴻臚館の廃絶は11世紀半ばに求められる。おそらく、この放火によって焼失した後、再建されなかったのであろう。一方、11世紀後半から博多遺跡群における遺構・遺物の出土量が激増しており、貿易の拠点が鴻臚館から博多へと移ったことがうかがわれる。

さて、福岡平野周辺の古代の主要な遺跡について、通観しておこう。

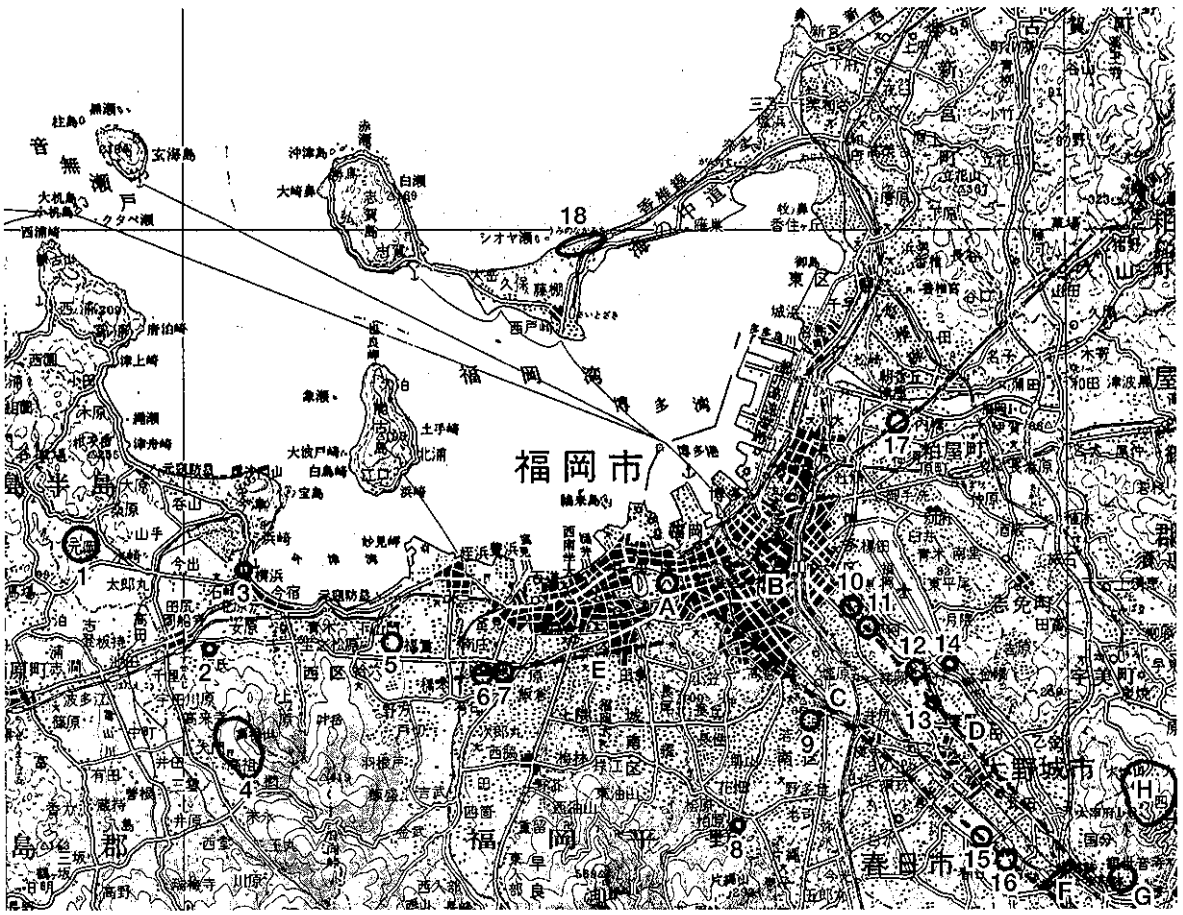


Fig.4　周辺遺跡分布図（1/200,000）

A　鴻臚館跡　　B　博多遺跡群　　C　官道（水城西門ルート）　　D　官道（水城東門ルート）　　E　官道　　F　水城
G　大宰府政庁跡　　H　大野城跡
1　元岡遺跡群　　2　徳永遺跡　　3　今山遺跡　　4　怡土城跡　　5　石丸古川遺跡　　6　有田遺跡群　　7　原遺跡
8　柏原M遺跡　　9　三宅廃寺　　10　比恵遺跡　　11　那珂遺跡　　12　板付遺跡　　13　高畑遺跡　　14　下月隈C遺跡
15　春日公園内遺跡　　16　九州大学筑紫キャンパス内遺跡　　17　多々良込田遺跡　　18　海の中道遺跡

糸島半島の南裾に展開する元岡遺跡群では、古代の一大製鉄遺構群が姿を現したほか、多数の木簡が出土している。木簡には、持統六年（692）と推定される「壬辰年韓鐵」や大宝元年（701）や延暦四年（784)などの紀年銘木簡の外、人名を記したものや、８世紀代の解除木簡など多様な内容が記されている。また、鴻臚館に供給した9世紀の瓦窯が調査されたほか、「酒」銘の土製私印が出土した。徳永遺跡の発掘調査は、谷頭の包含層を検出したのみであるが、多数の初期貿易陶磁器・緑釉陶器などが出土した。調査地点の西には、周船寺の地名があり、「主船司」であろうといわれているが、調査例はなく、不明である。周船寺に近い今宿の今山遺跡では、山裾が今津湾に落ちた際から、石で護岸したドック状遺構が出土した。10世紀頃とされる。早良平野と糸島平野を南北に画する高祖山には、756年吉備真備によって築かれた山城である怡土城が遺っており、土塁・石垣や倉庫などが発掘されている。

早良平野の低地部では、石丸・古川遺跡で、多量の初期貿易陶磁器が出土し、早良郡に関わる在地の官人の屋敷、もしくは城ノ原廃寺に関わるものとされる。有田遺跡群では、6世紀代の官衙風建物および早良郡衙跡が調査されている。また、有田遺跡から東接する原遺跡にかけて、古代の官道が検出されている。鴻臚館の南方から、肥前国の北部に向かうルートと考えられる。

福岡平野の南端では、柏原M遺跡から、初期貿易陶磁器とともに「郷長」などの墨書陶磁器が出土しており、郷長の居館跡と考えられている。

鴻臚館とは、入り海を隔てた東に位置する博多遺跡群では、初期貿易陶磁器、イスラム陶器、緑釉陶器、灰釉陶器等の陶磁器の外、鴻臚館式瓦、石帯、銅製袴帯、皇朝銭、墨書須恵器（「長官」「佐」「神主」など）が出土しており、鴻臚館と類似した内容が知られる。博多遺跡群内にあった「中島」の地名を倭名抄の「中島郷」にあて、「鴻臚中島館」に比定する意見もある。

博多駅南の比恵遺跡からは、6世紀後半の倉庫群や掘立柱による区画などが見つかっており、宣化紀にみえる「那津官家」に比定されている。また、比恵遺跡から那珂遺跡にかけては、点々と古代の倉庫群が発見されている。那珂郡衙も那珂遺跡あたりに作られていたと思われるが、現時点では確認されていない。「ミヤケ」地名に関しては、南区三宅が古くから注目されてきたが、ここでは8世紀から9世紀前半にかけての寺院址が調査されている（三宅廃寺)。下月隈Ｃ遺跡では、旧河川から「皇后宮職」の木簡が出土した。出土した土師器・須恵器から、8世紀後半を下限とする。

東区の多々良込田遺跡からも多量の初期貿易陶磁器を始め、石帯、須恵器硯、墨書土師器が出土、官衙が想定されている。「夷守駅」に当てる意見もあるようだが、山陽道推定線からは離れており、不明である。海の中道遺跡は、玄界灘に面する砂丘上に営まれた遺跡である。初期貿易陶磁器をはじめ、石帯・皇朝銭・製塩土器などが出土しており、大宰府に附属して海産物を調進した「津厨」であろうとされている。

大宰府の福岡平野に対する防衛線である水城には、東と西の二ヶ所に門が設けられていた。西門を通る官道は、春日市内の春日公園内遺跡や九州大学筑紫キャンパス内遺跡で発見されている。この延長は、前述した三宅廃寺の北側を通り、丘陵裾を通って鴻臚館まで直進したと推測されるが、福岡市内では都市化が進んでしまい、未だ検出されていない。

東門を出た官道は、福岡市博多区の高畑遺跡・板付遺跡・那珂君休遺跡・比恵遺跡などで発掘調査例があり、やはり北西に直進して、博多遺跡群の東側に向かっていた。博多遺跡群を「鴻臚中島館」と見る想定が可能なら、水城の東西の門を出た官道は、それぞれ鴻臚館の施設を目指したことになる。なお、この東門から北上する官道は、京から瀬戸内海北岸を通って大宰府に至る山陽道の末端にあたると考えられている。

3．鴻臚館跡の既往の発掘調査と成果

鴻臚館跡の発掘調査は、1951年の九州文化総合研究所による調査を第1次調査、1963年・1964年の福岡県教育委員会による調査を第2次調査とし、1987年の第3次調査以降福岡市教育委員会によって継続され、平成15年現在では第21次調査となる。

第1次調査は、福岡市教育委員会による第4次・第5次調査地点に含まれる。礎石列・雨落ち溝を検出したが、時期の特定ができず、鴻臚館とは断じられなかった。

第2次調査は、福岡高等裁判所庁舎改築に伴う緊急調査である。第2次調査では、裁判所と平和台野球場との間に谷が存在し、裁判所敷地は独立した小島状を呈することが確認された。

第3次調査は、平和台野球場外野スタンド改修工事に伴う調査であり、その成果を受けて第4次調査から確認調査に移った。以下、第3次調査以降の成果について、簡単に総括する。

鴻臚館跡は、南と北の施設からなり、東西に通る谷（堀）によって隔てられていた。以後の記述では、谷の南側の施設を南館、北の施設を北館と仮称する。

鴻臚館の造営以前は、西から東に伸びる二本の痩せ尾根状丘陵であり、群集墳が分布していた。

第Ⅰ期（7世紀後半）には、掘立柱建物が営まれていた。谷の南では直角に配置された南北棟2棟・東西棟2棟が、北側では南北棟1棟と西・南を画する柱列が検出された。南と北の施設は軸線を揃えず主軸方位も異なっており、建物構成も相似しない。なお、北館からは盛土造成を留めた石垣遺構が出土した。石垣は東西50m、南北9.7mでL字型を呈し、南東隅付近が最も高く、1.8mをはかる。

第Ⅱ期（8世紀前半）は、布掘り掘立柱列が設けられた時期である。この柱列は、柱芯間で東西71.5m、南北55.4mを区画し、東辺の中央に梁間二間、桁行三間の門をもつ。塀の区画内に建物遺構は見つからず、礎石建物の礎石が、後世の削平により失われたものと推測されている。南と北の施設は、同一方位、同一寸法で営まれており、統一した規格で設計されたものである。

第Ⅱ期の布掘り掘立柱列を営む前段階の埋め立てで、南北を隔てる谷は狭められ、幅約20mの堀状となる。特に北館では、高さ4.2mの石垣を築いて、盛土を受けていた。また、谷の最奥部を陸橋状埋立で切り離し、池状に整えた。陸橋の北側正面にも池を設け、南館から陸橋を渡って北館に入ると、正面に池を見て東と西に分かれて進むこととなる。現在検出されている北館の施設は、この池の東側に当たり、西側の未調査部分にも鴻臚館の施設が広がっていたことが推測できる。

第Ⅲ期（8世紀後半～9世紀前半）は、大型礎石建物の時期である。全体に削平によって礎石が失われており、遺存状態は悪いが、南館の西南側で並立する南北棟2棟、これと直交する東西棟1棟、北館の南辺東側で東西棟1棟が確認できた。谷は埋め立てでさらに狭まっていく。

第Ⅲ期以後については、建物遺構はまったく検出されておらず、構造的な時期区分はできない。廃棄土坑の出土遺物から、大きく9世紀後半～10世紀前半（第Ⅳ期）と10世紀後半～11世紀前半（第Ⅴ期）の二時期にくくることができる。

11世紀中頃以降は、鴻臚館に関わると推測される遺構・遺物は皆無である。この考古学的な状況が、1047年の「大宋商客宿房」放火犯人捕縛の史料に対応するとみれば、この放火による焼失以後、鴻臚館は再建されなかったものと考えられる。

中世後半期には、寺院が営まれていた形跡があるが、関ヶ原の合戦を経た1601年、黒田長政によってこの地に福岡城が築城された。鴻臚館の調査地点は、三の丸となり、谷のくぼみは完全に埋め立てられ、家老を筆頭に上級家臣らの屋敷地となる。明治維新後は陸軍歩兵24連隊の兵営、戦後は国体会場を経て、平和台野球場が造られた。

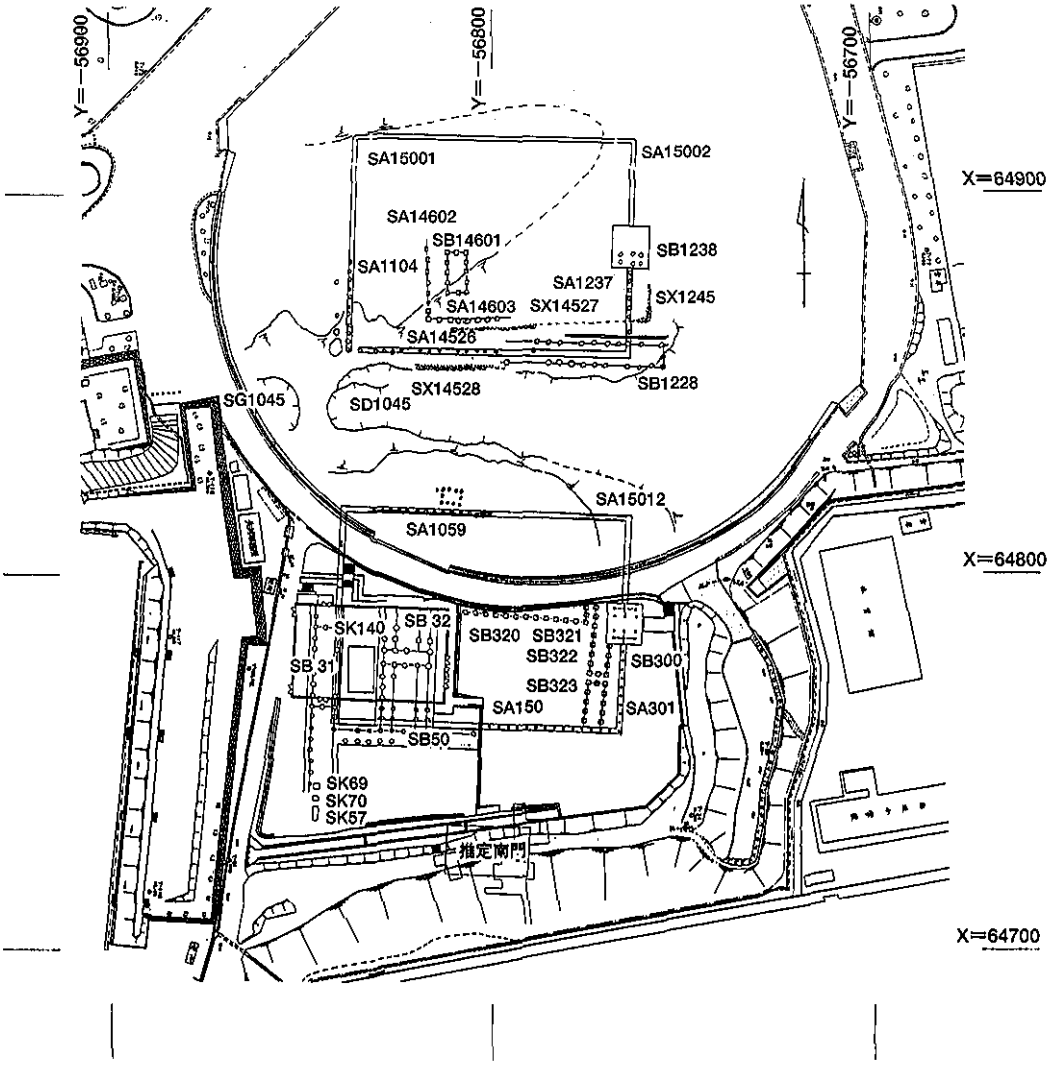


Fig.5　鴻臚館跡検出遺構概念図（1/2, 000）

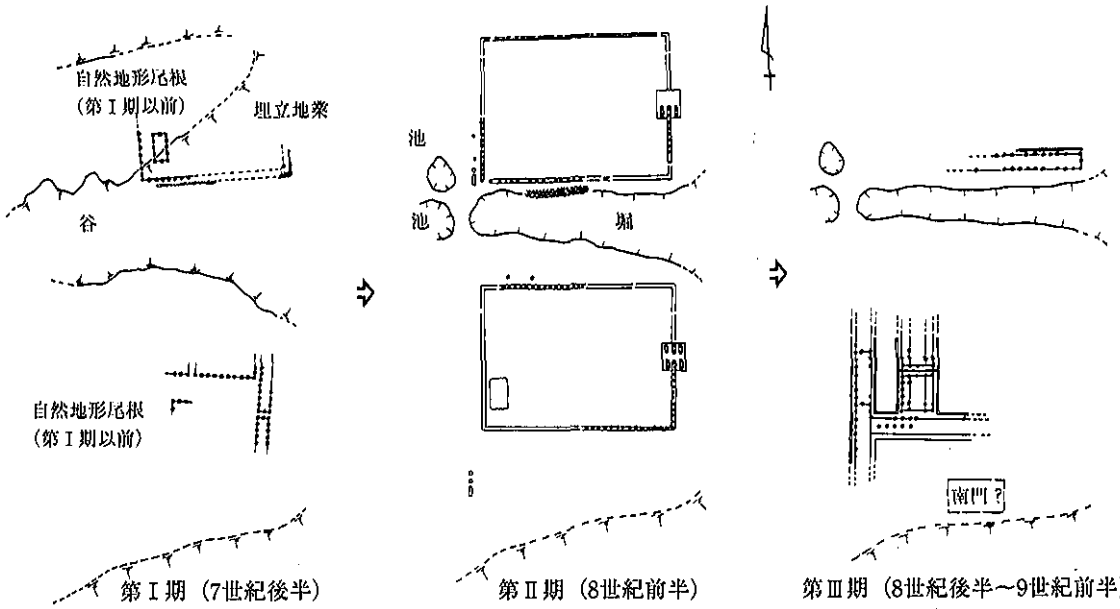


Fig.6　鴻臚館跡建物遺構模式変遷図

Tab. 2　鴻臚館関係調査一覧（平成16年度現在）

調査番号	調査次数	地　区	史跡内外区分	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者	文献
5102	鴻臚館1次	三の丸中央部	史跡内	ﾃﾆｽｺｰﾄ建設		510800～3日間	九州文化総合研究所	1･6･7
6301	鴻臚館2次	三の丸東郭	史跡内	裁判所建設	596	631007～631105	福岡県教育委員会	2
7605		内堀内壁	史跡外	地下鉄建設	14900	761201～771008	折尾学・池崎譲二・浜石哲也・山崎龍雄	3
8747	鴻臚館3次	三の丸中央部	史跡内	野球場改修	650	871225～880120	山崎純男・吉武学	7・8
8829	鴻臚館4次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	856	880727～881210	山崎純男・吉武学	7・13
8910	鴻臚館5次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1200	890420～891207	山崎純男・吉武学	7・13
9005	鴻臚館6次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1300	900409～910131	山崎純男・吉武学	7・13
9130	鴻臚館7次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1000	910501～920331	山崎純男・瀧本正志	9・13
9218	鴻臚館8次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	1670	920615～921030	山崎純男・瀧本正志	10
9236	鴻臚館9次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	430	920910～930331	山崎純男・瀧本正志	10・13
9326	鴻臚館10次	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	450	930816～940228	田中壽夫・瀧本正志	11
9420	鴻臚館11次	三の丸中央部	史跡内	史跡整備	50	940606～940731	田中壽夫・瀧本正志	12
9432	鴻臚館11次	三の丸西部郭	史跡内	確認調査	850	940801～950320	田中壽夫・瀧本正志	12
9463	鴻臚館11次	三の丸南側土塁	史跡内	確認調査	60	950201～950217	田中壽夫・瀧本正志	12
9537	鴻臚館12次	三の丸中央部	史跡内	確認調査	300	951101～960329	田中壽夫	14
9620	鴻臚館13次	三ノ丸中央郭	史跡内	確認調査	450	960704～961204	田中壽夫	14
9736	鴻臚館14次	三ノ丸中央郭	史跡内	確認調査	204	970818～980131	田中壽夫	15
9807	鴻臚館15次	平和台球場解体	史跡内	公園整備	230	980410～981020	田中壽夫・池崎譲二	16
9831	鴻臚館16次	平和台球場跡地	史跡内	試掘調査	930	980922～990120	塩屋勝利・池崎譲二	16
9910	鴻臚館17次	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	3500	990422～000315	塩屋勝利・池崎譲二	17・18
0008	鴻臚館18次	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	1750	000425～010316	塩屋勝利・池崎譲二	18
0109	鴻臚館19次	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	2000	010521～020329	折尾　学・池崎譲二	19
0218	鴻臚館20次	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	1200	020513～030331	折尾　学・大庭康時	20
0309	鴻臚館21次	平和台球場跡地	史跡内	確認調査	2425	030506～040331	折尾　学・大庭康時	本書
0415	鴻臚館22次	平和台球場跡地	史跡内	確認調査		040401～050331	折尾　学・大庭康時	

凡例　・確認調査：福岡城跡・鴻臚館跡の調査　・史跡整備：教育委員会所管事業に伴う調査
・公園整備：都市整備局所管事業に伴う調査　・工事名のある調査：開発に伴う緊急調査

Tab. 3　鴻臚館跡関係調査報告書一覧

1	福岡県教育委員会	「史跡福岡城発掘調査概報」	福岡県文化財調査報告書第34集	1964
2	高野孤鹿	『平和台の考古史料』	稿本	1972
3	福岡市教育委員会	「福岡城址－内堀外壁石積の調査－」	福岡市第101集	1983
4	池崎譲二・森本朝子	「福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション」	福岡市第101集	1983
5	弓場知紀	「出光美術館の高野コレクション」	福岡市第101集	1983
6	田崎博之・矢野佳代子	「九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物」	福岡市第101集	1983
7	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅰ発掘調査概報」	福岡市第270集	1991
8	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅱ」	福岡市第315集	1992
9	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡Ⅲ」	福岡市第355集	1993
10	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡4　平成4年度発掘調査概要報告」	福岡市第372集	1994
11	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡5　平成5年度発掘調査概報」	福岡市第416集	1995
12	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡6　平成6年度発掘調査概要報告」	福岡市第486集	1996
13	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡7　－鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告－」	福岡市第487集	1996
14	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡8　－平成7・8年度発掘調査概要報告－」	福岡市第545集	1997
15	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡9　平成9年度発掘調査概要報告」	福岡市第586集	1998
16	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡10　平成10年度発掘調査概要報告」	福岡市第620集	1999
17	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡11　平成11年度発掘調査報告」	福岡市第695集	2001
18	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡12　平成12年度発掘調査報告」	福岡市第733集	2002
19	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡13　平成13年度発掘調査報告」	福岡市第745集	2003
20	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡14」	福岡市第783集	2004
21	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡15　平成14年度発掘調査報告書」	福岡市第838集	2005

（福岡市第…集は、福岡市埋蔵文化財調査報告書第…集の略）

4．平成15年度の調査事業概要

（1）発掘調査の組織

① 調査および整備指導

鴻臚館跡調査研究指導委員会（第8期2年次）

委員長	東京大学名誉教授	笹山　晴生（国史学）
副委員長	福岡大学教授	小田富士雄（考古学）
委員	元興寺文化財研究所所長	坪井　清足（考古学）
	九州大学名誉教授	横山　浩一（考古学）
	奈良国立文化財研究所長	町田　　章（考古学）
	九州大学名誉教授	西谷　　正（考古学）
	千葉大学教授	河原　純之（考古学）
	九州大学名誉教授	川添　昭二（国史学）
	京都橘女子大学教授	狩野　　久（国史学）
	京都学園大学教授	八木　　充（国史学）
	東京大学教授	佐藤　　信（国史学）
	元奈良国立文化財研究所長	鈴木　嘉吉（建築史学）
	九州芸術工科大学名誉教授	澤村　　仁（建築史学）
	工学院大学教授	渡辺　定夫（都市工学）
	神戸芸術工科大学教授	杉本　正美（造園学）
	京都大学名誉教授	中村　　一（造園学）

② 発掘調査事業主体

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	生田征生
調査総括		文化財部長	堺　　徹
庶務担当		文化財整備課長	平原　豪
		管理係長	市坪敏郎
		管理係	御手洗潔
調査担当		文化財部課長（鴻臚館跡調査担当）	折尾　学
		文化財部主査（鴻臚館跡調査担当）	大庭康時

（2）調査事業の概要

①鴻臚館跡調査研究指導委員会

鴻臚館跡調査研究指導委員会委員をはじめ、文化庁調査官、福岡県教育庁、福岡市関連部局担当者の出席をえて、平成15年9月25日・26日に開催した。25日は、発掘調査現場の視察を行ない、平成15年度調査で検出した南館の第Ⅱ期布掘り柱列さらに瓦溜まりなどの検討を行なった。翌26日は審議を行なった。主な議題は、平成14年度発掘調査の成果報告、平成15年度発掘調査の中間報告、鴻臚館跡史跡指定の申請、今後の発掘調査計画、整備計画の見直しなどである。その結果、国史跡指定申請を行なうことへの了解を得、第Ⅳ期発掘調査終了後の整備を本格整備までの繋ぎの仮整備と位置付けることとした。

会議終了後、笹山委員長・町田委員から、平成15年度の調査成果と検討内容に関する記者発表が行なわれた。

②発掘調査

平和台球場跡地の発掘調査は、第Ⅰ期調査地点北側での遺構の広がりをさぐることを目的とし、南半分を第Ⅳ期、北半分を第Ⅴ期として実施している

これまでの調査結果では、第Ⅰ期調査で確認されていた筑紫館・鴻臚館建物の北側に東西にのびる堀がみつかり、さらに堀の北側にも筑紫館・鴻臚館時代の建物が存在したことが明らかとなった。堀を挟んだ第Ⅱ期の建物区画が、同一規格・構造であることが知られ、南館、北館の存在が確実視されるにいたっている。

平成15年度調査では、北館第Ⅱ期建物区画の北東・北西角を検出、北館南西角に近接した便所遺構の発掘調査を行ない、南館北東部分の調査を実施した。この北館両角の確認をもって、鴻臚館客館部分の範囲が確定したものとし、文化庁に対して、鴻臚館跡の国史跡指定を申請した。また、南館北東部において、11世紀前半の区画溝を検出し、建物遺構が後世の削平によって失われてしまった第Ⅳ期以降についても、第Ⅲ期以前の範囲が踏襲されていたことを明らかにした。

なお、平成15年度調査区には、福岡市教委による鴻臚館跡発掘調査のきっかけとなった昭和63年度の第3次調査区東半分が含まれている。平成15年度調査の詳細は、次章で報告する。



Ph.1　鴻臚館跡調査研究指導委員会
現地指導風景



Ph.2　便所遺構SK1124調査作業風景

③公開事業

平成15年度調査の記録ビデオを撮影するとともに、平成14年度調査の成果をＤＶＤに編集し、鴻臚館跡展示館のビデオコーナーにおいて公開した。

また、鴻臚館跡展示館に常設提示している解説パネルの一部を、更新した。



Ph.3　更新した展示パネル

第二章　平成15年度調査の記録

1　発掘調査の方法と経過

(1) 発掘調査の方法

平成15年度調査地点は、旧平和台球場の左翼側スタンドを含み、厚く盛土されていた。一方フィールド部分は、遺構面を大きく切り下げた後、再び盛土してグラウンドを造っていた。これらの盛土を含む表土はバックホーで除去、以下については人力で掘削した。

遺構面としては、近世福岡城三の丸と鴻臚館との最低二面が想定された。したがって、発掘調査対象としては、福岡城時代の上層と、鴻臚館時代の下層とに分けて遺構検出を行なうこととした。

鴻臚館の南館と北館とを隔てる谷部分については、バックホーでトレンチを掘削し、その堆積状況を確認することとした。なお、このトレンチ調査は、トレンチ壁面から橋脚遺構を検出するに及んで、調査区の拡張が必要となり、平成16年度以降にまたがって調査を継続している。

また、北館の北東・北西角の確認を目的とした調査では、これまでに規模が判明している南館の第Ⅱ期の区画を参考に国土座標での位置の割り出しを行ない、該当部分に小範囲のグリッドを設定し、確認調査を実施した。確認調査は遺構検出に留め、掘削を伴う精査は行なっていない。

(2) 発掘調査の経過

平成15年度調査区の発掘調査は、2003年4月7日の03－1区設定から始まり、梵鐘鋳造遺構SK15027の最終的な保存処理の都合から、2005年12月現在まで一部の作業が継続している。以下に2004年12月までの主要な経過を記す。

2003年4月3日　03－1区を設定
4月22日　03－1区埋め戻し。
5月8日　03－2区を設定。表土掘削。
5月22日　03－3区の表土掘削を開始する
5月29日　鴻臚館跡調査研究指導委員会小田富士雄副委員長に、03－2区の第Ⅱ期布掘り遺構の遺構検出状況についてご指導いただく。03－2区埋め戻し。
7月19日　早朝、豪雨。鴻臚館跡に異常はなかったが、大野城跡などで崩落の被害甚大。
9月3日　瓦溜遺構SK15017から唐三彩盤出土。
9月25日　鴻臚館跡調査研究指導委員会による現地視察
9月26日　鴻臚館跡調査研究指導委員会審議。審議終了後記者発表
10月14日　03－4区に着手
2004年4月21日　SD15052より「開」字石印出土
6月2日　03－4区埋め戻し
7月5日　梵鐘鋳造遺構SK15027を確認
12月21日　鴻臚館跡調査研究指導委員会による現地視察
12月22日　鴻臚館跡調査研究指導委員会審議。審議終了後記者発表
12月23日　現地説明会
12月24日　保存処理着手までの間、SK15027を埋め戻し保全を図る

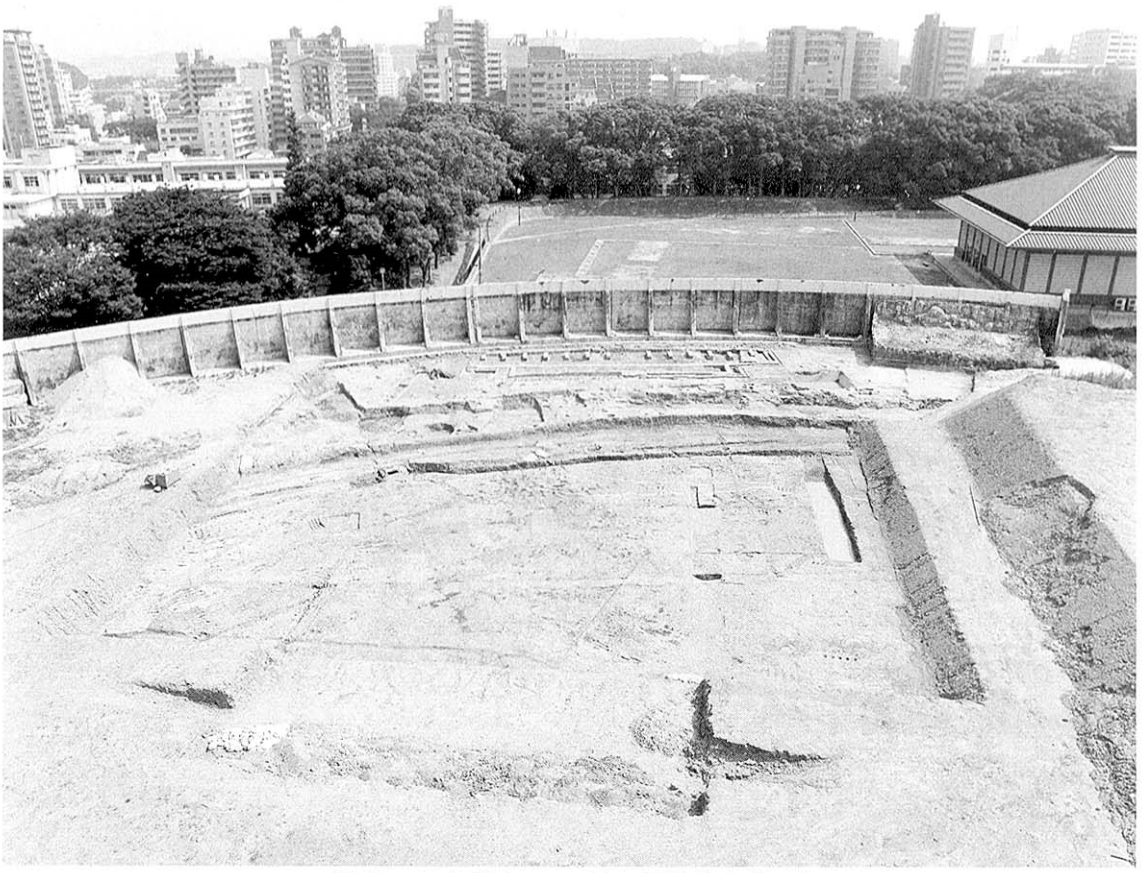
2　調査の概要

発掘調査区は、調査に着手した順に、北館北西角の検出を目的とした03－1区、北館北東角の検出を目的とした03－2区、南館北東部分を対象とした03－3区、北館南西の便所遺構を対象とした03－4区にわかれる。このうち、鴻臚館後の調査計画に則った調査区は03－3区で、03－1区と03－2区は第Ⅴ期調査対象範囲に、03－4区は平成12年度調査区に含まれる。

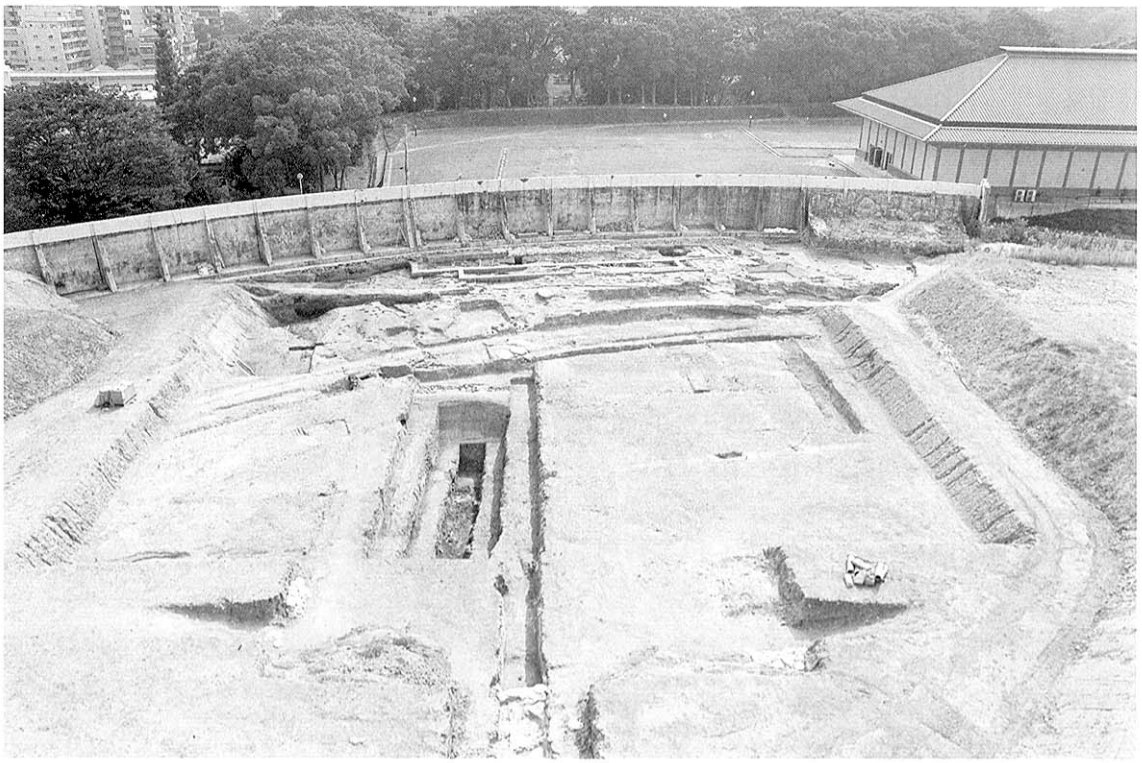
（1）基本層序

03－3区を例にとって基本層序を説明する。03－3区では、自然地形の岩盤は、調査区西側の一部に見られるだけである。鴻臚館の遺構は、丘陵の尾根部を削って谷を埋め立てた造成面の上に営まれている。この造成土は丘陵の高所側からの細かい単位の斜堆積として現れている。第Ⅱ期の布掘り掘立柱列はこの造成土に切り込んでおり、造成が少なくとも第Ⅱ期以前（8世紀前半以前）に行われたことを示している。第Ⅱ期以後の造成については、後世の削平のため明らかではない。その後、少なくとも中世後半までは谷部分を除いて大きな造成はなく、鴻臚館の造成土を中世後半の包含層がほとんど直に覆っている。

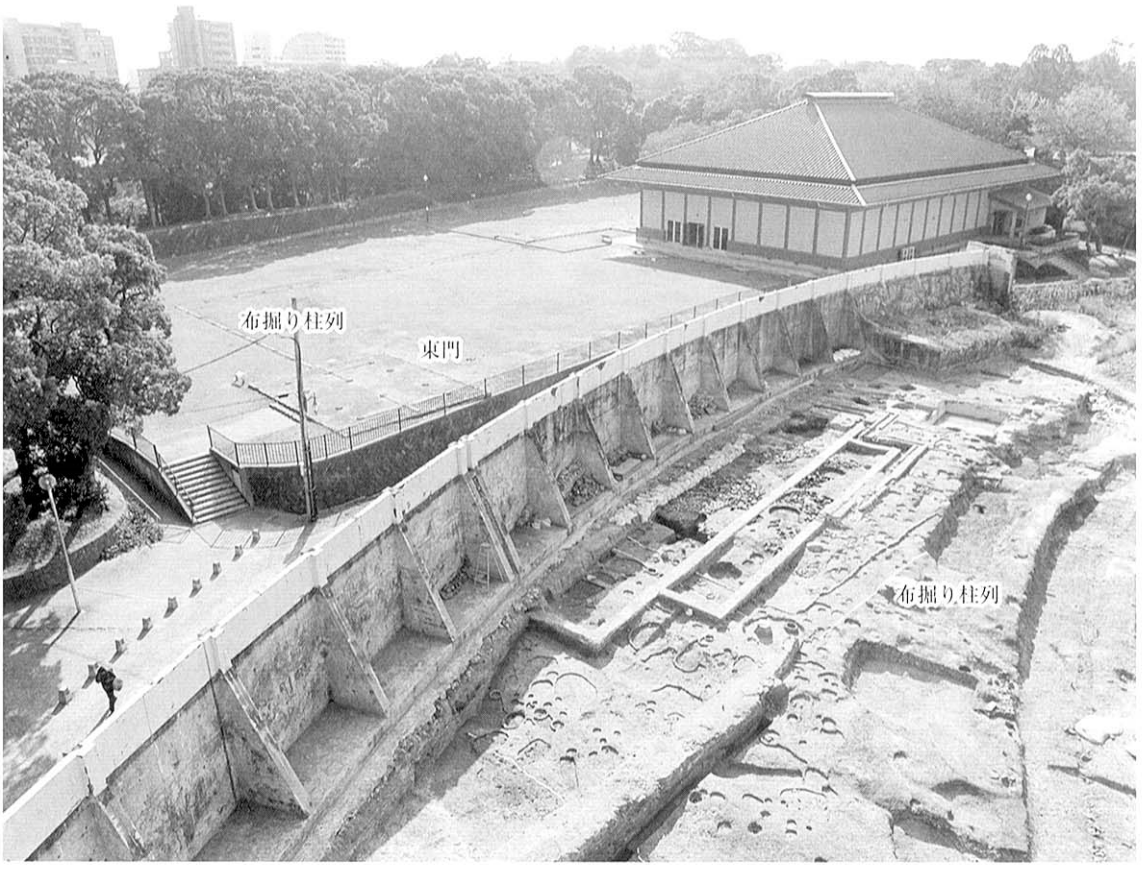
谷を大規模に埋め立て、平坦な地表面を作り上げたのは、近世初頭の福岡城築城による。しかし、主として第2次世界大戦後の造成によって、福岡城の遺構面すら削られ、屋敷地の礎石など地表に営まれた遺構は姿を消している。



Ph.4　平成15年度調査03－3区上層遺構全景（北より）



Ph.5　平成15年度調査03－3区下層遺構全景（北より）



Ph.6　下層遺構と鴻臚館跡展示館（北東より）

(2) 上層遺構の概要

03－3区、旧平和台球場外野スタンドの盛土下において検出した。陸軍24連隊関係としてはコンクリート基礎を廻らせた兵舎跡SB15011、福岡城関係では柱穴および木材を組んだ建物基礎SX15080・SX15086・SX15121を調査した。

また、中世の遺構として、地下式横穴SK15013を検出したが、崩落の危険が高く完掘は断念した。

(3) 下層遺構の概要

鴻臚館第Ⅰ期（7世紀後半）に該当する遺構は、検出されていない。

鴻臚館第Ⅱ期（8世紀前半）の遺構としては、布掘り掘立柱列・便所遺構を検出した。布掘り掘立柱列は、03－1区で北館の北西角、03－2区で北館の北東角、03－3区で南館北辺から東辺にかけての部分を調査した。便所遺構は、03－4区において北館南西角のすぐ外側から2基検出した。これらの遺構は、盛土造成を切り込んで営まれていた。

鴻臚館第Ⅲ期（8世紀後半～9世紀前半）では、梵鐘鋳造遺構SK15027を検出した。南館の北東角近くで検出したもので、角に接して鐘楼が造られた可能性を強く示すものといえる。

第Ⅳ期以降では、建物遺構は確認できなかったが、第Ⅴ期の溝を検出することができた。東西SD15098・南北SD15052をしめすこれらの溝は、建物遺構が削平で失われた鴻臚館最終段階の、南館の区画を直接物語る遺構としてその意義は大きい。

この他、時期は限定できないが、谷部から南館と北館を結ぶ橋脚遺構を検出している。



Ph.7　03－3区2トレンチ（谷部分、南東より）

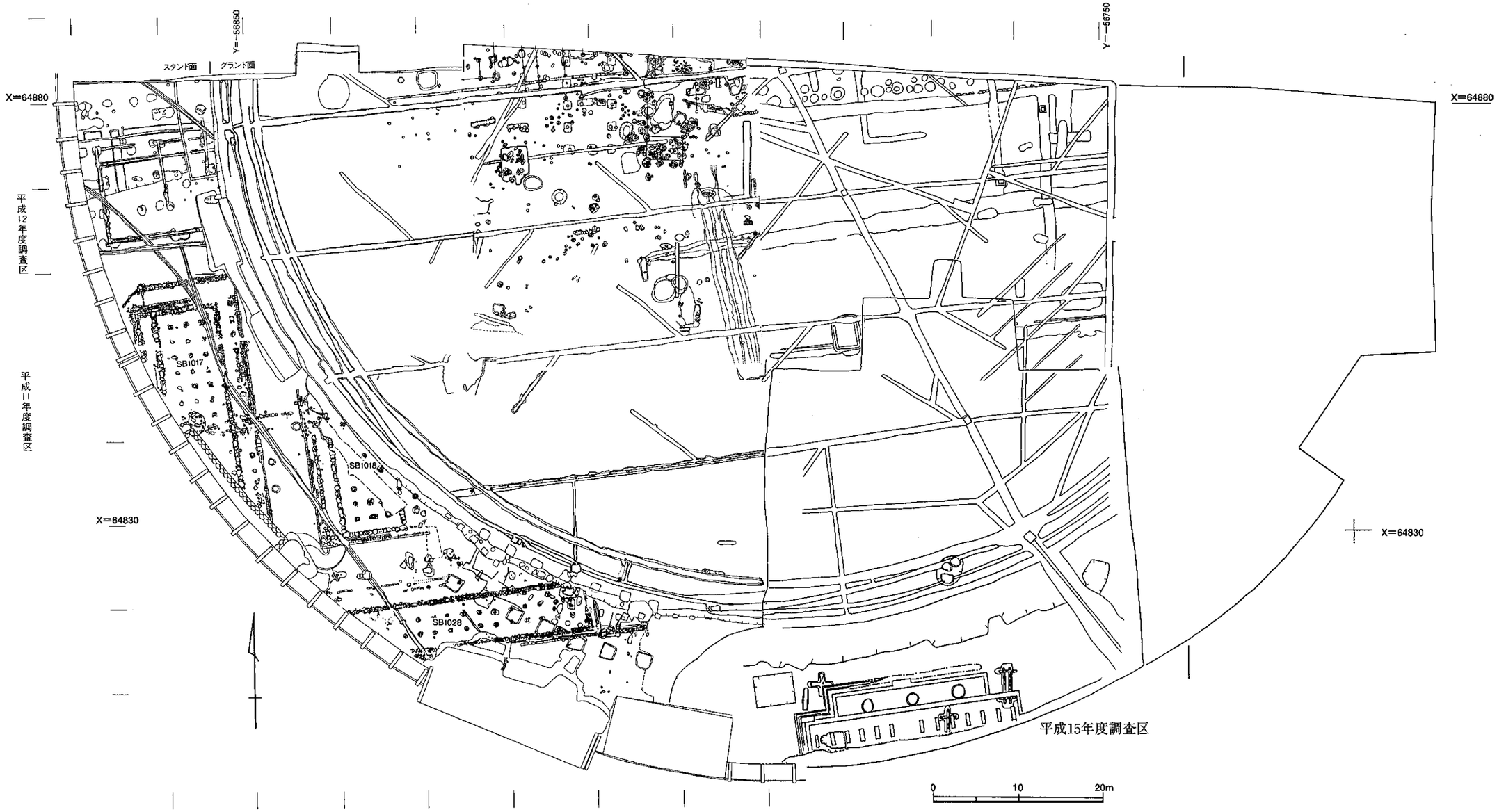


Fig.7　第Ⅳ期調査区　平成11～15年度　中世～現代遺構平面図（1/500）

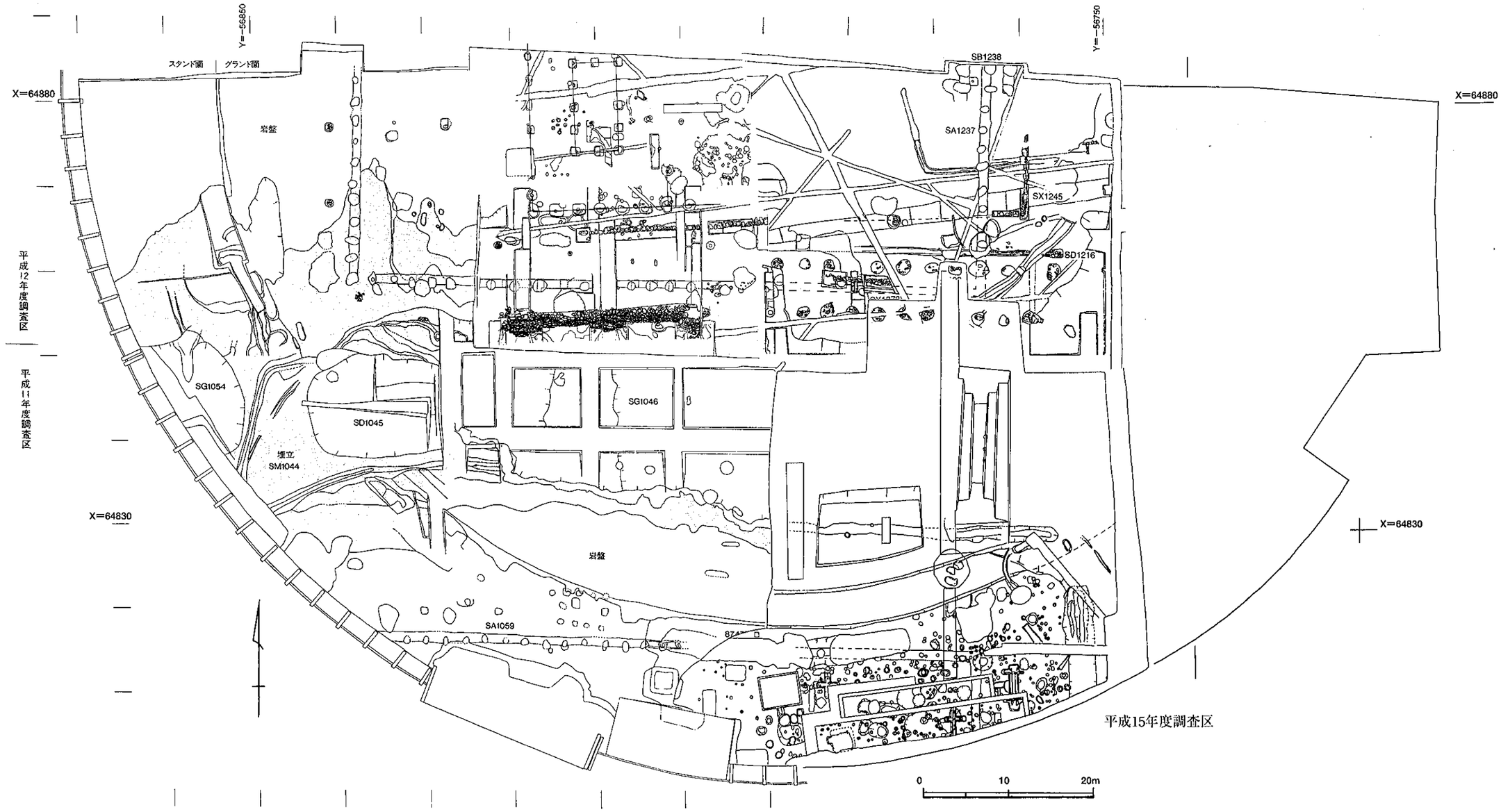


Fig.8　第Ⅳ期調査区　平成11～15年度　古代～中世遺構平面図（1/500）

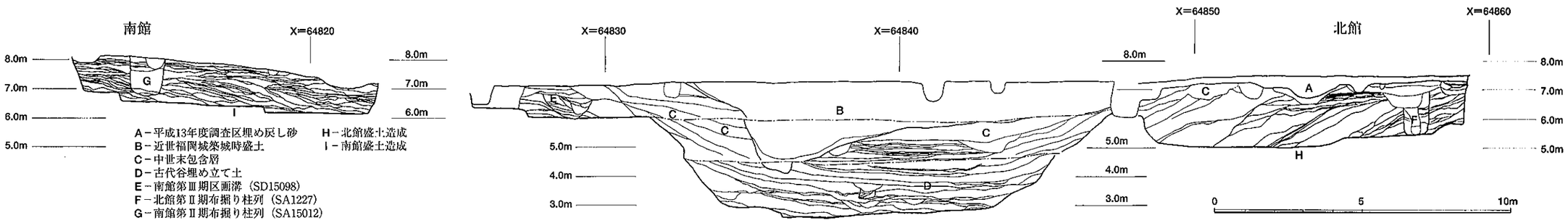


Fig.9　03-3区2トレンチ西壁土層実測図（1/150）

3．遺構と遺物

平成15年度調査区で検出した遺構は、遺物の出土があり遺構番号を振ったもので202基を数える。以下では、主要な遺構・遺物について、各調査区の順にその概略を記すことにする。

（1）03－1区

鴻臚館北側の遺存状況と広がりを確認するため、第Ⅴ期調査対象地内に設定したグリッドである。全体規模が判明している南館の第Ⅱ期区画を参考にして、北館第Ⅱ期区画の北西角と推定される位置の国土座標値を求め、遺構検出を試みた。

地山岩盤上で、第Ⅱ期区画北西角を確認することができた。調査面積64㎡。

（2）03－2区

03－1区同様に、北館第Ⅱ期区画北東角推定位置に設けた調査区である。盛り土整地面上から、第Ⅱ期区画北東角を確認することができた。調査面積114㎡。

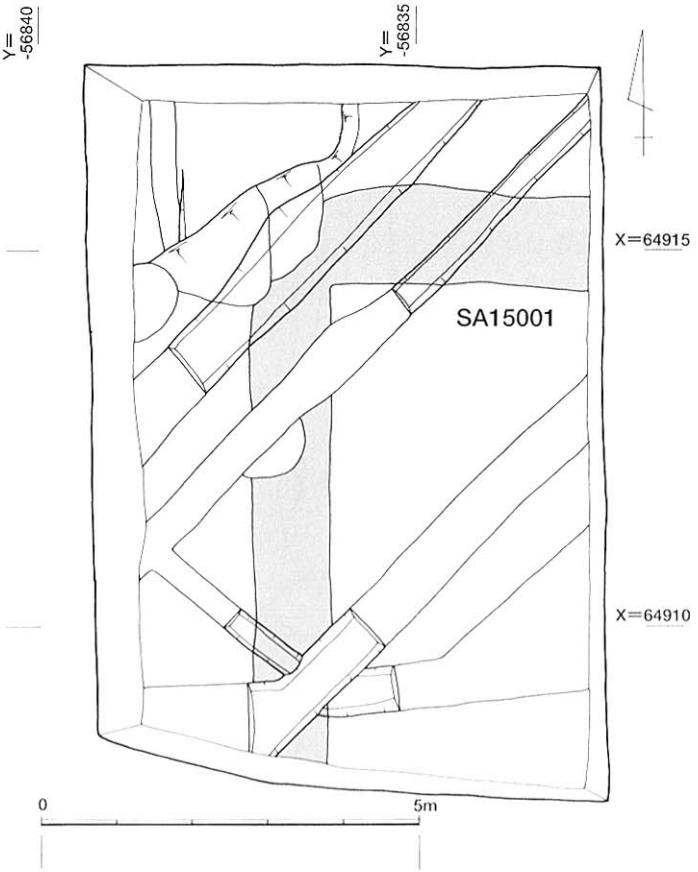


Fig.10　03－1区遺構全体図（1/100）



Ph.8　03－1区全景（南より）

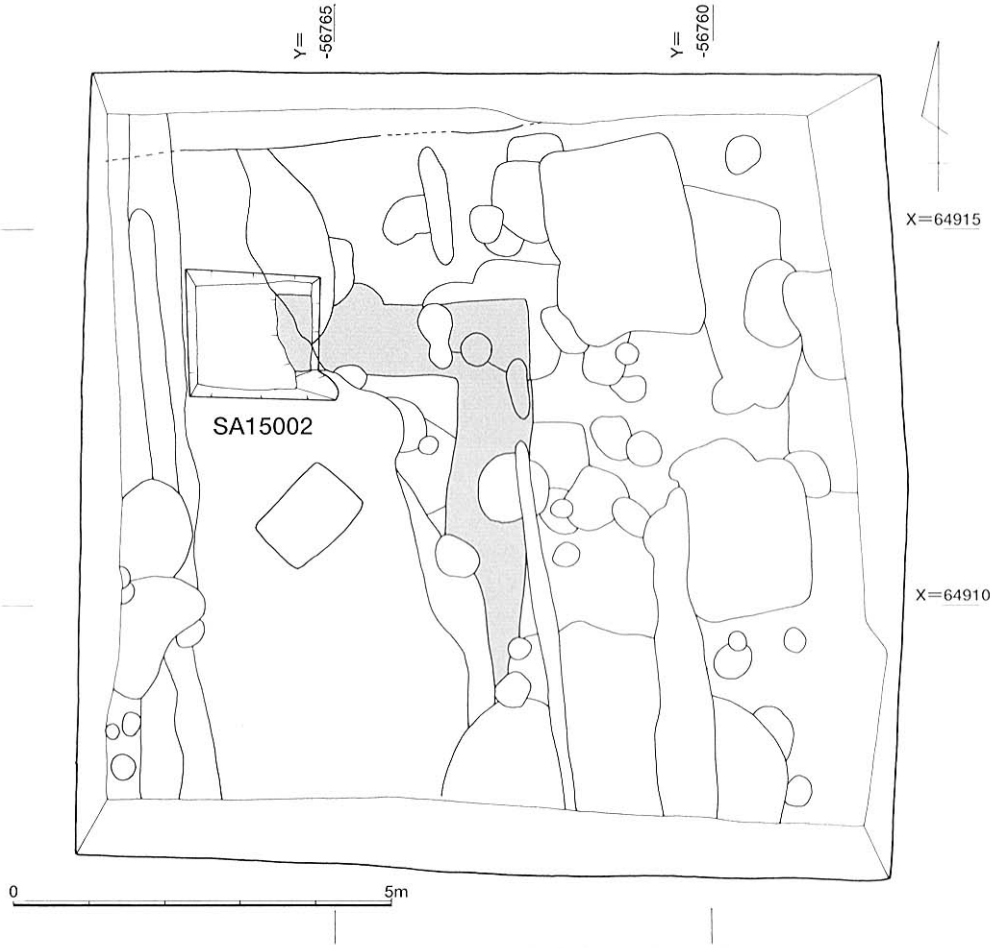


Fig.11　03－2区遺構全体図（1/100）



Ph.9　03－2区全景（南より）

（3）03－3区

鴻臚館跡発掘調査計画第Ⅳ期調査の、6年次目に当たる調査地点である。平成11年調査区の東側、平成13年調査区の南側に当たる。鴻臚南館第Ⅱ期布掘り掘立柱列の北東角、および南館と北館を隔てる谷の北向き斜面を検出することを目的として、調査区を設定した。福岡市教育委員会による発掘調査の端緒となった第3次調査区の東半分を含んでいる。

旧平和台球場左翼スタンドと外野グラウンド部分にあたるが、グラウンド部分の削平は著しく外野スタンド部分とは、1m以上の段差がつく。しかし、グラウンド部分の大半は鴻臚館の谷部分に当たり、本来遺構が営まれていなかった可能性が高い。

以下、時期別に遺構とその出土遺物について概略を報告する。

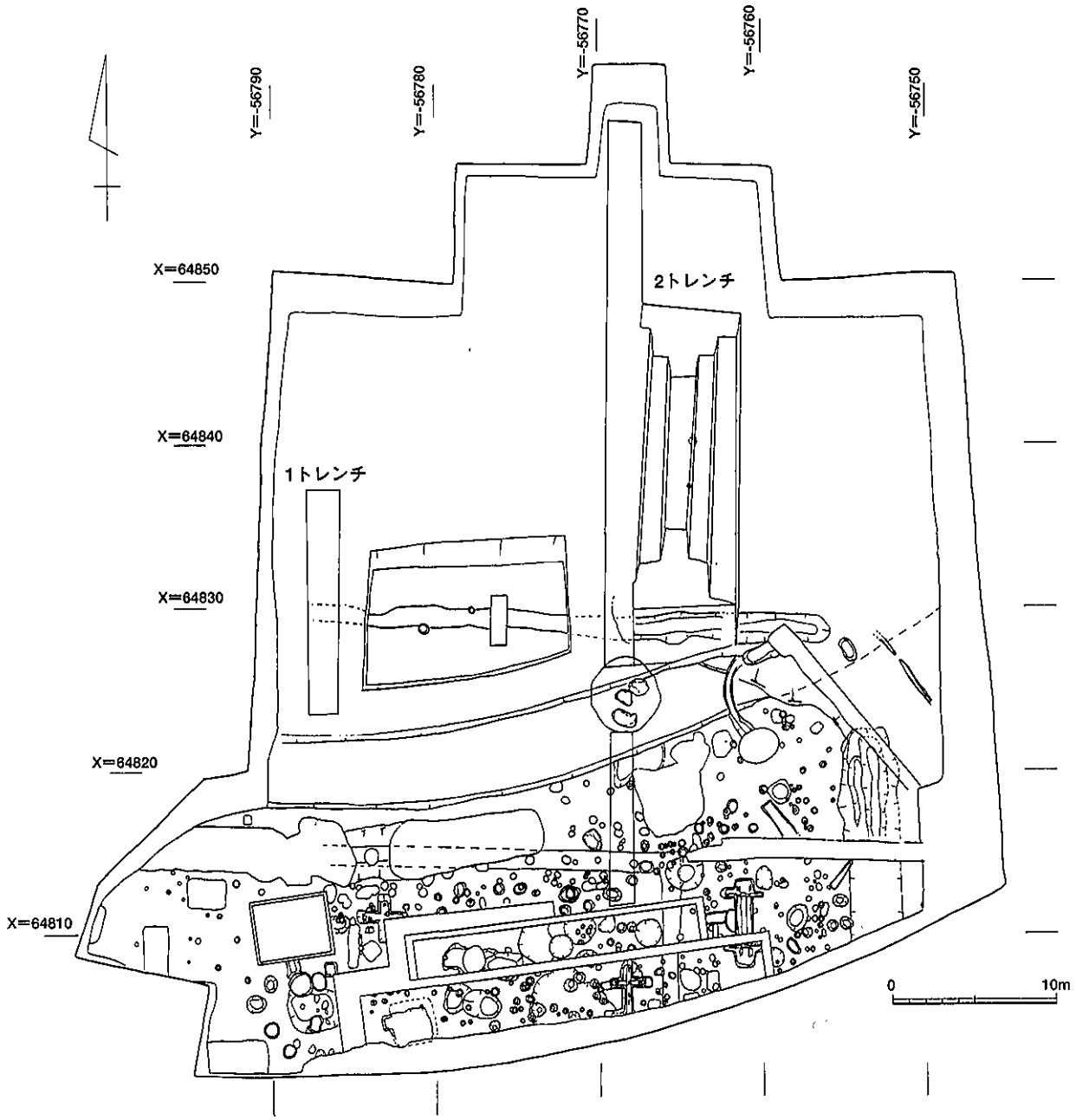


Fig.12　03－3区遺構全体図（1/400）

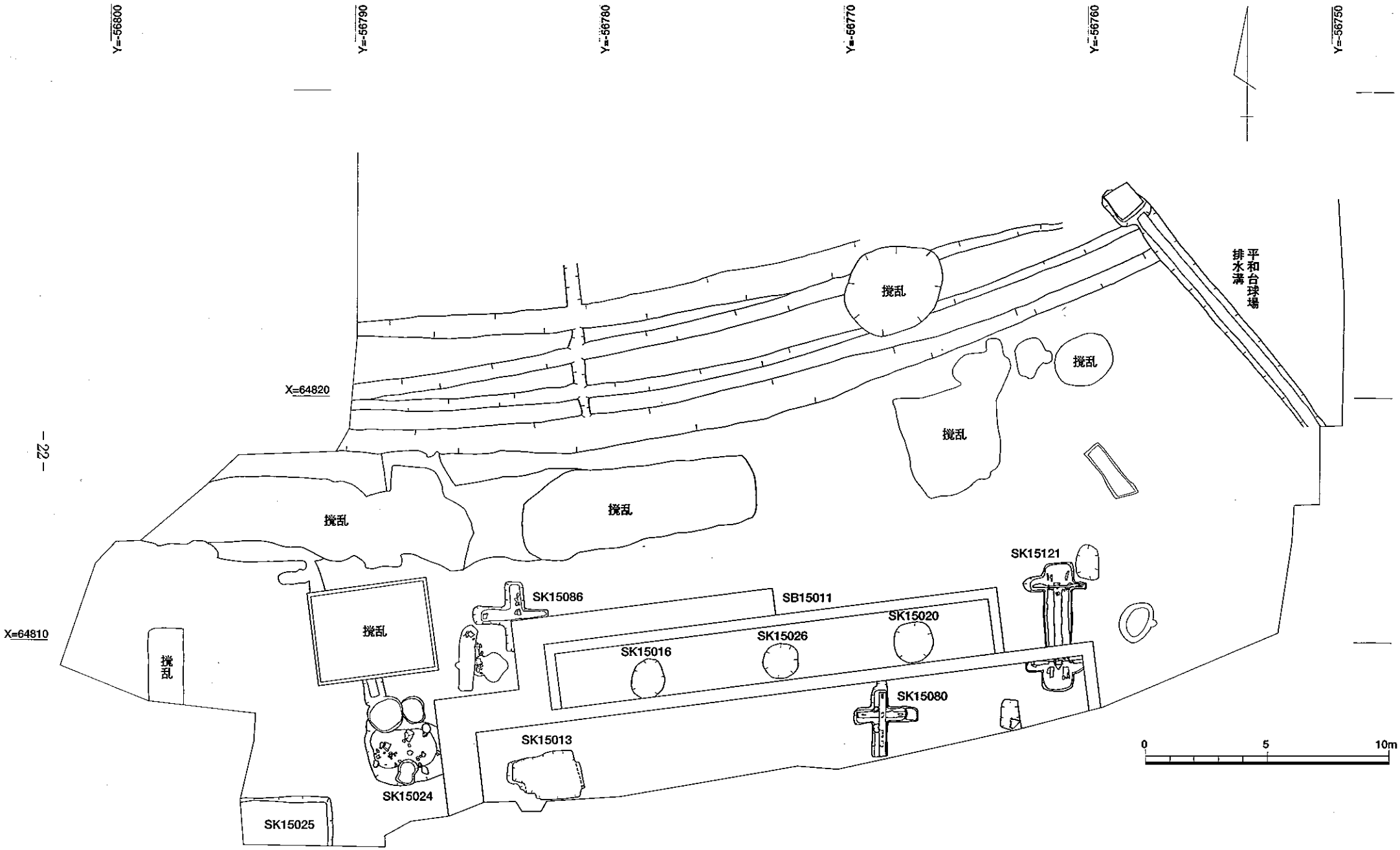


Fig.13　上層遺構全体図（1/200）

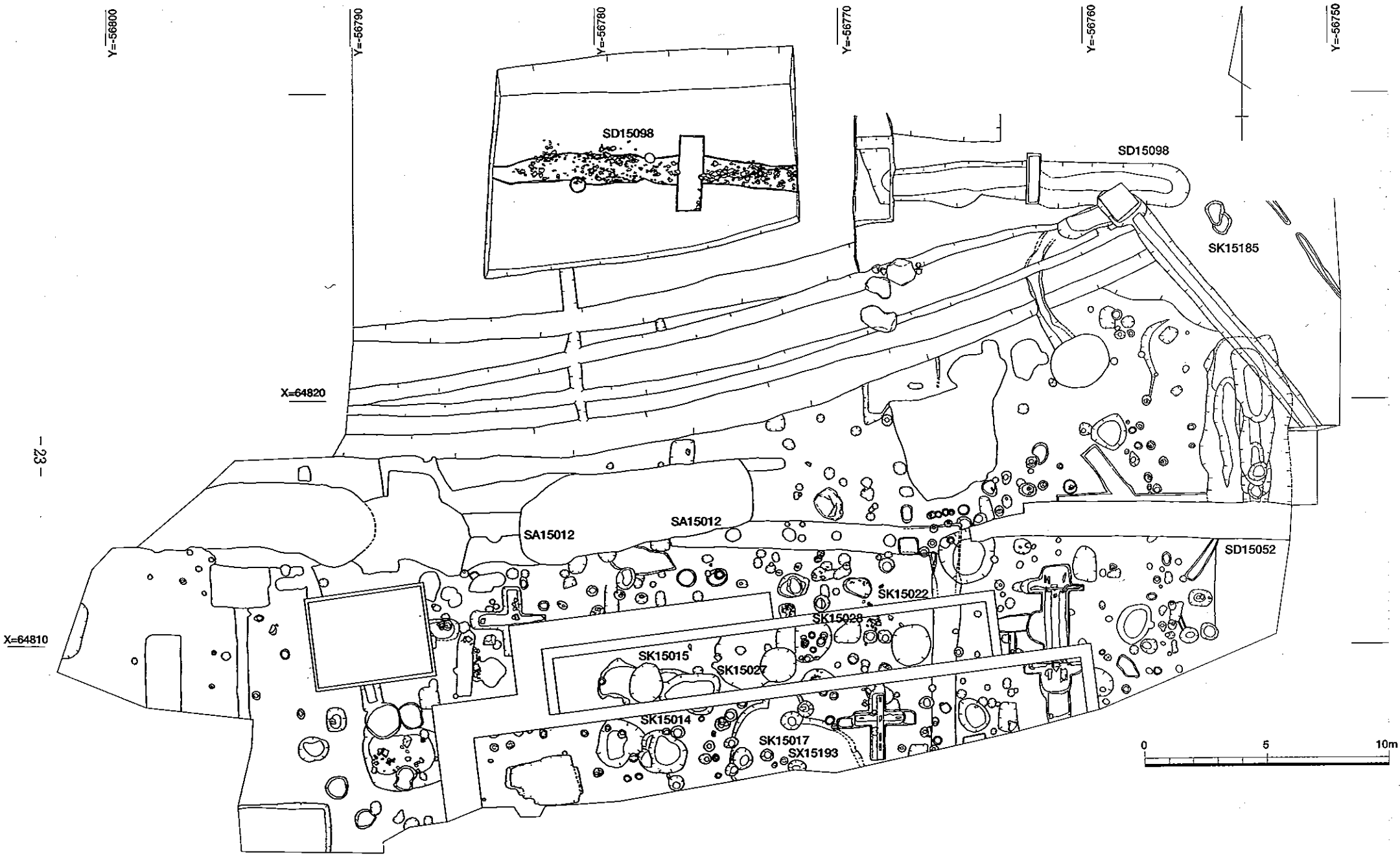


Fig.14　下層遺構全体図（1/200）

A．上層遺構群（中世～）

旧平和台球場外野スタンドの盛り土下から検出した。大日本帝国陸軍歩兵第24連隊の兵舎遺構と、福岡城三の丸屋敷地関係遺構、中世の地下式横穴遺構を調査した。このほかにも、小規模な柱穴の中には中・近世に該当する遺構があると思われるが、出土遺物から時期の特定が困難な遺構に関しては、所属時期の判断を保留している。

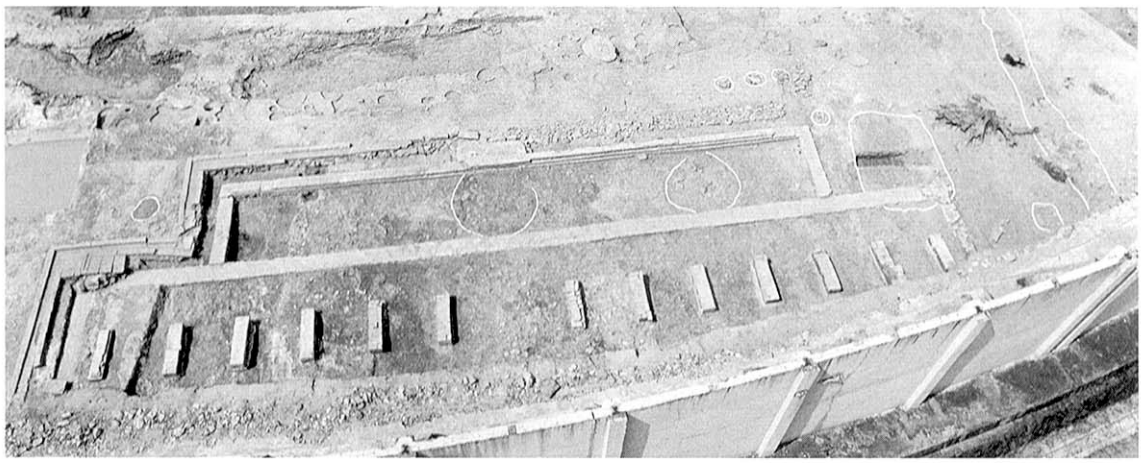
SB15011

陸軍歩兵第24連隊の建物遺構である。

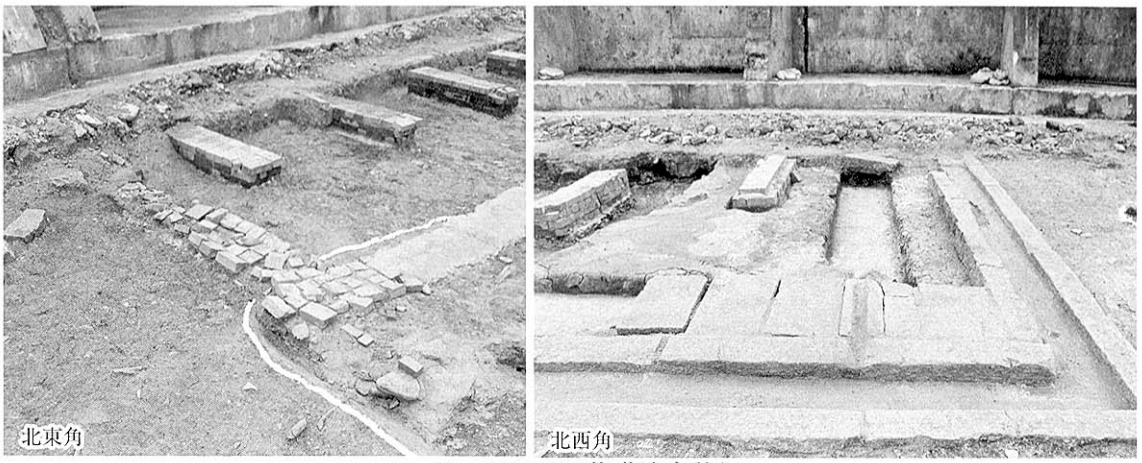
溝掘りをおこなった内側を栗石で充填し、コンクリートで帯状の基礎を作る。さらにその上に、レンガを積み上げコンクリートで覆う。帯状に配されたコンクリートの内側には、レンガを積み上げた台を13基並べる。

コンクリート帯の北辺中央には、コンクリートで階段が敷設され、出入り口が作られていたものと推測できる。北西隅では、花崗岩の切石を並べてコンクリート製の排水溝を覆っている。

連隊建物遺構は、平成12年度調査においても検出されている。それらは、栗石による礎石と布基礎を配したもので、今回のSB15011とはまったく異なる。連隊兵舎の具体的な配置、その機能的な使い分けは、時期的にも変化しているようで、完全な資料は残っていない。そのため、SB15011の性格は不明と言わざるを得ない。



Ph.10　SB15011全景（南より）



Ph.11　SB15011基礎遺存状況

SK15013

中世の地下式横穴遺構である。地山岩盤を掘り込んで営まれている。

西側に竪穴状の出入り口を設ける。出入り口は、一辺約80cmの方形を呈し、180cm以上直に掘り込まれている。出入り口の正面壁面（西面）には足掛けのくぼみが、40～50cm間隔で縦一直線に掘り込まれている。

地下室部分は、天井が大きく崩落し、内部に落ち込んでいた。若干掘り下げた状態で、南・東・北の各壁面が大きくオーバーハングしており、天井部以外は遺存しているものと思われる。しかし、検出面上で、岩盤に層理にそった亀裂が走り、さらに崩落する危険性が高く、完掘は断念した。



Ph.12　SK15026（南東より）

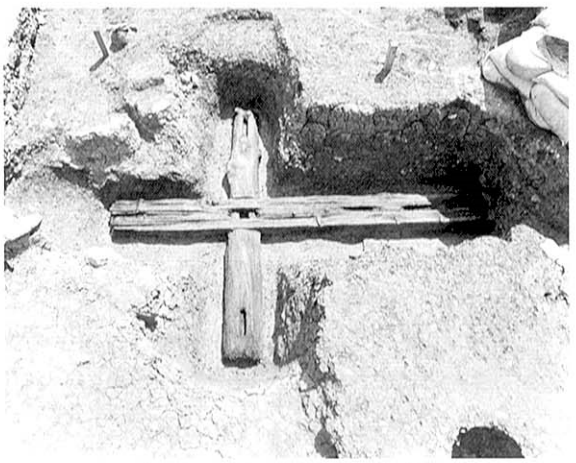
SK15016・SK15020・SK15026

直径150cm、深さ60cmほどの円形土坑の底に、木材を十文字に組んで据えた遺構である。SK15016・15020・15026はほぼ同大・同形の土坑で、SB15011の内側に270cm間隔で並んでおり、兵舎に関係した基礎構造物と推測される。

SK15080・SK15086・SK15121

「キ」字型に掘り込み、底に木材を交差させておく。木材の交差部分と末端の下には、扁平な石を敷く。SK15086は木材は残らないが、敷かれた石が原位置をとどめており、同様の遺構と推測できる。

遺構の軸線がSB15011とは異なり、またそれぞれがSB15011に切られることから、福岡城三の丸の武家屋敷にかかわる遺構と考えられる。



Ph.13　SK15080（西より）



Ph.14　SK15086（東より）



Ph.15　SK15121（南より）

B．下層遺構群

鴻臚館跡では、これまでは発掘調査成果から第Ⅰ期－7世紀後半、第Ⅱ期－8世紀前半、第Ⅲ期－8世紀後半～9世紀前半、第Ⅳ期－9世紀後半～10世紀前半、第Ⅴ期－10世紀後半～11世紀前半の5時期区分がなされている。以下、この時期区分に基づいて遺構番号順に報告する。

① 第Ⅰ期の遺構（7世紀後半）

平成15年度調査区では、第Ⅰ期に属すると判断できる遺構は、確認できなかった。

② 第Ⅱ期の遺構（8世紀前半）

鴻臚南館第Ⅱ期布掘り掘立柱列の北東角付近を検出した（SA15012）。また、トレンチ2を平成13年度調査区に延長し、北館第Ⅱ期布掘り掘立柱列を断ち割って調査した。

SA15012

南館第Ⅱ期布掘り掘立柱列の北東角であり、西は平成11年度調査のSA1059に、南は平成7年度調査のSA301・SB300につながる。

盛り土整地に掘り込まれたもので、検出面での幅110～130cm、150ｃｍ前後を測る。トレンチ2の延長部分での断ち割りと、角部分で掘りかた床面の形状を探った。角部分は、鋭い稜をなして直角に屈折しており、壁面はほぼ直立する。掘りかた床面は、北辺に沿って小さい壇をなすが、全体に平坦である。底面の形状を見ると北辺と東辺をそれぞれに掘削してつないだのではなく、計画的に一連の掘削をおこなったことがわかる。

柱痕跡は、きわめて確認しにくかったが、大きな抜き跡ではなく、柱径よりもやや大きい程度の抜き跡を検出した。柱間寸法は、おおむね240cmほどで揃うものの北辺の角から3間目と南辺の1間目が狭くなっており、等間隔に配された柱間の端数調整がなされたことがうかがわれる。



Ph.16　SA15012北東角（南西より）

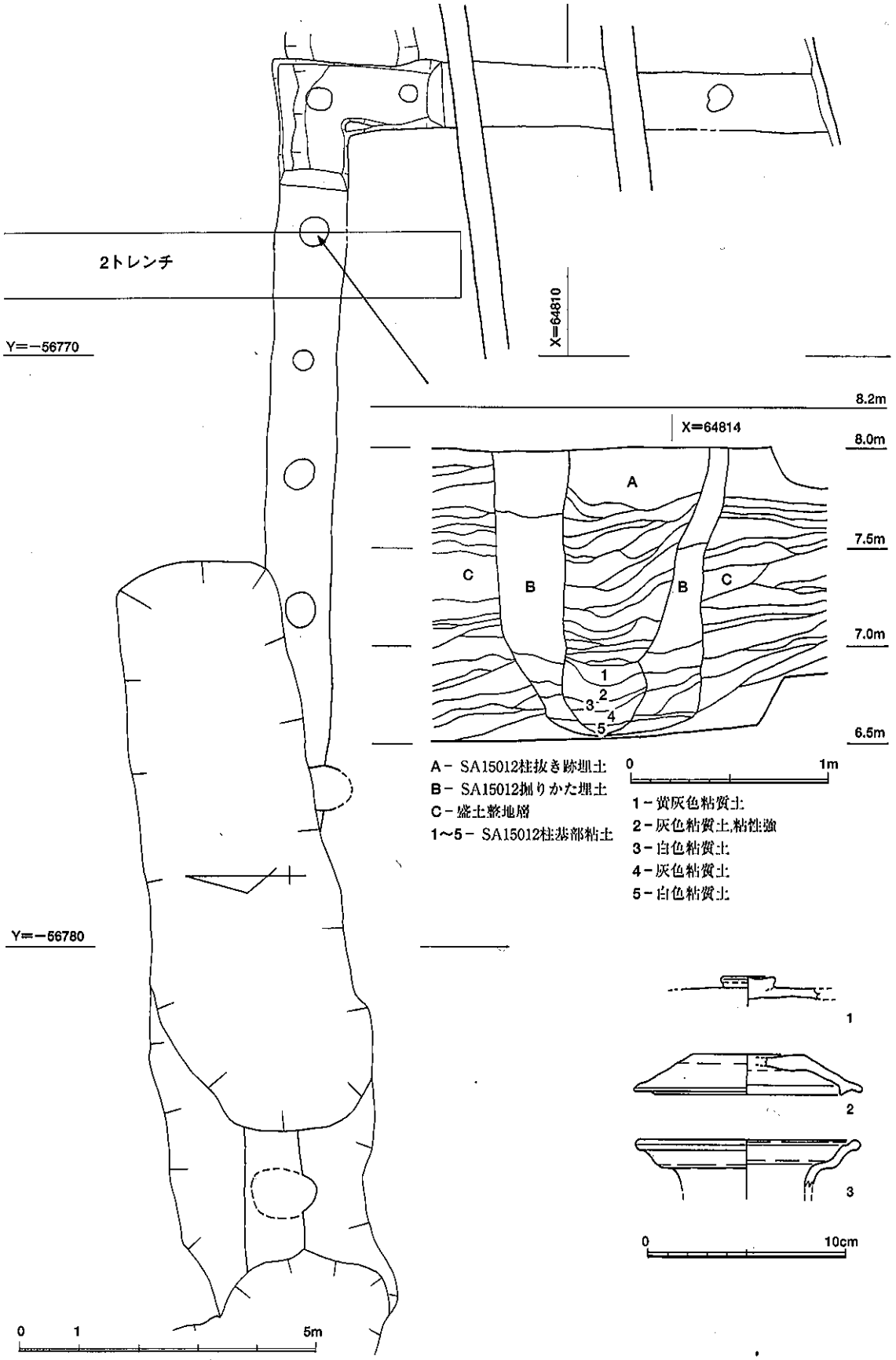
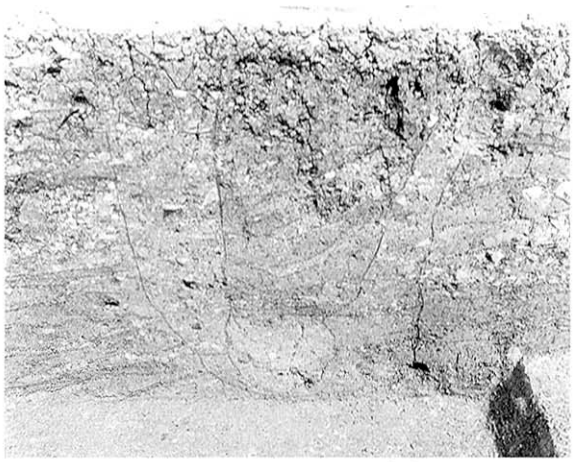


Fig.15　SA15012実測図（1/100）・土層実測図（1/30）・出土遺物実測図（1/3）



Ph.17　2トレンチ南側SA15012付近盛土整地層（北東より）



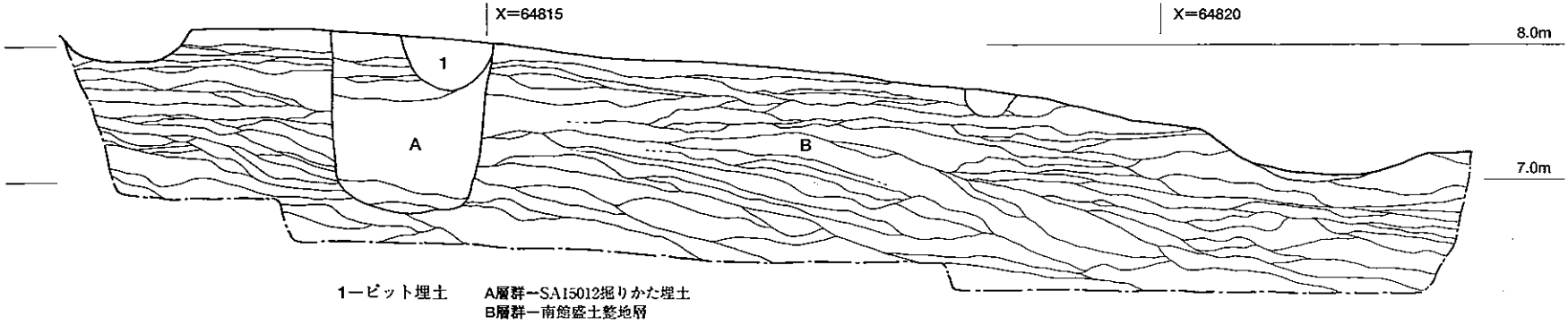
Ph.18　SA15012断面
（2トレンチ南側東壁、西より）



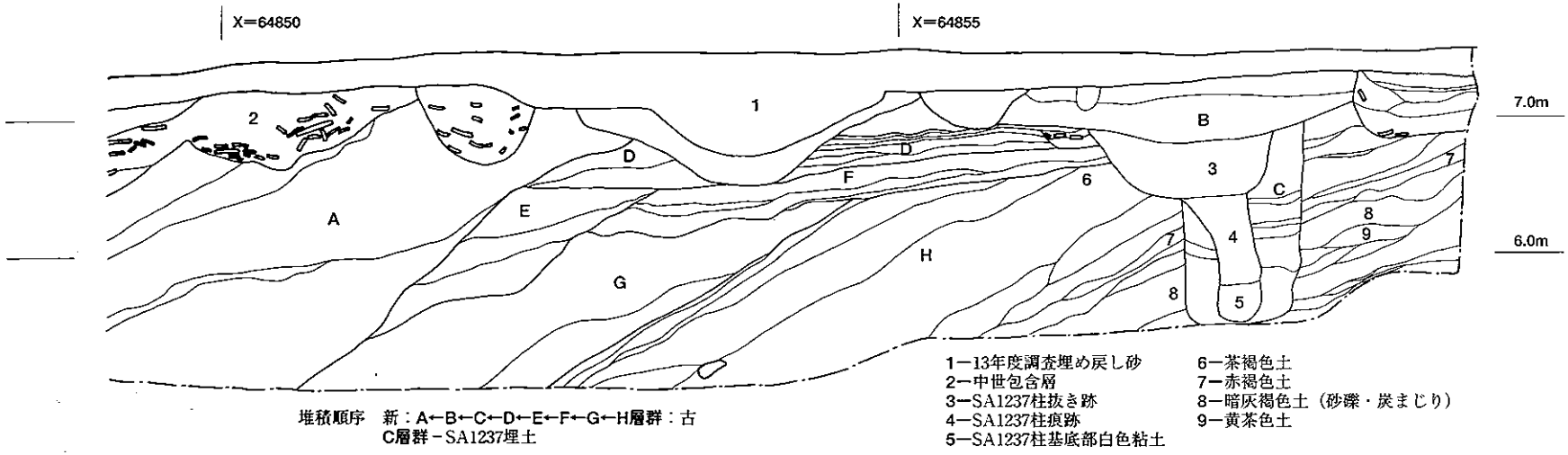
Ph.19　SA15012断面
（2トレンチ南側西壁、東より）

遺物の出土は極めて少なく、図化できたものを**Fig.15**の右下に示す。**1・2**は、トレンチ2のSA15012内から出土した**須恵器**蓋である。**1**は、擬宝珠型摘みが扁平なボタン状に退化したものである。**2**は、端部の内側に身と噛み合う突帯が廻る小型の坏蓋である。形態的には、**1**よりも先行する。**3**は、**須恵器**の壺の口縁で、SA15012に切られた盛土整地層から出土した。内外面を横撫で調整する。この他、瓦片などが出土している。

時期を判断するには十分とはいえないが、**1**は8世紀前半の特徴を示している。



(1) 2トレンチ南端部分



(2) 2トレンチ北端部分

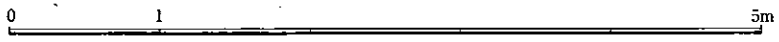


Fig.16　2トレンチ西壁南端・北端実測図（1/50）

2トレンチ北側部分盛り土整地層・SA1237

平成14年度調査で検出した第Ⅱ期石垣SX14528の東側延長部を確認するため、2トレンチの北側を平成13年度調査区まで延長し、トレンチ調査を実施した。この部分は、平成13年度調査で検出した第Ⅲ期礎石建物SB1228の礎石が撹乱のため遺存せず、第Ⅱ期布掘り掘立柱列 SA1237を横断する調査が可能な部位に当たる。

本トレンチでは、確認面下250cmにおよぶ調査においても石垣遺構は確認できなかった。しかし、平成14年度調査 SX14528においても、その東端は築造後間もない崩落のため石垣の上半部は修復されていなかった。本トレンチにおいても、同様に石垣を欠くものと考えたい。なお、この東側延長部は、平成17年度調査において確認を試みる予定である。

石垣は欠くものの、Fig. 16 (2)にみるように斜面の堆積土には単位が認められ、層理の不整合面からそれぞれの境界が一時期の斜面表土をなしていたものと思われる。そうすると、平成14年度調査における第Ⅱ期石垣と布掘り掘立柱列との位置関係から 、H層群の表面が石垣斜面の延長に当たる可能性が高い。この場合、堆積順序からH層群を覆うF・D層群が堆積した後布掘りが掘られたと見るのが妥当であり、布掘り掘立柱列は石垣遺構に後出することになる。

また、2トレンチの調査では、布掘り中および、これに先行するH層群中からまとまった量の遺物が出土している。今後、第Ⅱ期布掘り掘立柱列の時期を検討する資料になりうるので主要な遺物について報告する。

Fig. 17・18に図示したのは、いずれも須恵器である。1～7は、 SA1237の掘りかたから出土した。小片ではあるが、4・5のように口縁端部をわずかに折り曲げる蓋が含まれ、年代的な下限を示している。8・9は6層、10は7層、11～14は8層、15・16は9層、17～36は H層群からの出土である。



Ph.20　SA1237断面（2トレンチ北側西壁、東より）

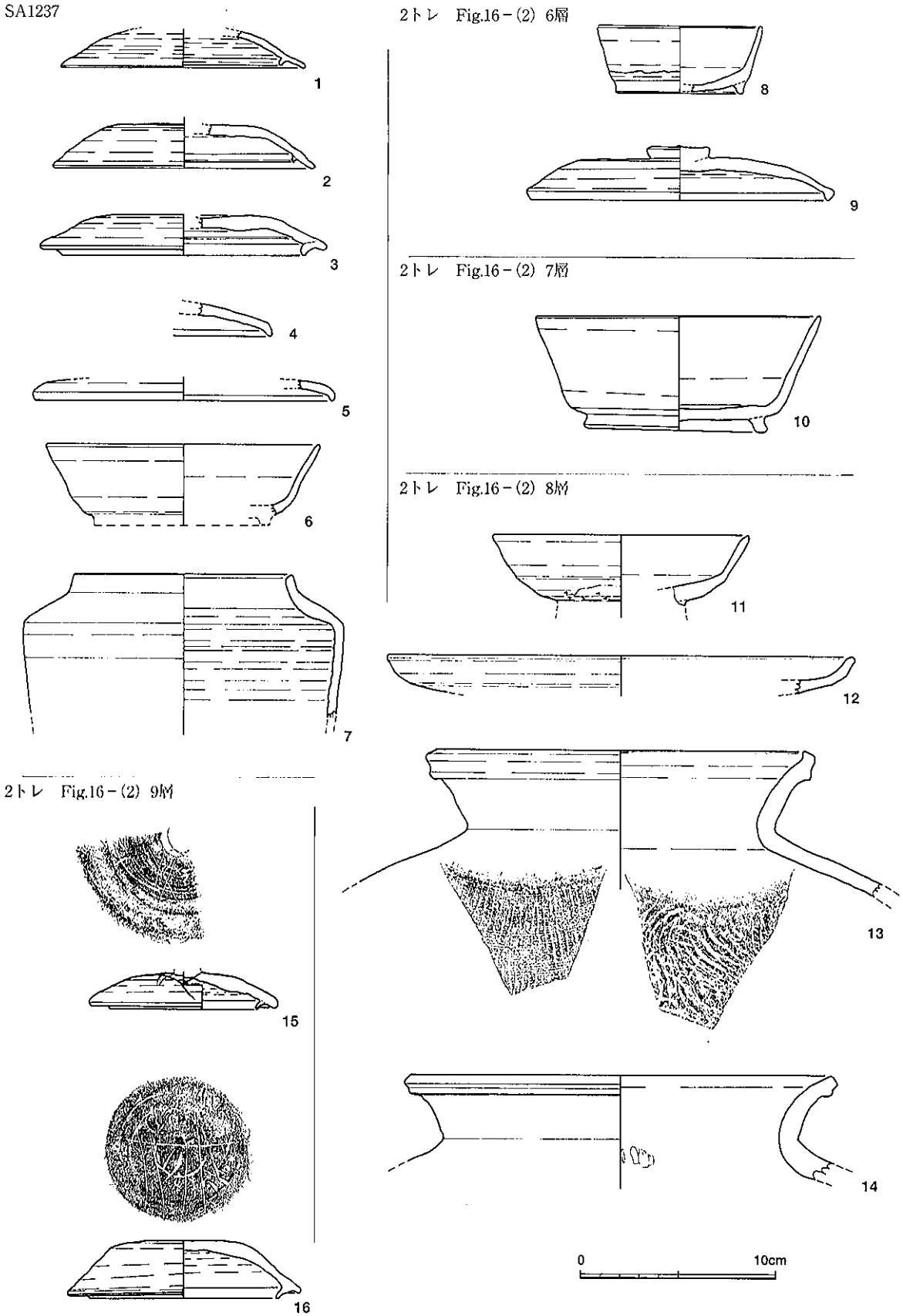
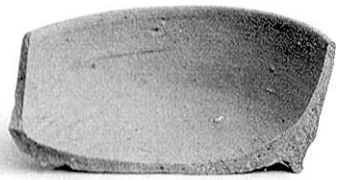


Fig.17　SA1237、2トレンチ北側出土遺物実測図1（1/3）



8



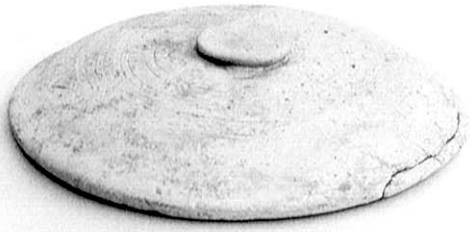
10



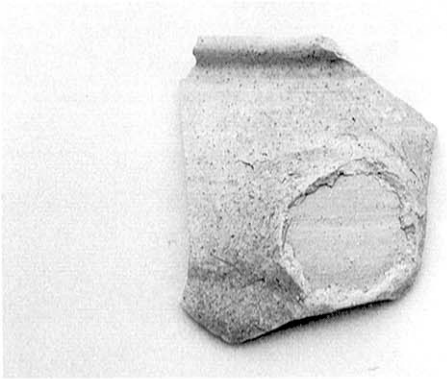
8



10



9



32



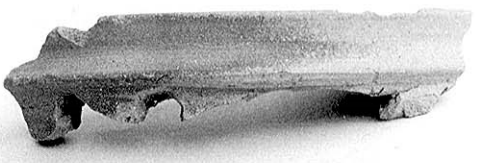
15



36



16



36

Ph.21　2トレンチ北側・SA1237出土遺物 1

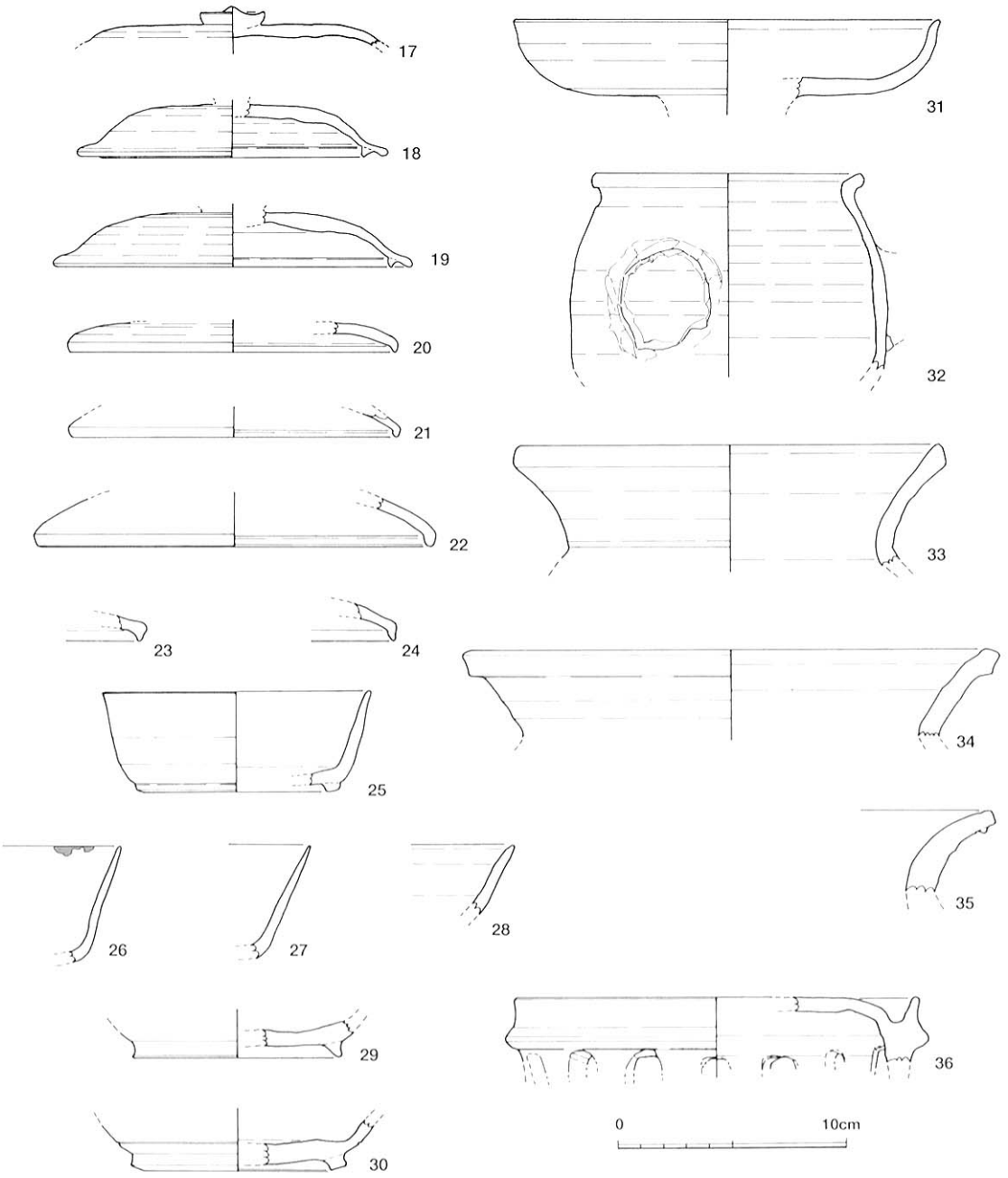
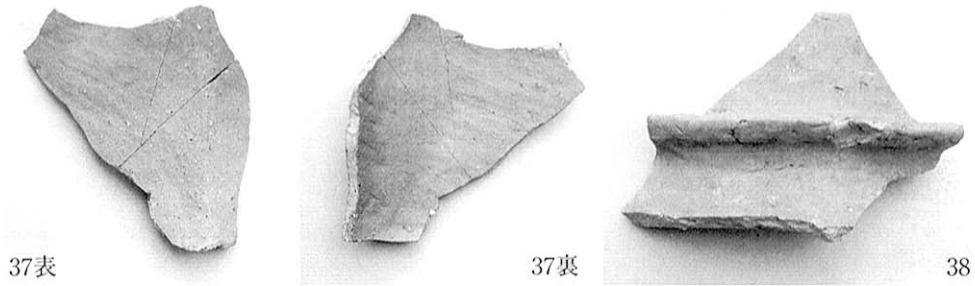


Fig.18　2トレンチ北側出土遺物実測図2 (1/3)



Ph.22　2トレンチ北側・SA1237出土遺物2

32は壺破片であるが、胴部中ほどに丸く剥離痕跡があり、棒状の柄がついたものと思われる。36は、円面硯である。脚部以下を欠く。Ph. 22−37は陶棺片と思われる。角部分で、脚端の一部が残っている。38は、鍔付の壺もしくは器台である。口縁から体部にかけて末広がりに開く。

これら H層群中から出土した須恵器は、8世紀前半から中頃を下限としている。したがって、層位から見てSA1237が8世紀中頃以前にさかのぼることはありえないといえよう。

③ 第Ⅲ期の遺構（8世紀後半〜9世紀前半）

第Ⅲ期は礎石建物に代表される時期であるが、平成15年度調査区では、礎石建物は削平のため残っていなかった。第Ⅲ期に属する遺構としては、梵鐘鋳造遺構を検出・調査している。

SK15027（梵鐘鋳造遺構）

梵鐘鋳造遺構SK15027は、平成15年度調査の終盤になって出土した。SK15027の調査は年度を跨ぎ、途中悪天候の連続のため一部崩壊の憂き目に遭いながらも、平成16年度鴻臚館跡調査研究指導委員会の審議を受けて保存処理の方針が決定し、平成17年度まで慎重な調査が続いている。なお、遺構の記録類と出土遺物の整理が、保存処理の関係もあっていまだ完了していない。したがって、詳細な報告は、平成18年度に譲り、概要だけを簡略に述べる。

SK15027は、直径270cm、深さ120cmをはかる円形の土坑の中央から、梵鐘鋳造の外型が原位置からややずれた形で、ほぼ直立して出土したもので、基盤と底型は原位置をとどめている。

調査当初は、鋳造関連遺構であるという観測はなく、遺構検出面から40cmほど掘り下げたあたりで外型が輪状に露出し、梵鐘鋳造遺構であるという認識を持った。外型の遺存状況は比較的良好で、池の間以下の外型が、全周の80%分ほど遺存していた。残念なことに、平成16年夏の悪天候のため、数回にわたって遺構が完全に水没し、その2分の1が崩壊してしまった。

下帯部分の外型は、底型からやや外傾気味に立ち上って上部の横線部分まで確認できる。高さ10cmをはかる。明瞭な駒の爪はなく、若干下端が張り出す程度にとどまる。

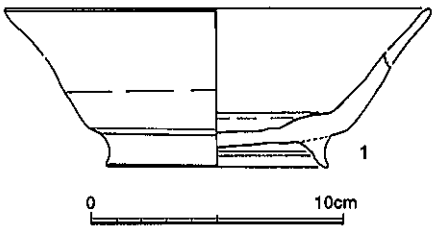


Fig.19 SK15027出土遺物実測図（1/3）

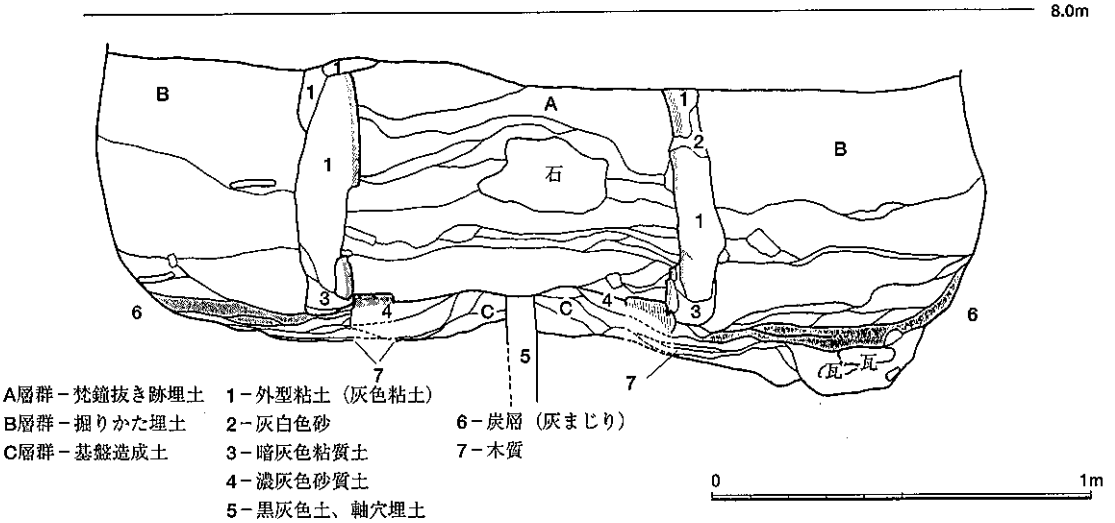


Fig.20 SK15027土層断面図（1/20）

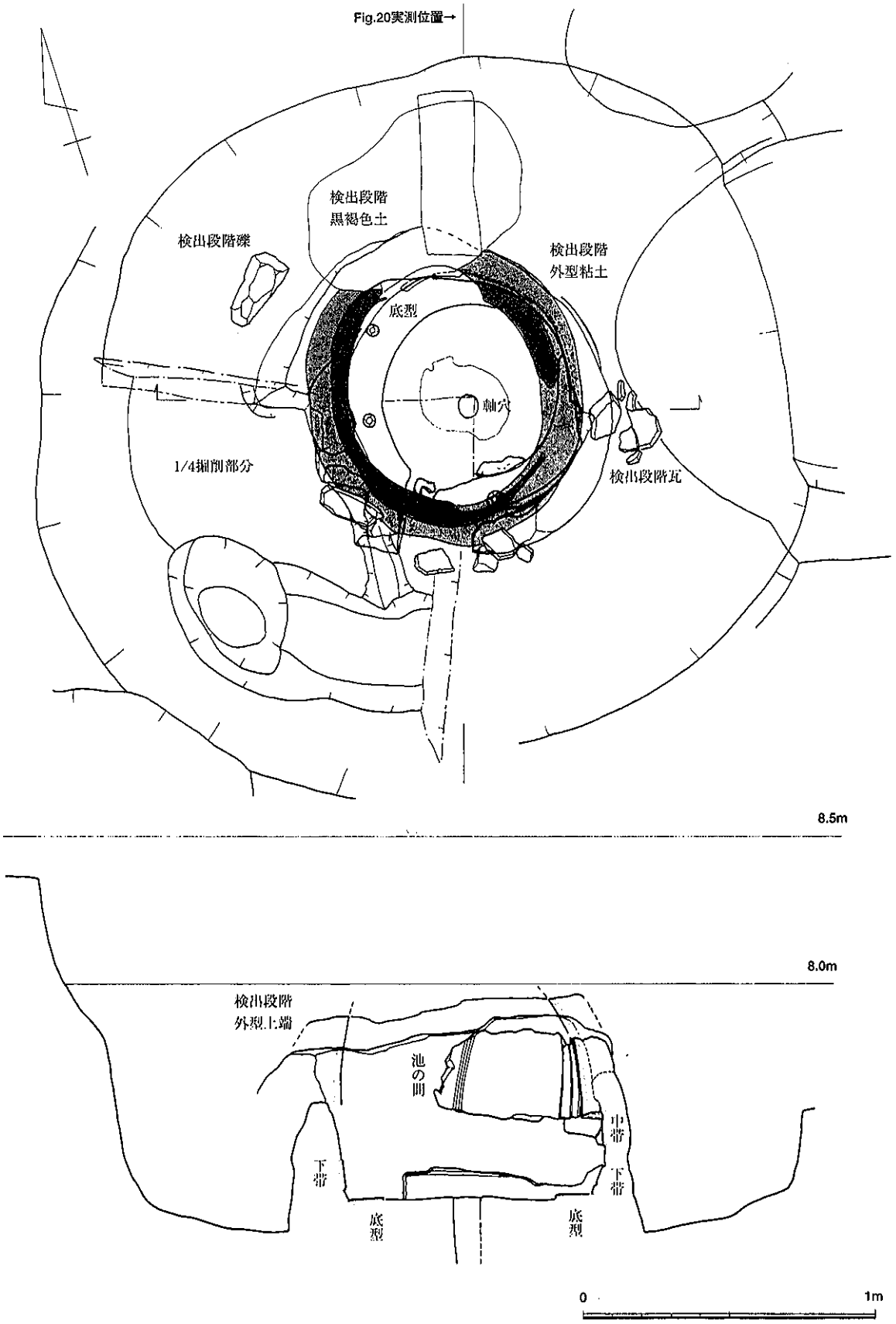


Fig.21　SK15027実測図（1/20）



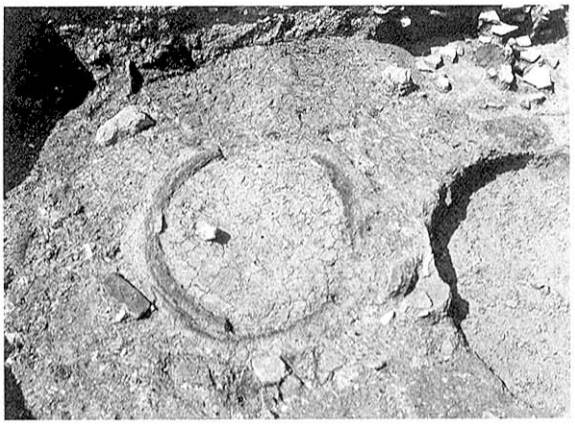
Ph.23　SK15027検出状況（南東より）



Ph.24　SK15027（西より）

底型は、外径82cm、幅10.5cmの環状を呈する。表面には、ごく一部だが、緑青が残る。

掘りかた最下部の溝状部分から、9世紀前半の**土師器**椀が出土している（**Fig. 19**）。この溝状部分は、基盤部分に広がる炭層に覆われており、SK15027の操業以前に埋まった遺物である。その他、土師器・越州窯系青磁・瓦などが出土しており、9世紀代の様相を示す。遺構の切り合い関係では、SK15027の掘りかたを後述するSK15027Bが切り、さらにそれを SK15028が切っている。どちらも9世紀後半代に属する廃棄土坑である。 以上の所見を総合すると、掘りかた最下部出土土師器椀が示す9世紀前半が、SK15027の時期として妥当であると考えられる。



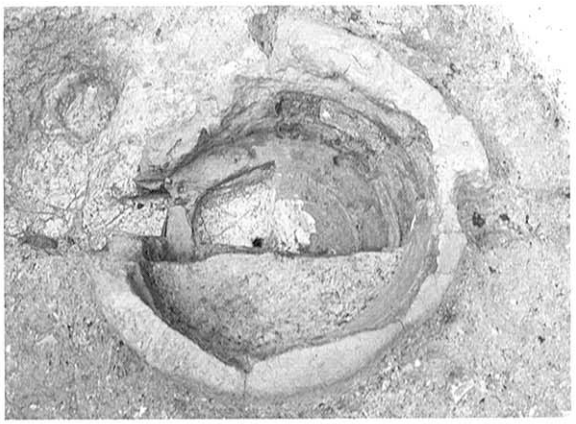
Ph.25　SK15027外型検出状況（南より）



Ph.26　SK15027外型縦帯部分検出（南より）



Ph.27　SK15027外型池の間部分調査風景（北東より）



Ph.28　SK15027半割、底型検出状況（東より）



Ph.29　SK15027外型池の間部分（南西より）



Ph.30　SK15027底盤軸穴部分（南西より）

④　第Ⅲ期以前の遺構

SX15193

後述する第Ⅳ期の瓦溜りSK15017の下層から検出した遺構である。集石遺構を伴う不整形のくぼみで、池の可能性を考えたいが、判断する根拠を欠く。

全体としては、南西から北東に楕円形に伸びる土坑で、壁面は緩く傾く。その東辺寄りを220×80センチほどの長方形に掘り込み、底に石を敷く。

敷石は南北210cm東西35cmで、面をそろえてはいないがおおむね平坦に並べ、南辺には板石を衝立の様に立てる。北辺は掘りかたいっぱいまで石を配し、北東角から弧を描いて北に続く。石の隙間にはキメの細かい灰色粘土が詰まっていて、水がかかっていたことを示している。標高的には、弧状部分から南の集石に導水したことになる。弧状集石部分は、兵舎コンクリート基礎の下に続いて、梵鐘鋳造遺構 SK15027に切られて途切れる。

池とそれにかかわる配水遺構と考えているが、判然としない。出土遺物が皆無で、時期不明であるが、 SK15027に先行することは切り合い関係から明らかである。

なお、兵舎基礎下の未掘部分に関しては、 SK15027の切り取り保存に関連して追加調査を実施している。その成果を加えて、次年度の発掘調査報告書で、詳細に報告したい。

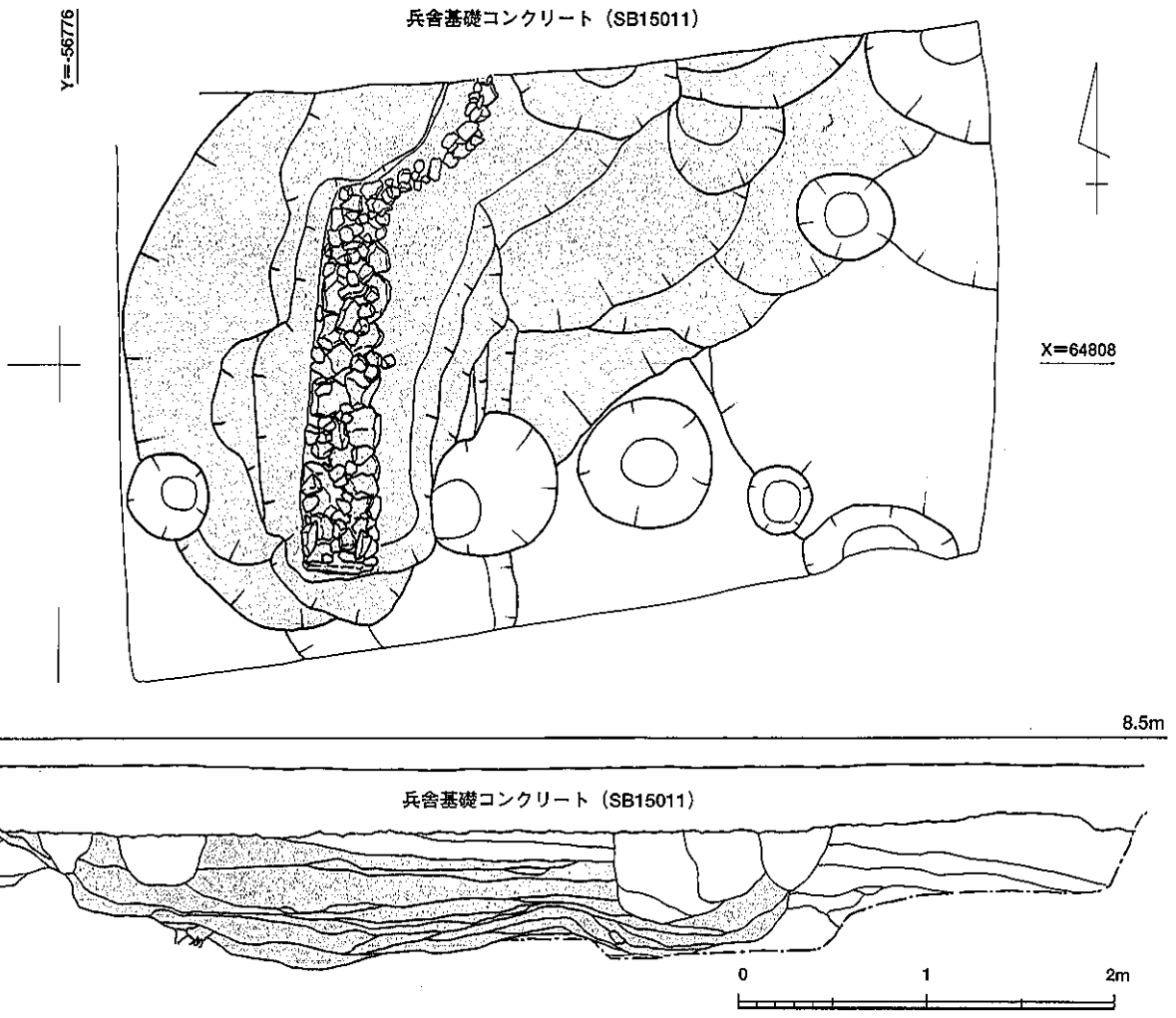
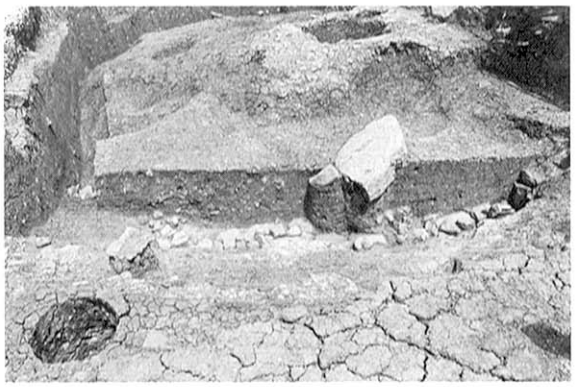


Fig.22　SX15193実測図（1/40）



Ph.31　SX15193全景（南西より）



Ph.32　SX15193敷石上埋土断面（西より）



Ph.33　SX15193敷石遺構（北東より）



Ph.34　SX15193敷石遺構奥壁（北東より）



Ph.35　SX15193導水状配石溝（南東より）

SP15301・15302（橋脚遺構）

2トレンチは、鴻臚館の南館と北館を隔てる谷の堆積状況を確認するために設定したトレンチであった。その掘削に当たっては、谷が深いためにトレンチ壁面が崩落する恐れがあり、階段掘りにして危険を予防することとした。その結果、トレンチ最下部分は、最初の設定位置より東にずれることになったわけであるが、たまたまその東壁面から柱穴を検出したものである。

谷底付近で検出した柱穴は、2基である。 SP15301は柱痕跡が明瞭で、直径33cm深さ142cmで、柱の下には、数個の石をおいて柱を受けていた。 SP15302は柱が抜かれているが、礎板の石を配していて、同様の構造であったと思われる。

これらの柱穴の配置は、第Ⅱ期布掘り掘立柱区画の東辺同士を直線で結ぶ延長線上にあり、谷をまたいで南館と北館とを結ぶ橋の橋脚であると推測される。

橋脚遺構の時期については、 第Ⅱ期の区画に相応していることから、これと同時期とすることは可能であるが、 現時点では即断を避けたい。

なお、平成17年度調査では、橋脚遺構の東側を掘り下げて調査し、これに並行する柱列を検出した。それを含めて、谷底部分の調査成果は、次年度の報告書で再論する。



Ph.36　2トレンチ東壁（西より）



Ph.37　SP15302（西より）



Ph.38　SP15301（西より）

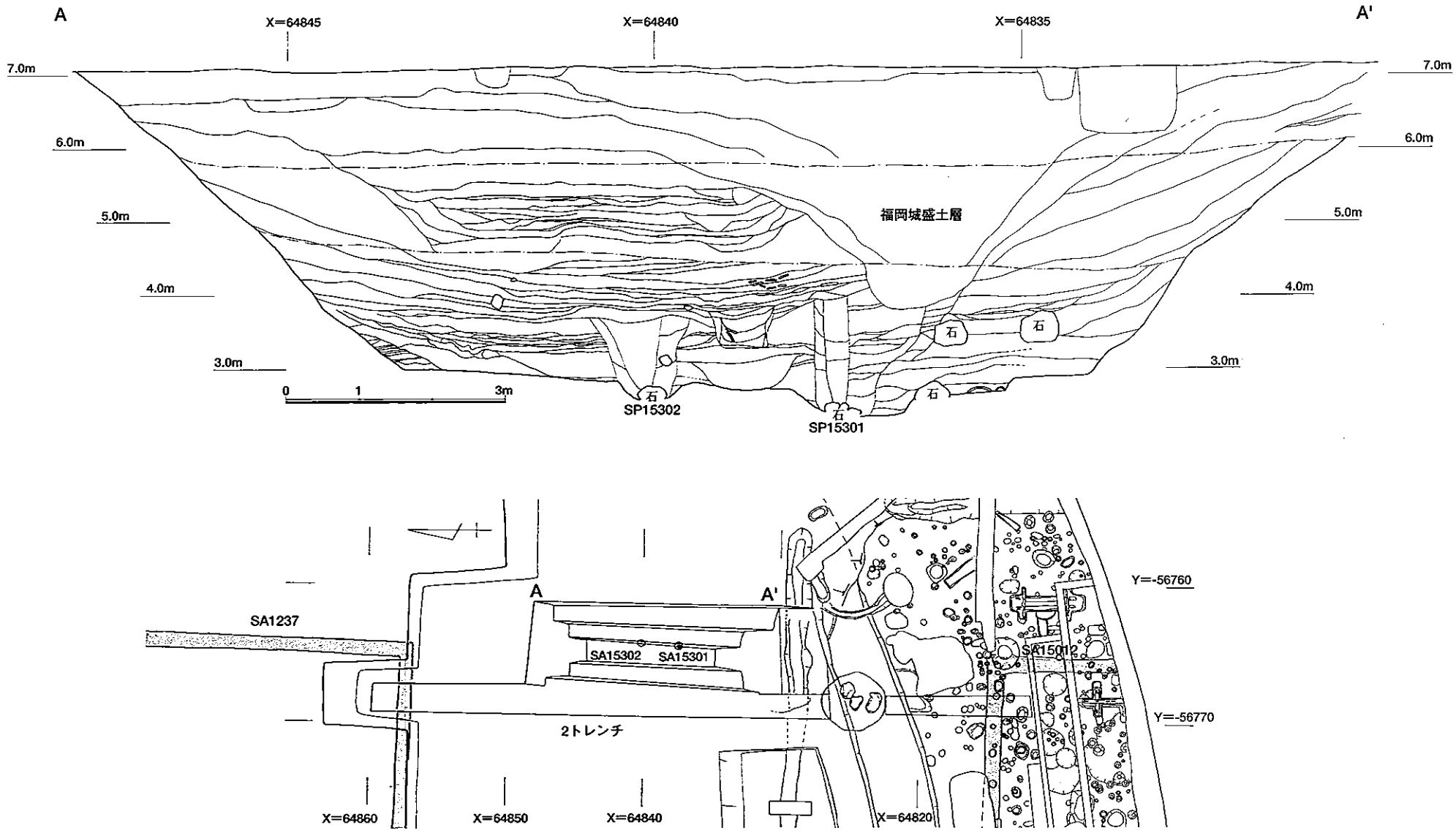


Fig.23　2トレンチ東壁土層実測図（1/75）

⑤　第Ⅳ期の遺構（9世紀後半～10世紀前半）

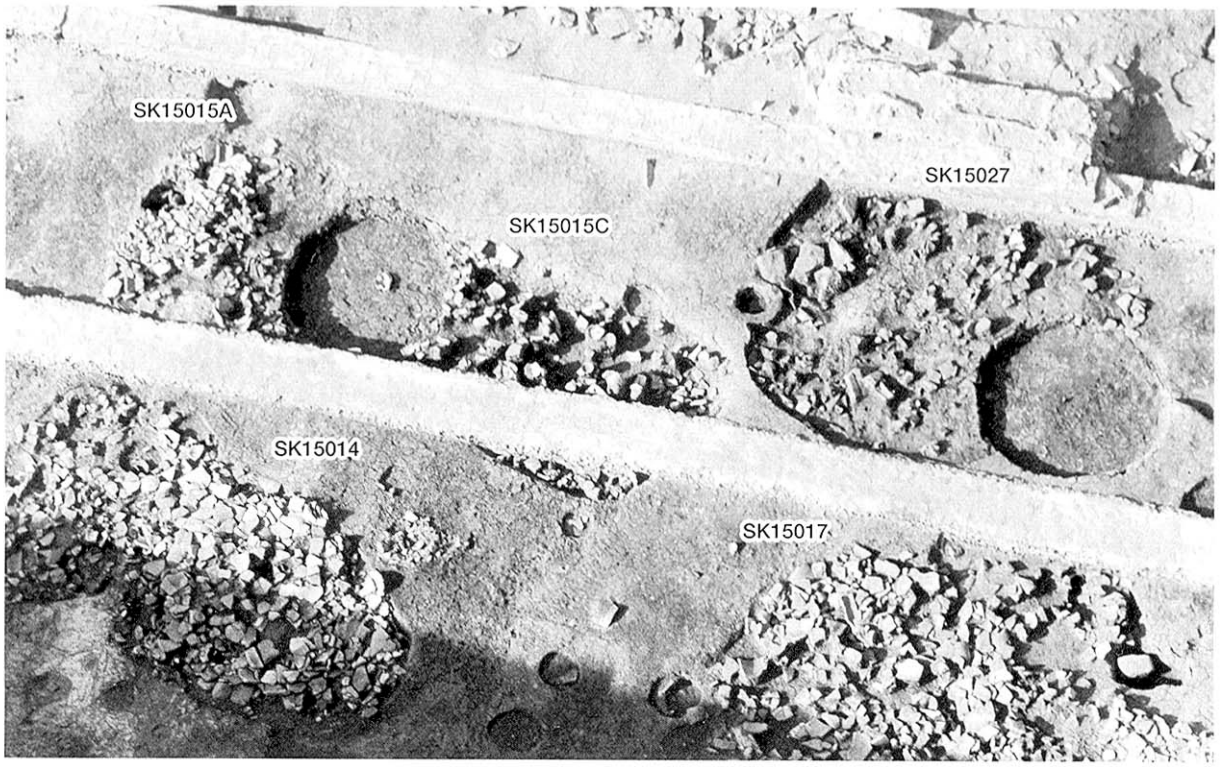
第Ⅳ期においては、建物遺構はまったく確認できなかった。柱穴の中には、当該期の建物を構成する遺構があると思われるが、建物遺構として把握することは困難である。一方、平成15年度調査で検出した瓦・土器等の一括廃棄遺構は、そのほとんどが第Ⅳ期の遺構であった。

SK15014

平成15年度調査区の南辺近くで検出した瓦の廃棄土坑である。検出段階からひょうたん型の平面形を呈し、二つの土坑が重複しているという予想はついたが、瓦が境目なく分布し区別がつけがたかった。その状況は、断面観察でも大差ない。しかし、瓦の入り方、廃棄され堆積した状況を観察すると、東側土坑の瓦が、西側土坑の上に被さっている状況が看取できた。

遺物の取り上げに際しては、東側土坑をSK15014A、西側土坑をSK15014Bとして、区別した。しかし、実際には両方から出土した遺物が接合できる例が多く、時間差を持った廃棄とは考えにくい。SK15014Bが掘られた後SK15014Aが掘られたのは確かであろうが、遺物の廃棄に時間的なヒアタスはほとんどないものと思われる。

SK15014Aの出土遺物をFig.25～27、Fig.29－47～50・52～56、Ph.46－63・64に示す。1～6・13は、土師器である。1～4は、坏である。腰部に丸みを持つ1～3と、底部から直線的に開く4がある。4は砂っぽくて粗く赤みが強い胎土で、他の土師器・黒色土器と生産地を異にすると思われる。5・6は椀である。表面は磨滅し、調整は不明である。7～12は、黒色土器A類椀である。小型の椀と（7～9）と大型の椀（10～12）がみとめられる。体部外面は横撫で調整、内面は、表面が剥離気味であるが、へら磨きを施している。12の内面は、器壁に沿って4～5分割した横方向のへら磨きがみられる。13は、土師器の甕である。体部内面はケズリ、外面は叩き調整する。14・15は、新羅陶器の小片で



Ph.39　SK15014・15015・15017付近（南より）

ある。印花文がみられる。16は、**無釉陶器**の鉢である。焼成は堅緻で、焼き締まる。17～19は、**白磁**碗である。17は、輪花の小碗で、 純白な胎土に透明感の強い釉がかかる優品である。体部下位から高台は、露胎となる。20～32は、**越州窯系青磁**である。1は合子の蓋、21～24は皿、25～32は碗である。21～22・25・26・32は、全面施釉の優品である。33は、**褐釉陶器**の小型壺である。白化粧した上に褐釉を施す。双耳壺になると思われる。34は、**銅銭**である。磨れて字画がつぶれているが、「開元通寶」と判読できる。

Fig.20－47～50・52～56、Ph.46－63・64は、**瓦**である。47～50は鴻臚館式軒丸瓦、52は鴻臚館式軒平瓦である。48・50では、明瞭に筒部と瓦当面の接合方法が看取できる（Ph.45）。53・54は、

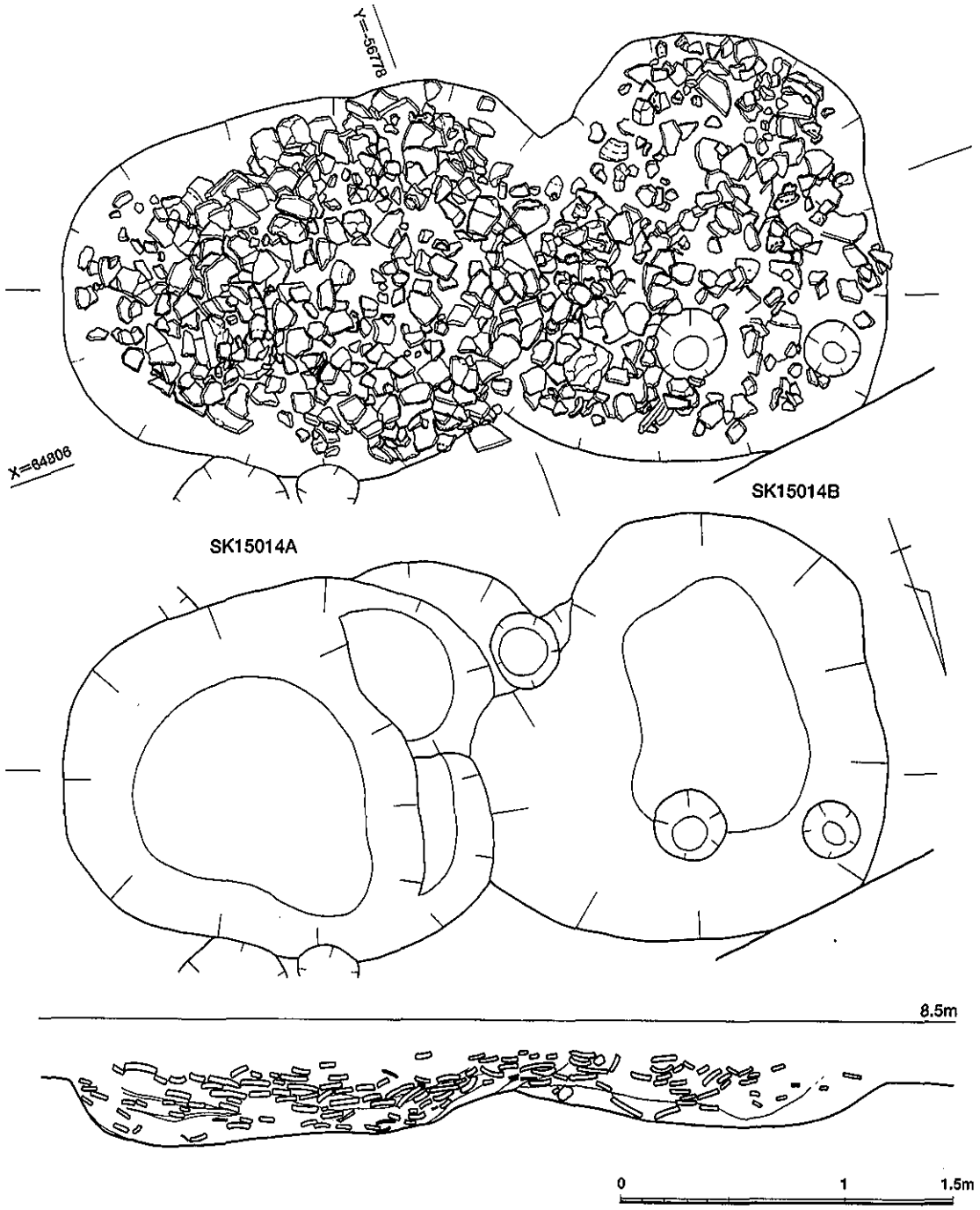
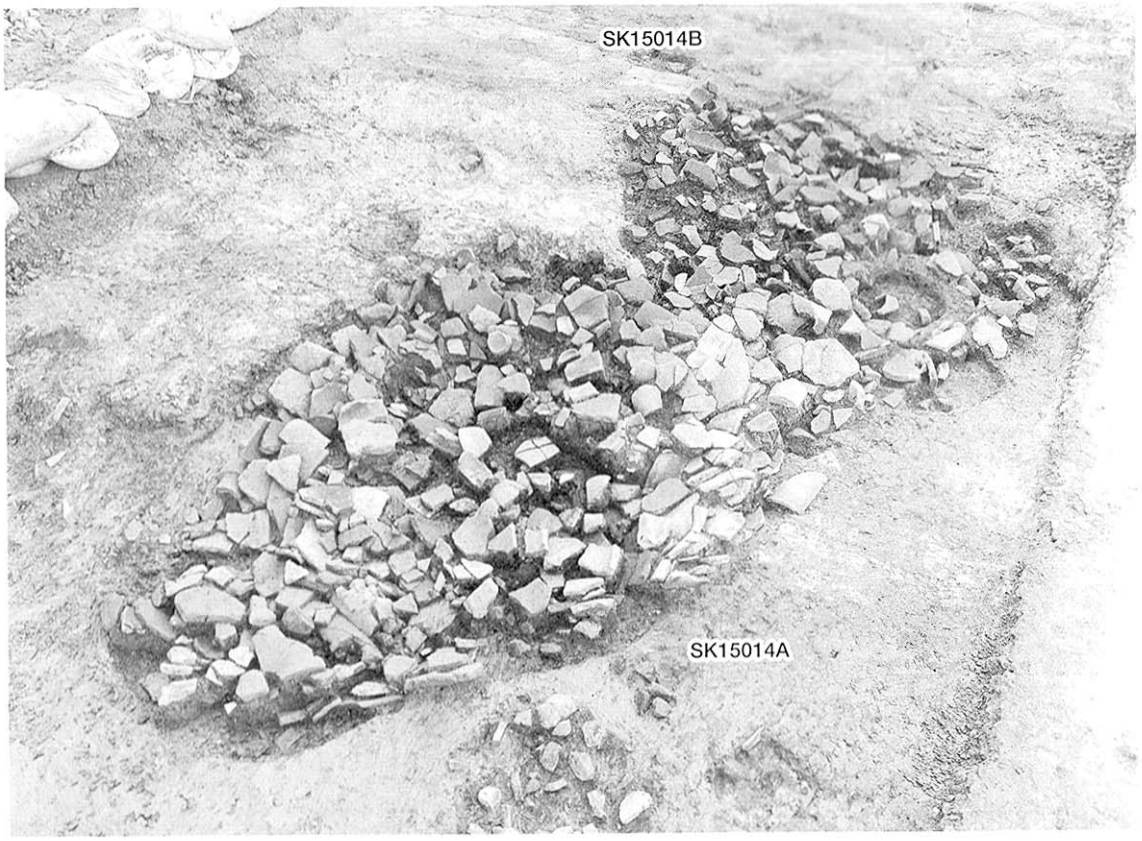


Fig.24　SK15014実測図（1/30）



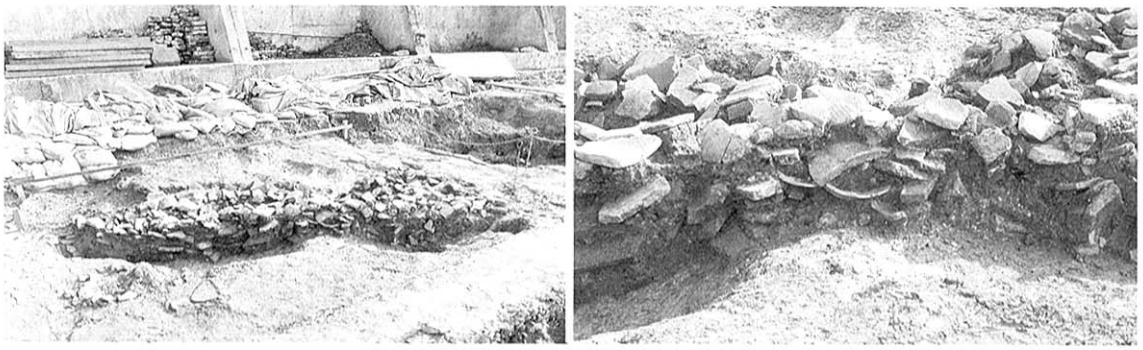
Ph.40　SK15014検出状況（東より）



Ph.41　SK15014完掘状況（北西より）

均等唐草文の軒平瓦である。55は、文字銘を持つ平瓦である。二重線で縁取った方形の区画を十字に分割し、「伊貴作瓦」の文字を配する。56は、自然釉がかかった平瓦であるが、撫で調整で精緻な整形がなされている。63・64は、叩きの間に記号が入る。

SK15014Bの出土遺物をFig.28、Fig.29－51、Ph.46－57～62に示す。35は、土師器の脚付皿である。鼎状に短い脚が付くが、折損している。36は、黒色土器A類の椀である。内面はへら磨きと思われるが、磨滅が激しい。37は白磁碗である。高台は蛇の目高台で、露胎となる。38～45は、越州窯系青磁である。38・39は、香炉の蓋である。形態的には同形だが、別固体である。二段に盛り上がった天井部の各段に鍔を貼り付け、指で押してフレアー状にする。39は摘みから天井にかけて、褐彩を加える。40～43は、碗である。41は全面施釉の優品である。口縁部破片と体部破片に分かれていて、



Ph.42　SK15014断面（北より）



Ph.43　SK15014遺物出土状況

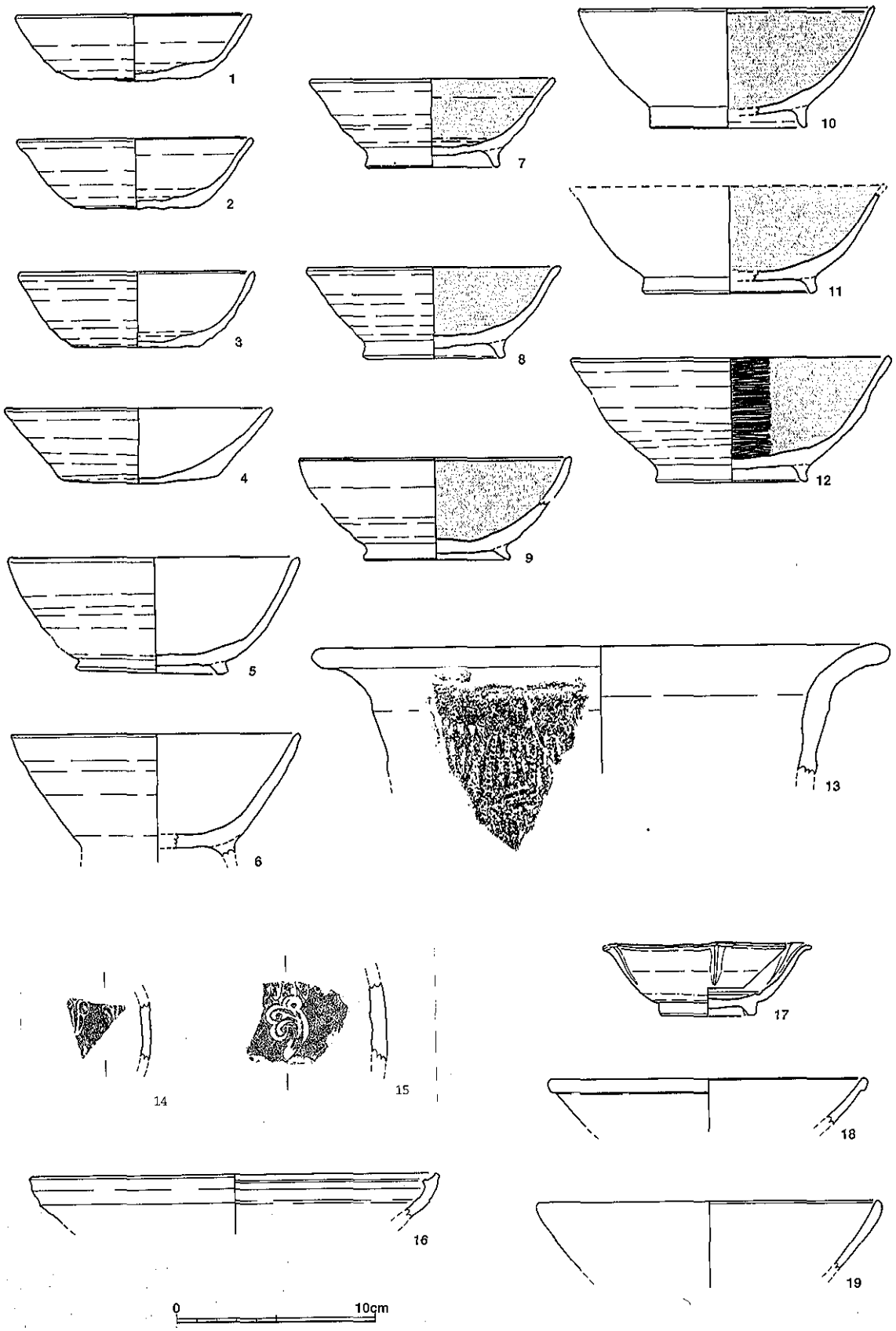


Fig.25　SK15014A出土遺物実測図1（1/3）

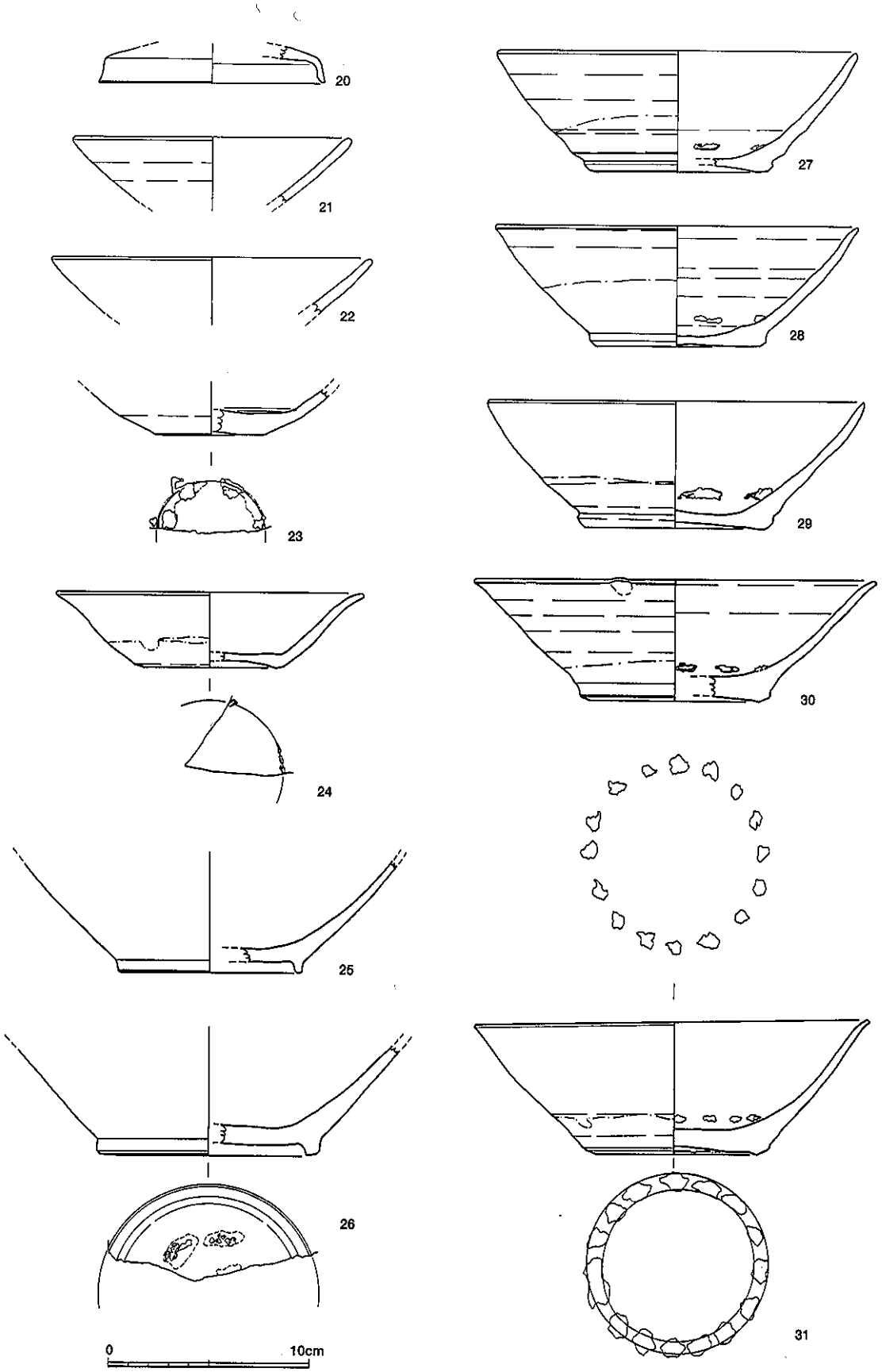


Fig.26　SK15014A出土遺物実測図2（1/3）

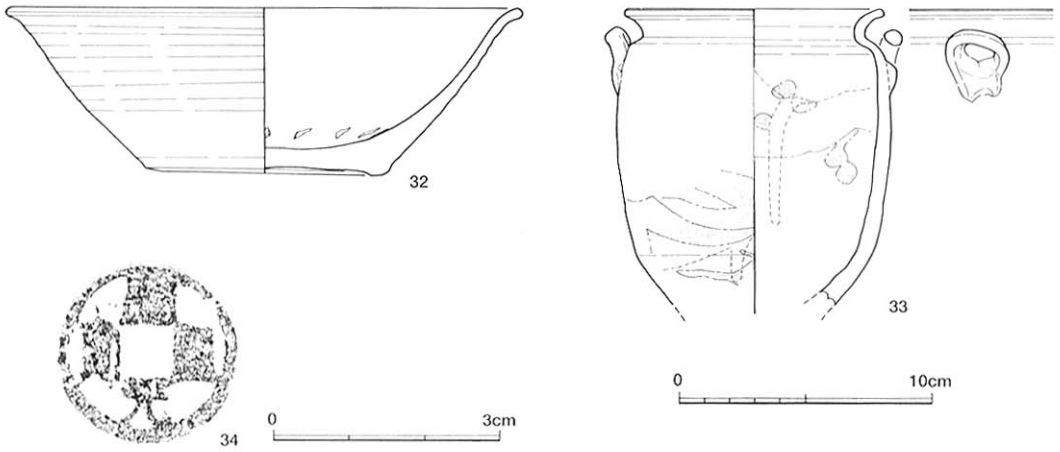
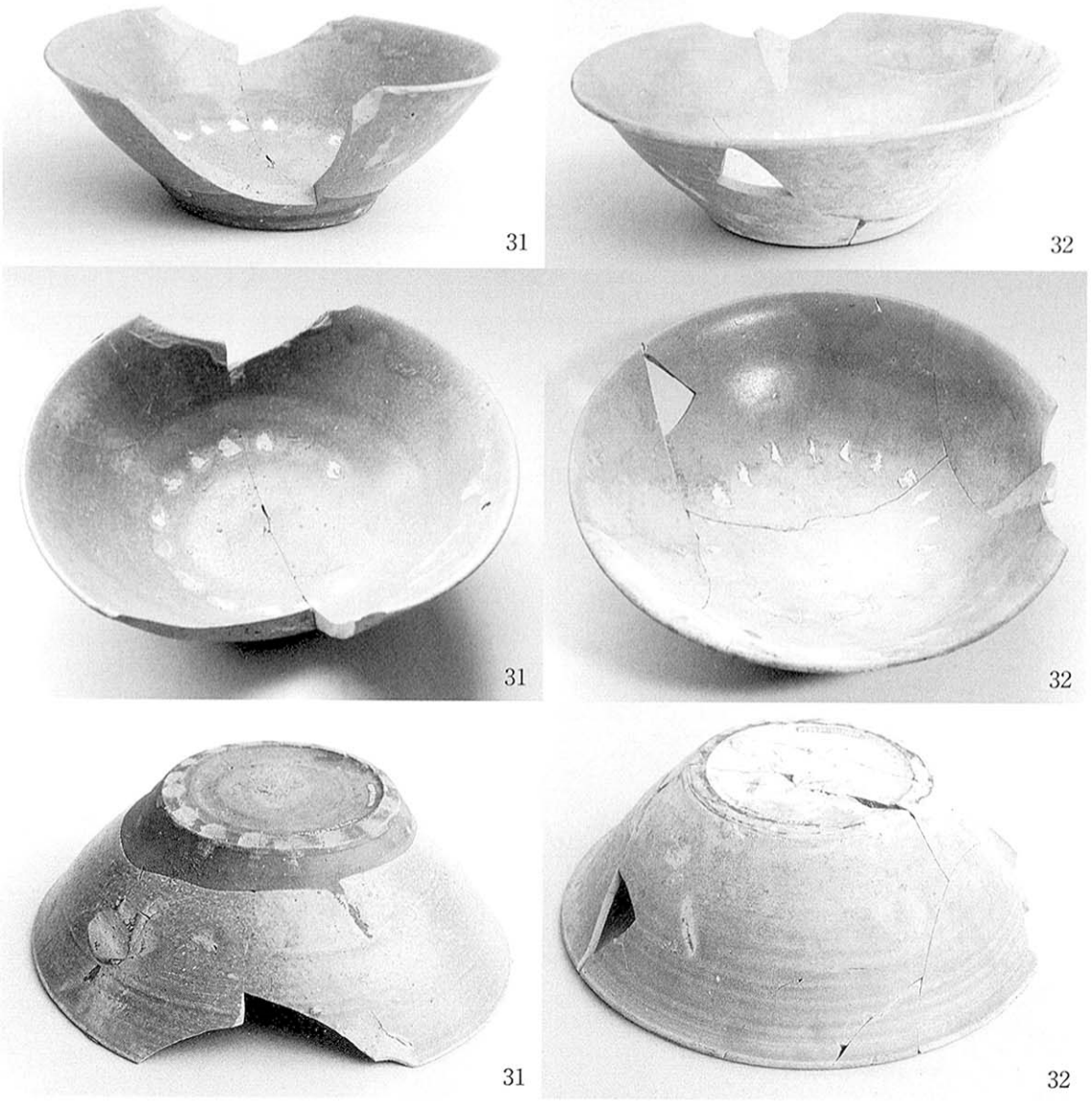


Fig.27　SK15014A出土遺物実測図3（1/3，34－1/1）



Ph.44　SK15014出土遺物1

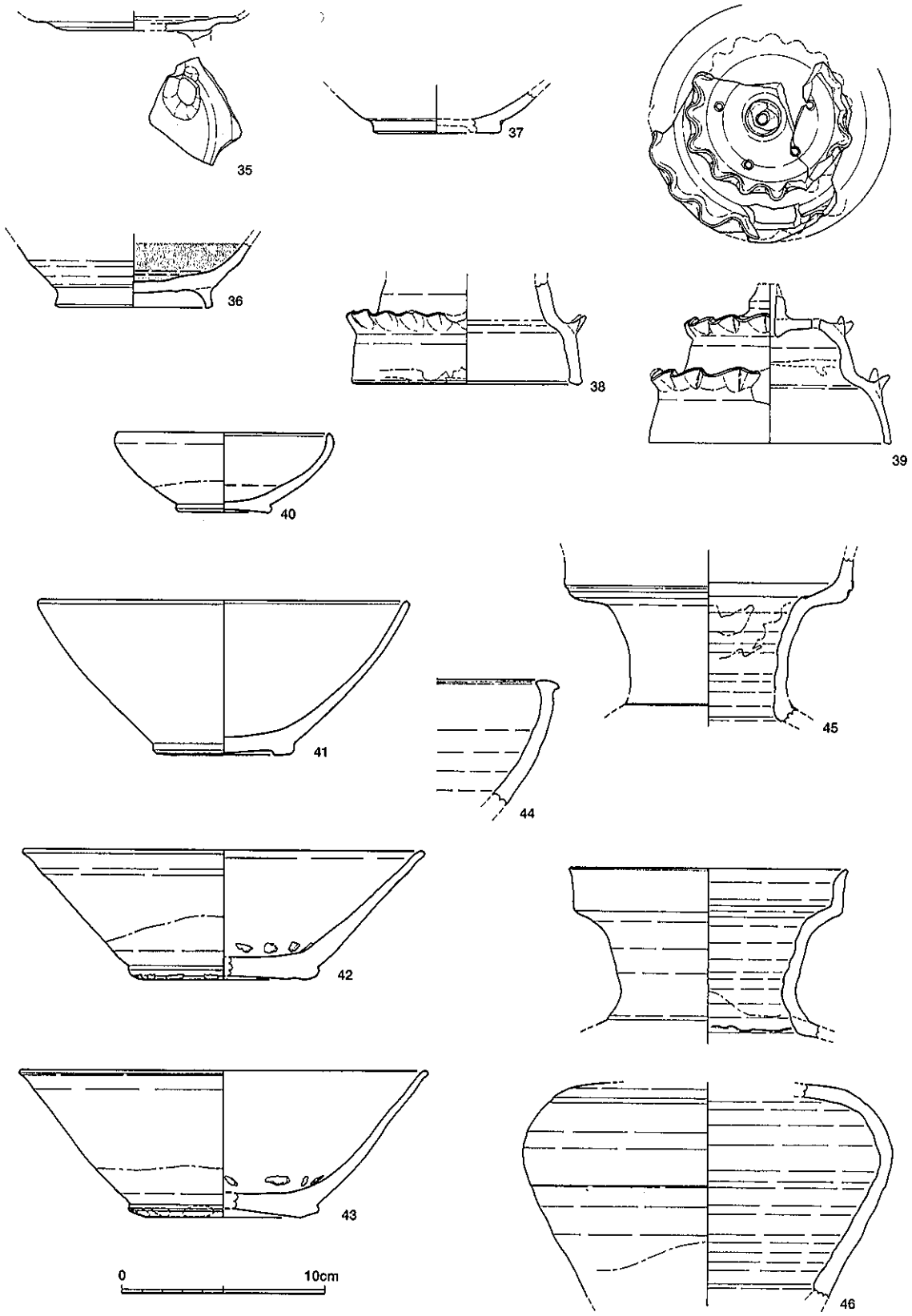


Fig.28　SK15014B出土遺物実測図（1/3）

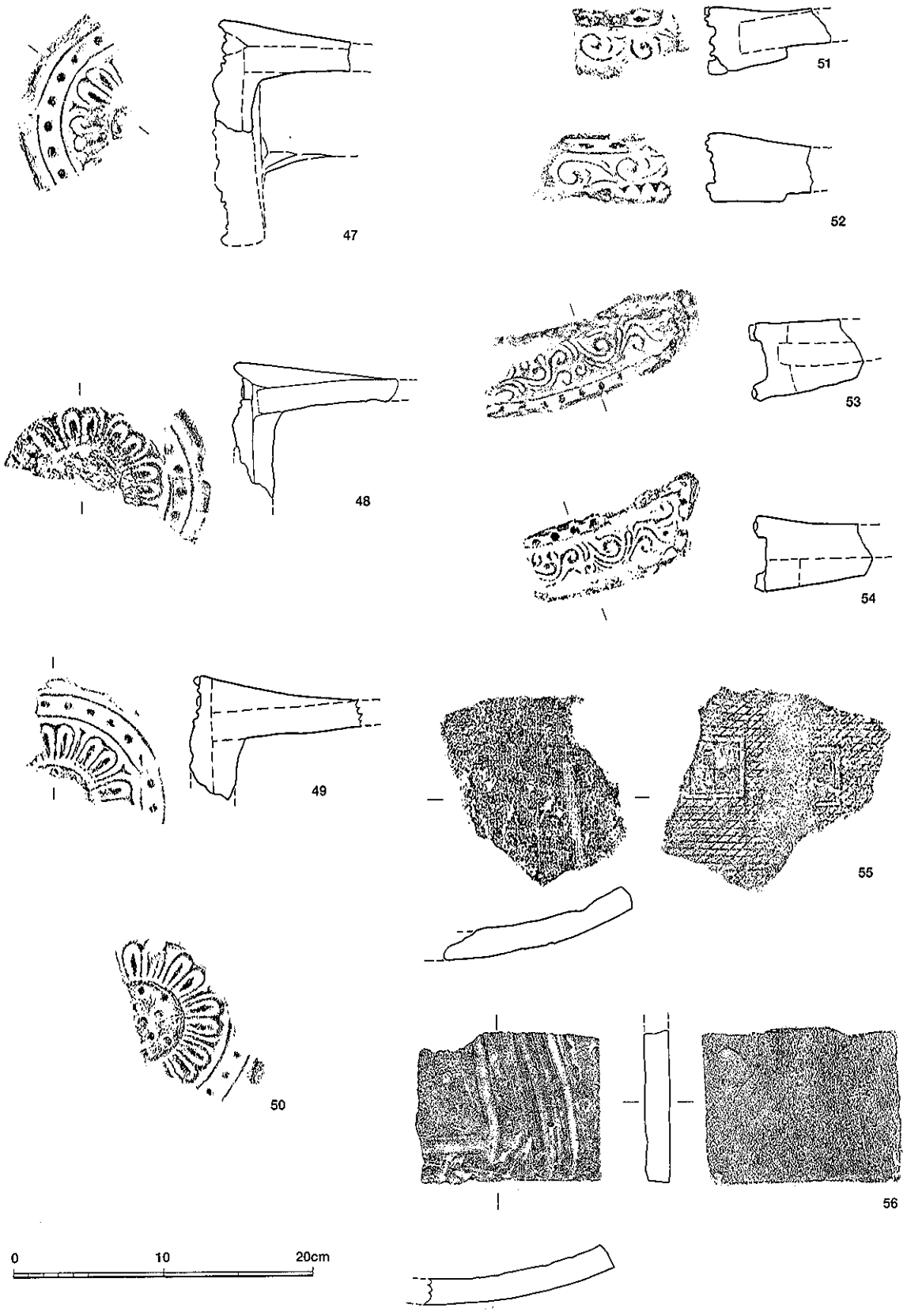


Fig.29　SK15014出土瓦実測図（1/4）



48



48



47



49



50



50

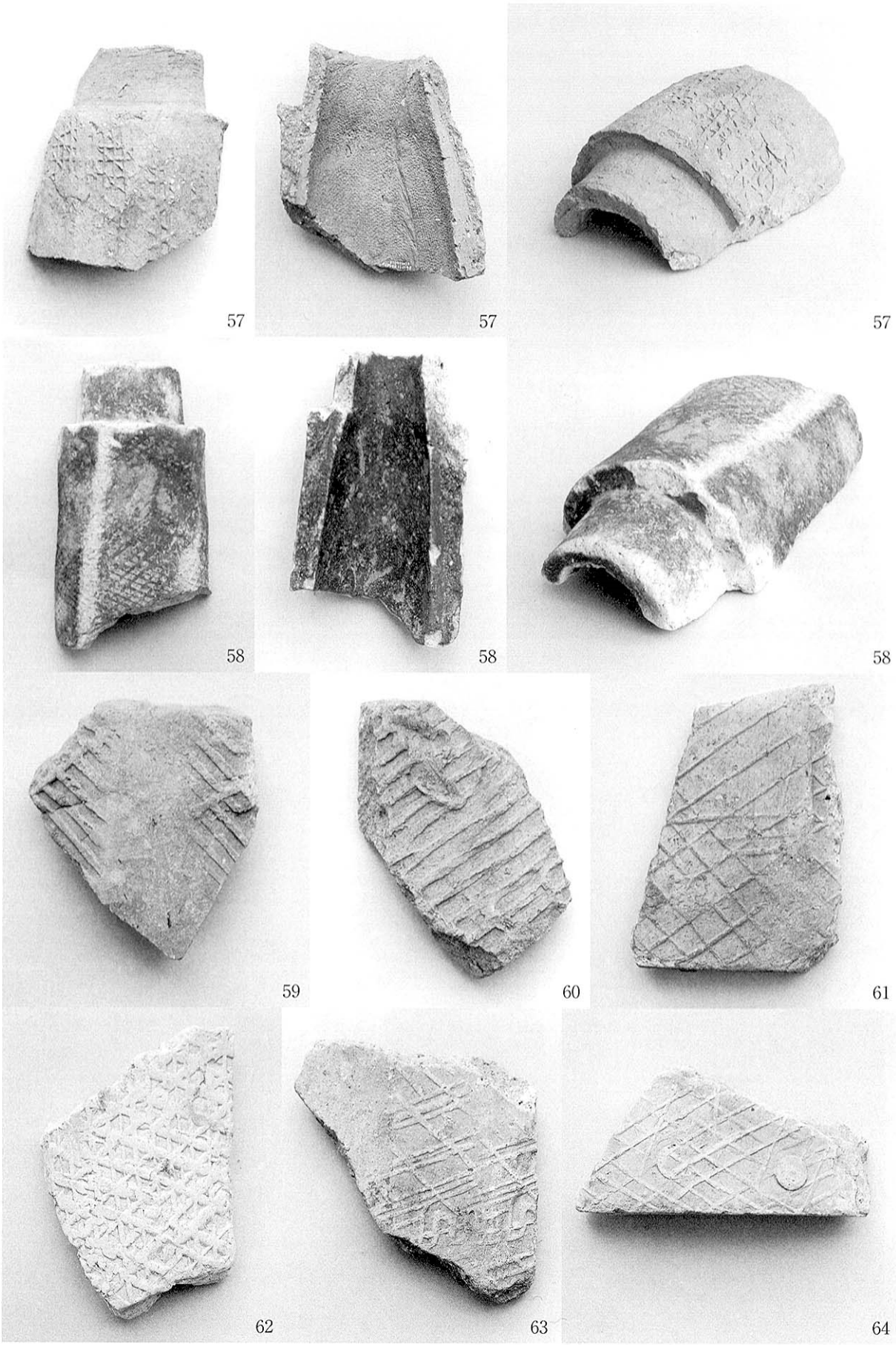


54



53

Ph.45　SK15014出土遺物2



Ph.46　SK15014出土遺物3

直接接合はできない。44は、鉢の小片である。45は、盤口壺である。46は、褐釉陶器の盤口壺である。口縁から頸部にかけてと、体部片に分かれて接合できないが、同一固体と思われる。白色粒子が多い粗い胎土に緑褐色の釉を薄く施す。 Fig.29−51は、鴻臚館式軒平瓦である。Ph.46−57・58は丸瓦である。57は叩き文様分類では5A、58は3'Aa2にあたる（P.106、Fig.70を参照）。59〜62は平瓦である。59・60の叩き文様は2C、61は6'C、62は5Aである。

そのほか、大量に出土した瓦については、紙数の関係から図示できなかった。Tab.4に叩き文様による分類表を示す。

以上述べた遺物では、青磁・陶器のほとんどが二次的に火熱を受け、釉表が荒れている。これは、廃棄のきっかけとして、火災にあったことを示している。また、28〜30、42・43などは重ね焼きの窯道具をはずしただけで、目を落としていない。すなわち、商品として出荷前の状態にあったと考えられる遺物である。

なお、39・40・42・43・45・46などは、 SK15014Aと SK15014Bとで接合できた遺物であり、この点や図示した遺物の年代間からも両遺構の間に時期差を想定する必要がないことは明らかである。これまでに示した土師器や黒色土器の特徴は、9世紀中頃を示しており、鴻臚館第Ⅳ期でも早い段階の廃棄土坑であると考えられる。

Tab. 4　SK15014出土瓦分類

叩き分類	1		2A		2B		2C		3Aa1		3Aa2		3Aa老		3Ab		3Ac1	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15014									○	○			○		○	○	○	
SK15014A							○	○	○	○	○	○	○		○	○		○
SK15014B								○	○	○		○	○		○			

叩き分類	3Ac2		3Ba1		3Ba2		3Ba3		3Bb1		3Bb2		3Bc		3Bd		3Be	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15014															○	○		
SK15014A																○		
SK15014B																○		

叩き分類	4A		4Ba		4Bb		5A		5B		5C		6A		6B		6C	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15014							○				○						○	
SK15014A							○	○	○				○					
SK15014B							○	○						○			○	

叩き分類	6D		6E		6F		6G		6H		縄目		無文	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15014											○	○		
SK15014A											○	○		
SK15014B											○	○		

SK15015A

当初 SK15015として検出した一見東西に長い長方形を呈した土坑は、遺物の集中状況、土坑床面の高低、精査して検出した土坑壁の形状から、３つの遺構に分かれた。よって、これをSK15015A・B・Cとして、別個の遺構として調査を進めた。結局、SK15015Aは第Ⅳ期、SK15015Cは第Ⅴ期の土坑であることが判明したため、それぞれに報告することとし、SK15015Cについては後述する。

SK15015Aは、切り合い関係や兵舎基礎による撹乱のため全形を知りがたいが、おおむね一辺200cmの略方形を呈する。検出面から床面までの深さは、約20cmである。土坑の特に西半分にかたまって遺物が廃棄されていた。

出土遺物をFig.31に図示する。1～3は**土師器**である。1・2は坏で、直線的に立ち上がる体部を持つ。4～6は、**黒色土器A類**椀である。全体に磨滅気味だが、体部外面は横撫で、内面はへら磨きで調整している。椀の体部は丸みが強く、口縁は軽く外反する。7は、**須恵器**の甕である。8・9は**白磁**である。8は輪花の坏で、底部を欠くが輪状高台であろう。9は、蛇の目高台の碗である。10～12は、**越州窯系青磁**である。10は水注の口縁部、11・12は碗である。11は、高台の内側に目跡が見られ、年代的に新しい要素を示す。13・14は**無釉陶器**である。13は鉢、14は茶展輪の破片である。14の縁辺部には使用痕が顕著に見られる。15～19は**瓦**である。15・16は鴻臚館式軒平瓦、17は均等唐草文軒平瓦である。18は単弁の軒丸瓦で、全面に灰緑色の自然釉がかかる。19は鬼瓦の破片である。側面も背面も剥離し表面の破片のため、実測を行わず拓本のみを示している。縁辺の珠文と鬼面の髭付近が残っているものと思われる。



Ph.47　SK15015A検出状況（北西より）

このほかに出土した多量の平瓦・丸瓦については、叩き文様による分類表をTab.5に示す。
土師器や黒色土器椀の特徴から、10世紀初頭に位置づけるのが妥当であろう。

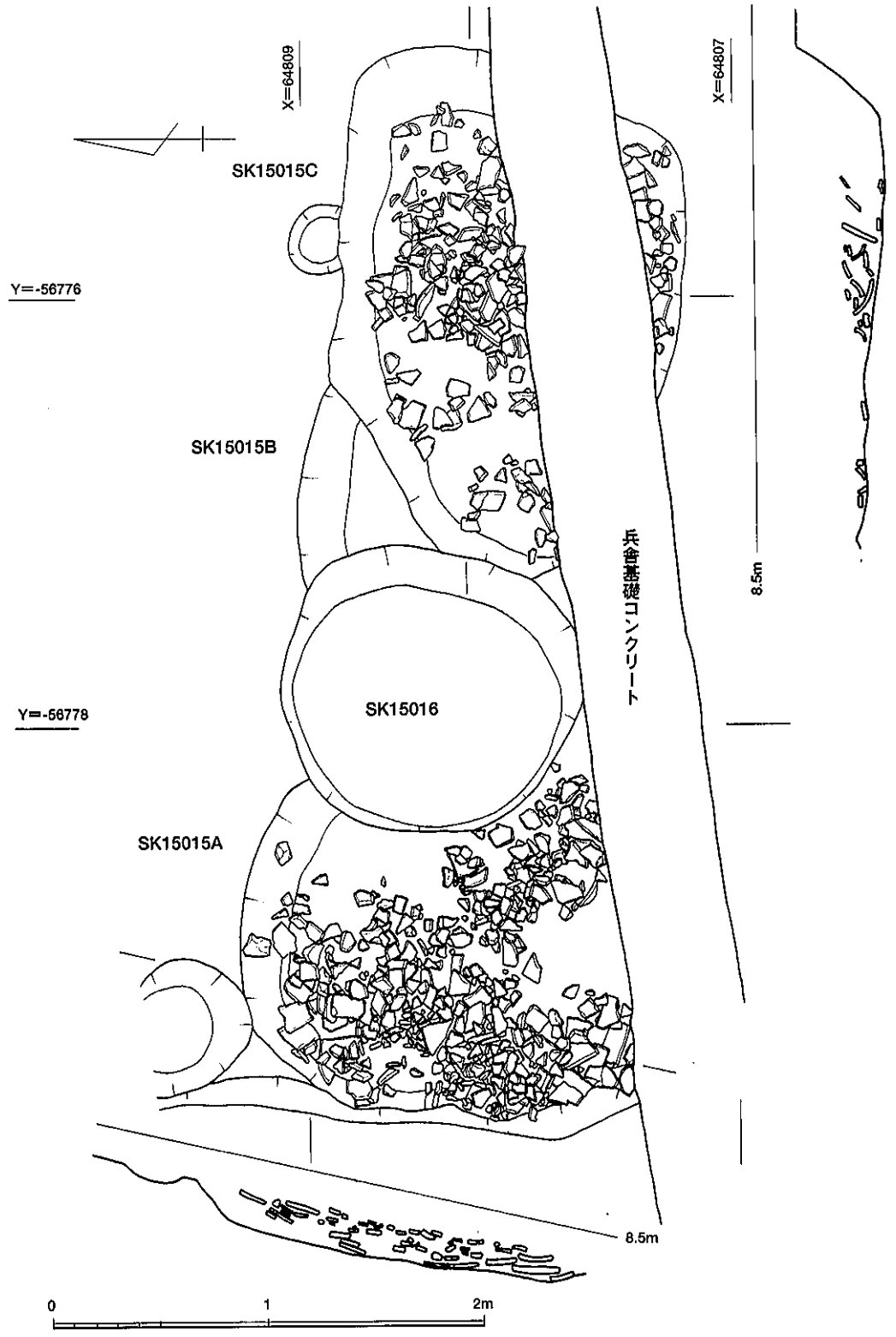


Fig.30　SK15015実測図（1/30）

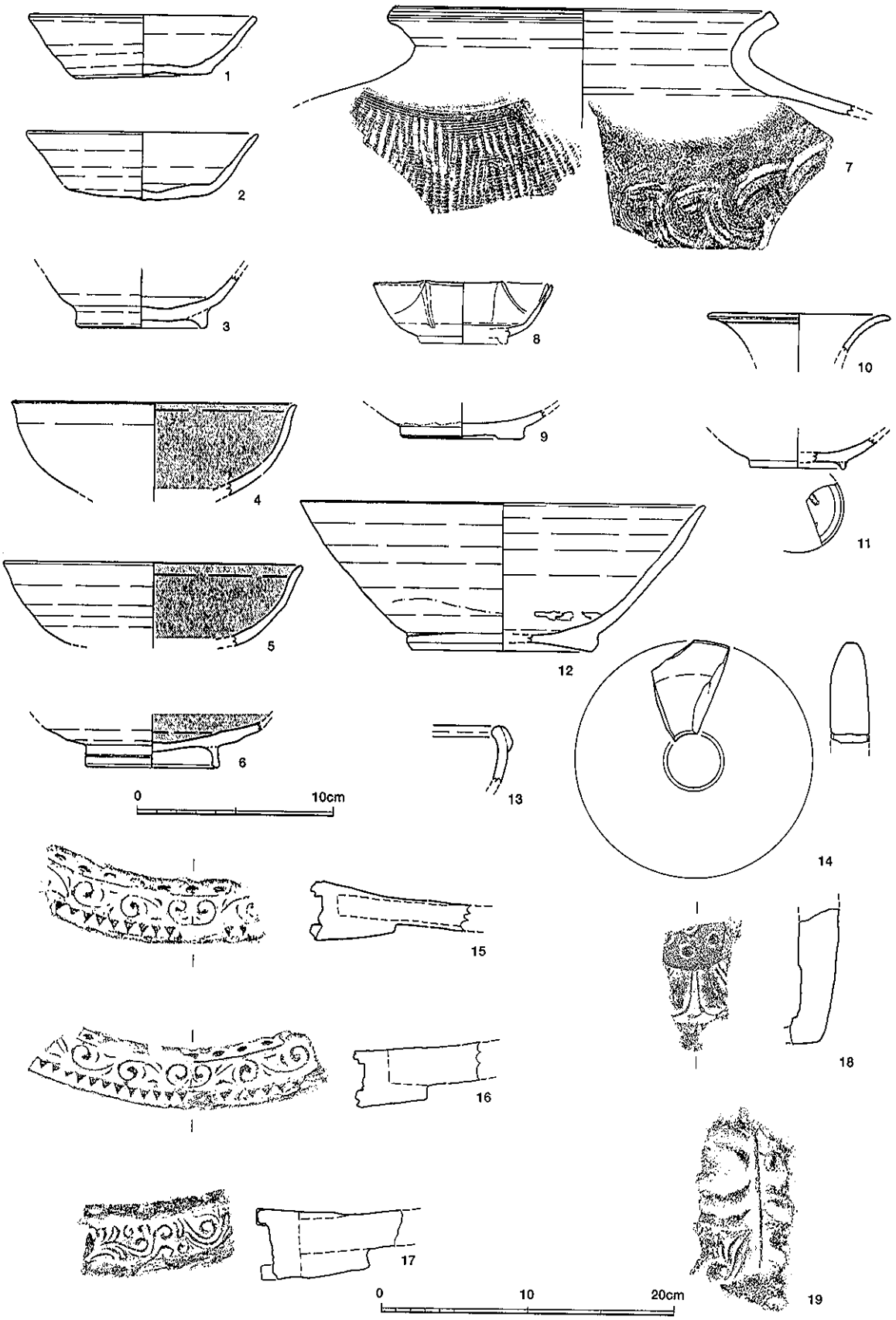


Fig.31　SK15015A出土遺物実測図（1/3,1/4）



Ph.48　SK15015A出土遺物

Tab. 5　SK15015出土瓦分類

叩き分類	1		2A		2B		2C		3Aa1		3Aa2		3Aa老		3Ab		3Ac1	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15015A									○	○	○	○	○				○	
SK15015C		○							○	○	○	○	○			○	○	

叩き分類	3Ac2		3Ba1		3Ba2		3Ba3		3Bb1		3Bb2		3Bc		3Bd		3Be	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15015A			○															
SK15015C			○	○			○								○			

叩き分類	4A		4Ba		4Bb		5A		5B		5C		6A		6B		6C	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15015A							○	○	○								○	
SK15015C	○						○	○	○		○		○					

叩き分類	6D		6E		6F		6G		6H		縄目		無文	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15015A							○				○	○		
SK15015C											○	○		

SK15017

調査区南辺から検出した瓦溜りである。廃棄された瓦の粗密から、A～Cに分けたが、完掘したところ、AとCは一連の遺構である。各遺構に顕著な時期差は認められない。

SK15017Aの出土遺物をFig.33・34に示す。1は、**土師質の土製品**で猿面硯であろう。上面は、指で押さえられて窪む。2～5は、**土師器**の碗である。高台径は小さくなるが、逆に高台は高く外方に踏ん張る。6・7は、**須恵器**の甕である。8は、**唐三彩**の盤である。白化粧した白地に緑釉・黄釉で斑点を打つ。胎土は緻密で、硬質に焼成される。晩唐の三彩と思われる。9～17は、**越州窯系青磁**である。9は合子の蓋、10は皿、11～17は碗である。12・13・15・16は、全面施釉する優品である。18～20は、**無釉陶器**のこね鉢である。21～25、Ph.54－33・34は、瓦である。21は鴻臚館式軒丸瓦、22は鴻臚館式軒平瓦である。23～25は文字銘をもつ平瓦である。22は文字の残画は見えるが判読不能、24・25は「賀茂」銘が判読できる。

Fig.35－26～29は、SK15017Bの出土遺物である。26は、**鉄鏃**である。茎の一部を欠くが、出土状況から、全長18.25cmに復元できる。27・28は**越州窯系青磁**である。27は蛇の目高台の碗で、全面に施釉する。28は、長頸瓶の口縁部である。29は**褐釉陶器**の壺または瓶の底部である。

30～32は、SK15017Cの**出土遺物**である。30は**越州窯系青磁**で全面施釉の碗、31は記号銘を持つ平瓦、32は鴻臚館式軒平瓦の残片である。

33は、SK15017Aに切り込んだ柱穴から出土した越州窯系青磁輪花碗で、時期的には**第Ⅴ期**に降る。

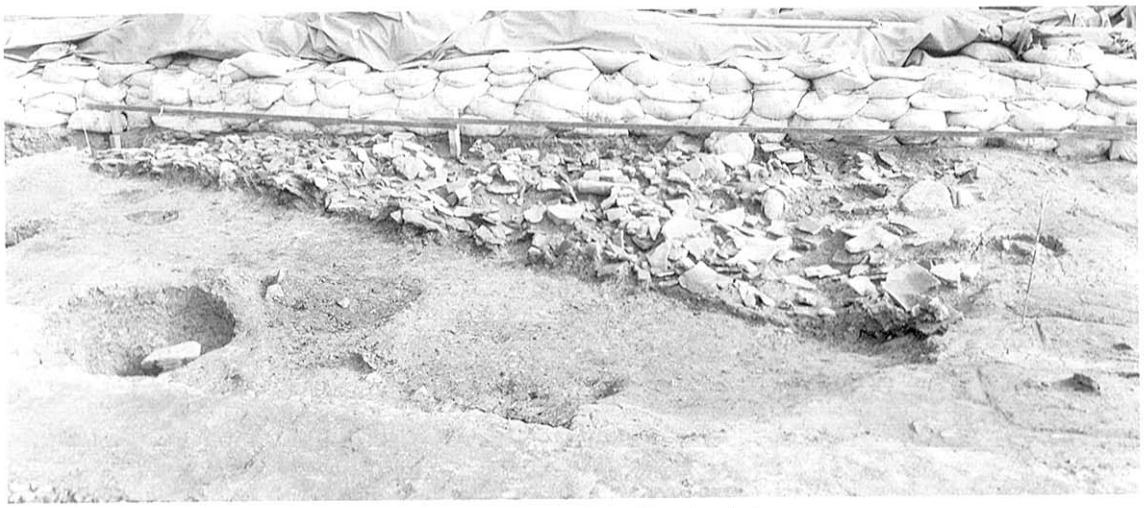
これらの出土遺物から、9世紀後半代が当てられよう。



Ph.49　SK15017検出状況（北東より）



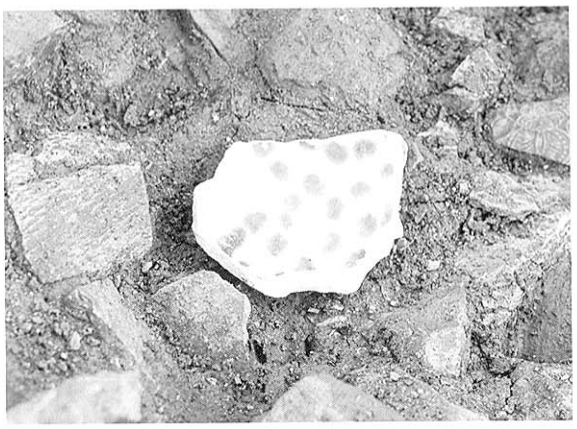
Fig.32　SK15017実測図（1/40）



Ph.50　SK15017断面（北西より）



Ph.51　SK15017完掘状況（北東より）



Ph.52　唐三彩出土状況



Ph.53　瓦出土状況

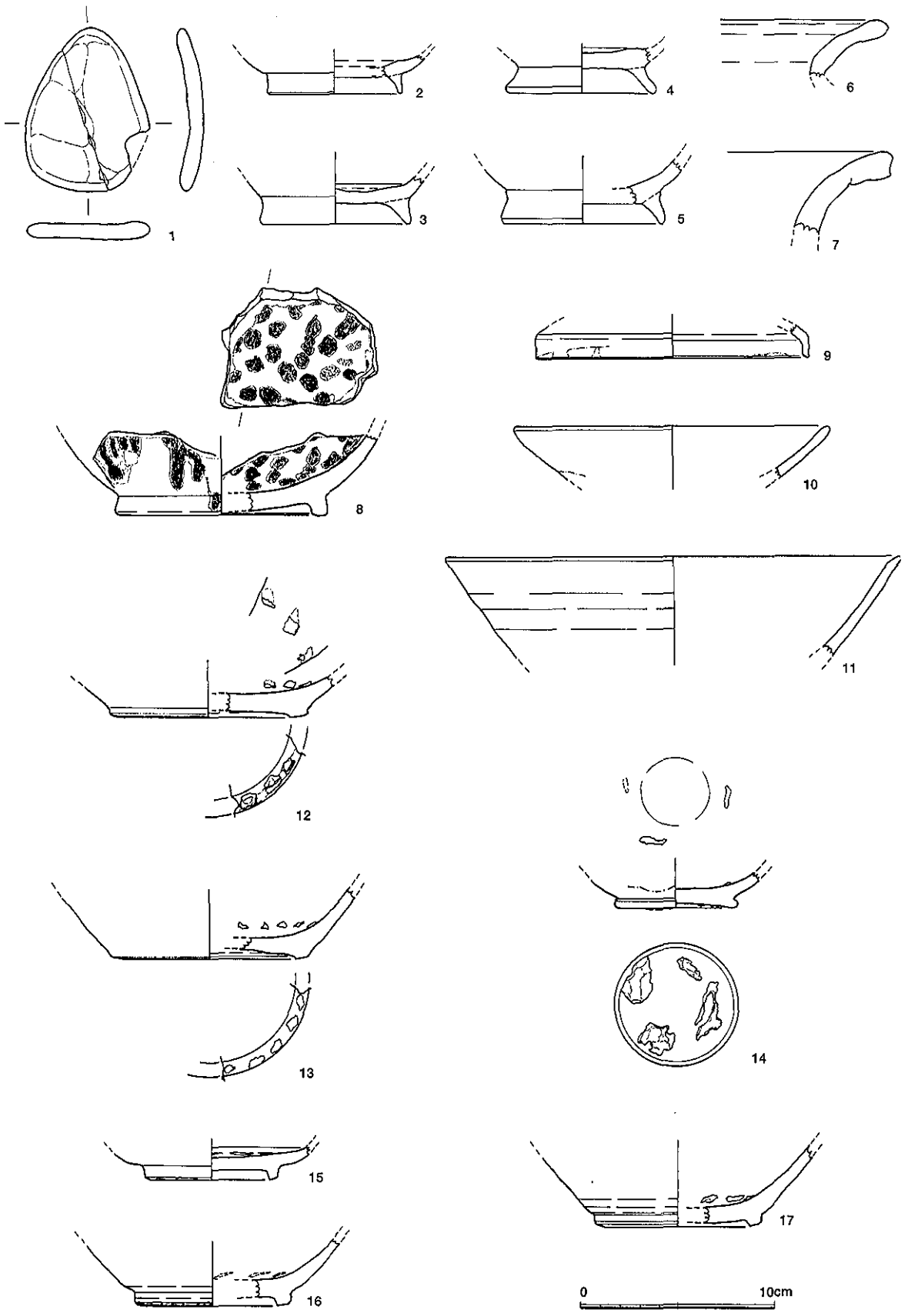


Fig.33　SK15017A出土遺物実測図1（1/3）

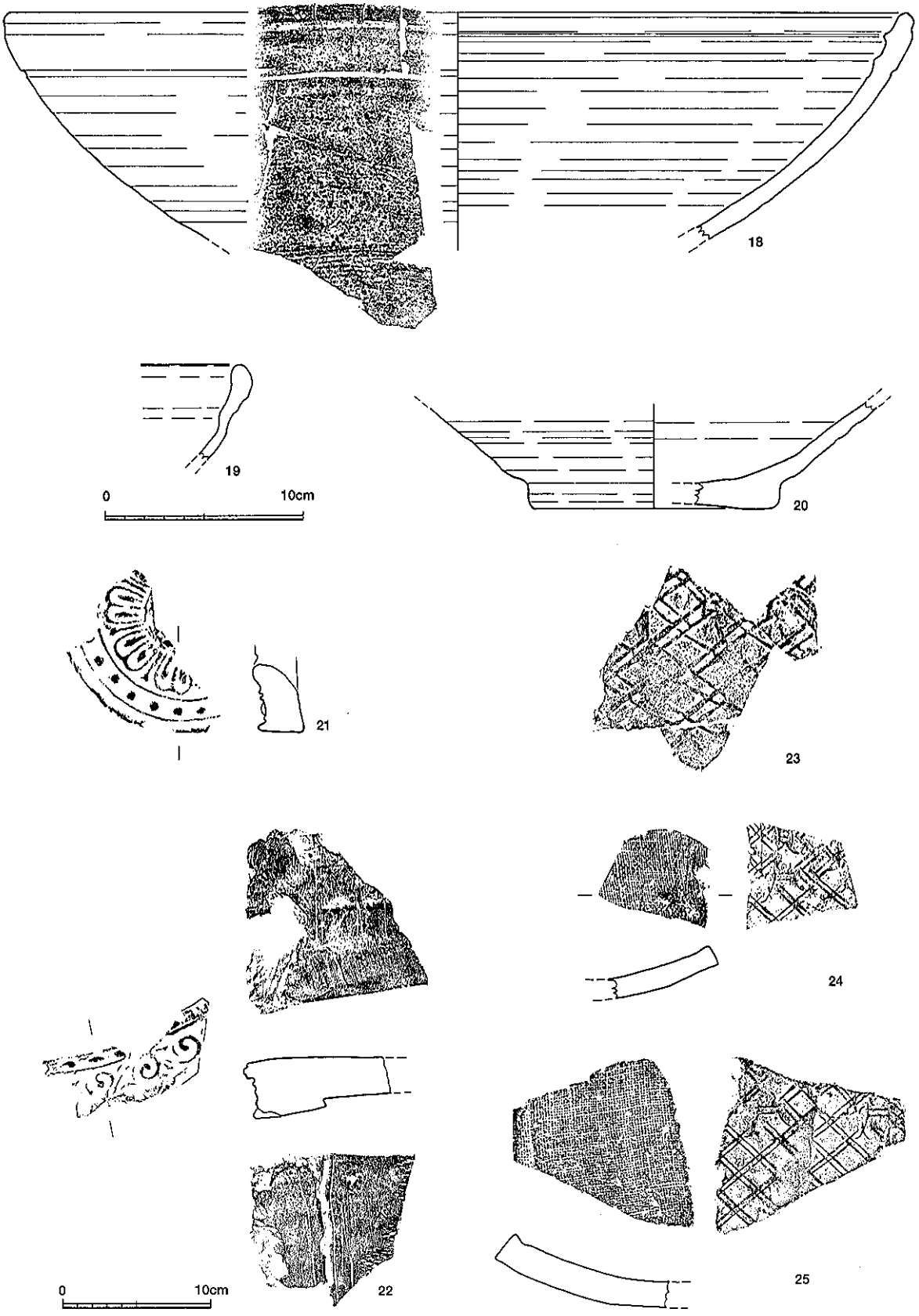
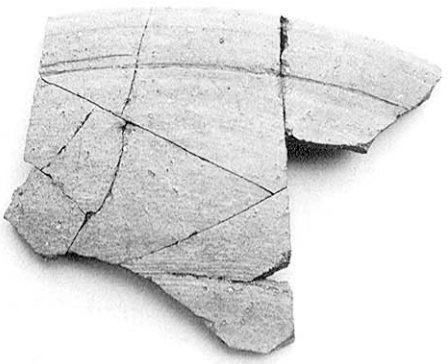
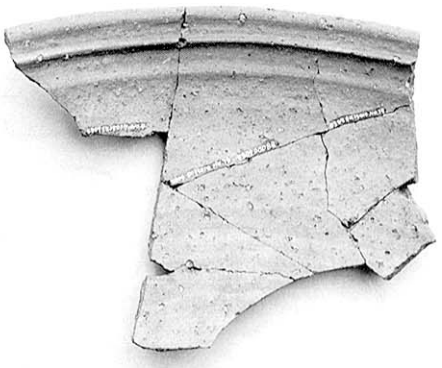


Fig.34　SK15017A出土遺物実測図2（1/3,1/4）



18



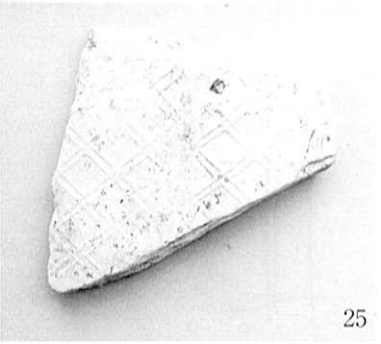
18



21



24



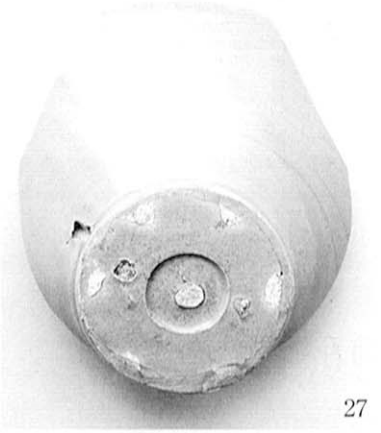
25



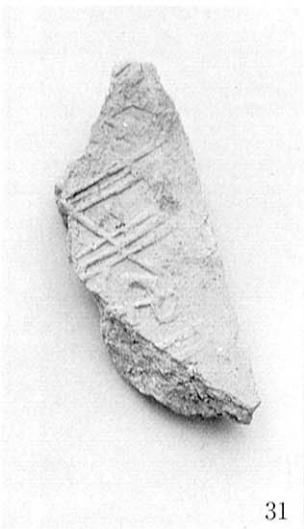
26



27



27



31



33



34

Ph.54　SK15017出土遺物

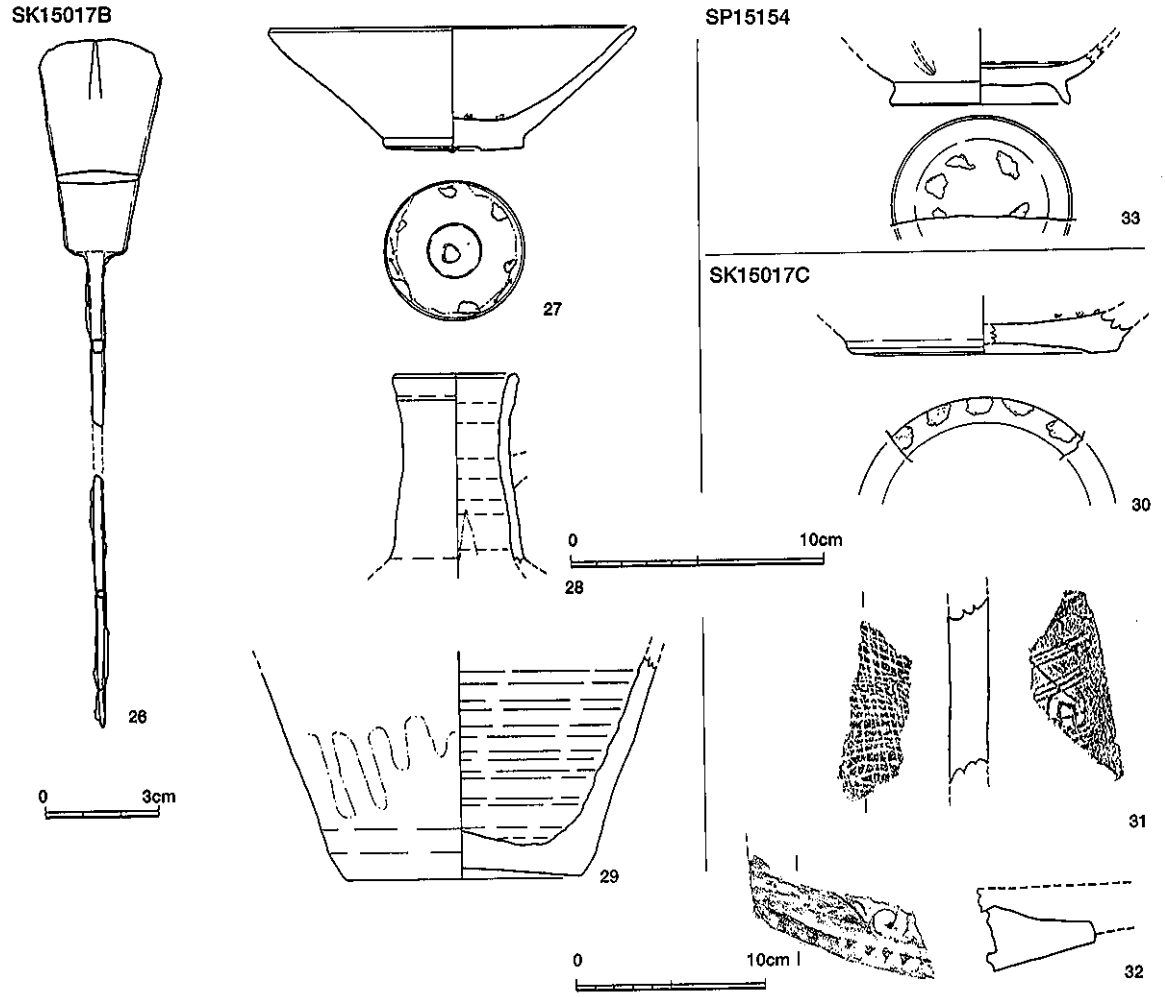


Fig.35　SK15017B・SK15017C・ SP15154出土遺物実測図（1/3, 26－1/2, 31・32－1/4）

Tab. 6　SK15017出土瓦分類

叩き分類	1		2A		2B		2C		3Aa1		3Aa2		3Aa老		3Ab		3Ac1	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15017A	○								○	○	○	○	○		○	○	○	
SK15017B									○		○						○	

叩き分類	3Ac2		3Ba1		3Ba2		3Ba3		3Bb1		3Bb2		3Bc		3Bd		3Be	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15017A			○								○					○		
SK15017B																		

叩き分類	4A		4Ba		4Bb		5A		5B		5C		6A		6B		6C	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15017A							○		○	○		○	○	○				
SK15017B																		

叩き分類	6D		6E		6F		6G		6H		縄目		無文	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15017A			○									○		
SK15017B												○		

SK15022

長軸122cm、短軸72cmの小判形を呈した土坑で、検出面からの深さは約30cmをはかる。埋土上半には瓦を主とした廃棄が見られるが、下半部には焼土が残る。本来火を焚いた土坑の跡に、遺物を廃棄したものと思われる。

出土遺物の一部をFig.37に示す。**1～8**は、**土師器**である。**1～3**は皿で、口径13.5～14.0cmをはかる。 **4～8**は坏である。口径12.0・12.2cmとやや小さめの**4・5**と、12.7～13.0cmで大きめの**6～8**がある。**5**は口縁部が外反し、また器壁も薄めで精緻な感がある。**9**は、**新羅陶器**である。壺の肩部であろう。連続馬蹄形文が印花される。**10**は、**白磁**である。口縁は小さく折り返して、玉縁に作る。**11・12**は**瓦**である。**11**は鴻臚館式軒丸瓦で、筒部・瓦当面などの接合状況が明瞭に観察できる。**12**は、均等唐草文の軒平瓦である。遺存部位は少ないが、瓦当に向かって右側の小口は、その上端部分が残っている。その他の平瓦・丸瓦当については、Tab.7に叩き文様による分類を示す。

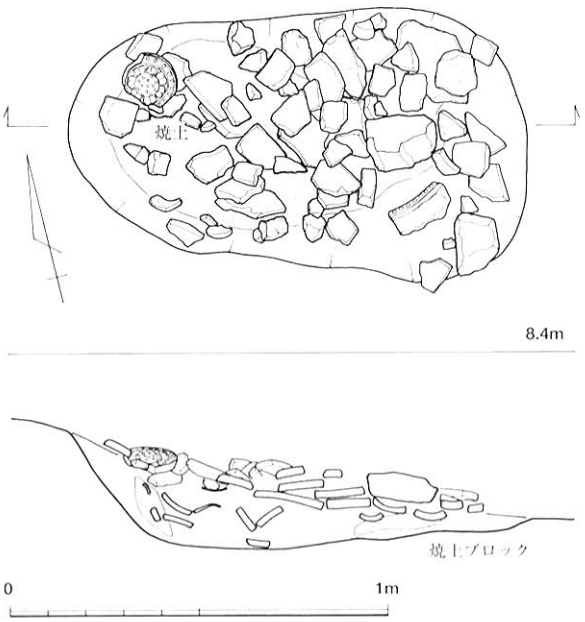


Fig.36　SK15022実測図（1/20）

10世紀初頭頃に当てるのが妥当であろう。


Ph.55　SK15022（南東より）

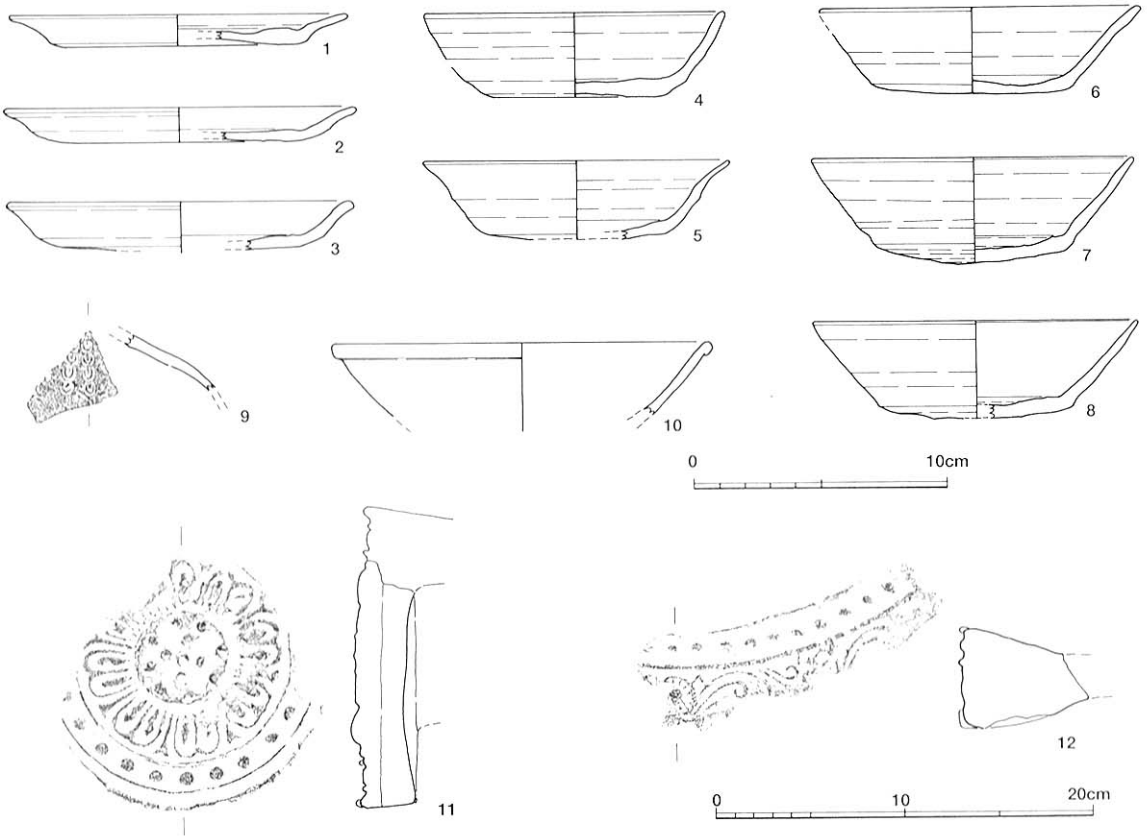
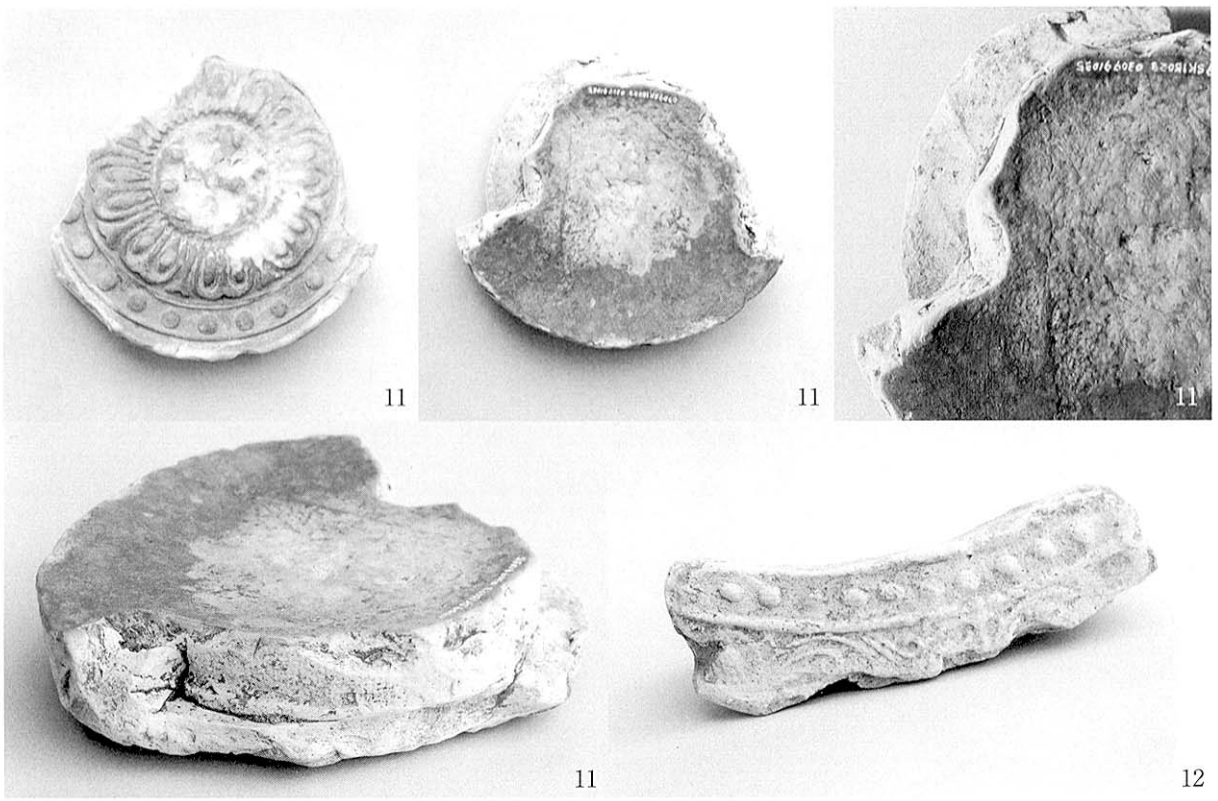


Fig.37　SK15022出土遺物実測図（1/3,1/4）



Ph.56　SK15022出土遺物

Tab. 7　SK15022出土瓦分類

叩き分類	1		2A		2B		2C		3Aa1		3Aa2		3Aa老		3Ab		3Ac1		3Ac2	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15022		○							○	○					○					

叩き分類	3Ba1		3Ba2		3Ba3		3Bb1		3Bb2		3Bc		3Bd		3Be		4A		4Ba		4Bb	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15022																						

叩き分類	5A		5B		5C		6A		6B		6C		6D		6E		6F		6G		6H		縄目		無文	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SK15022																							○	○		

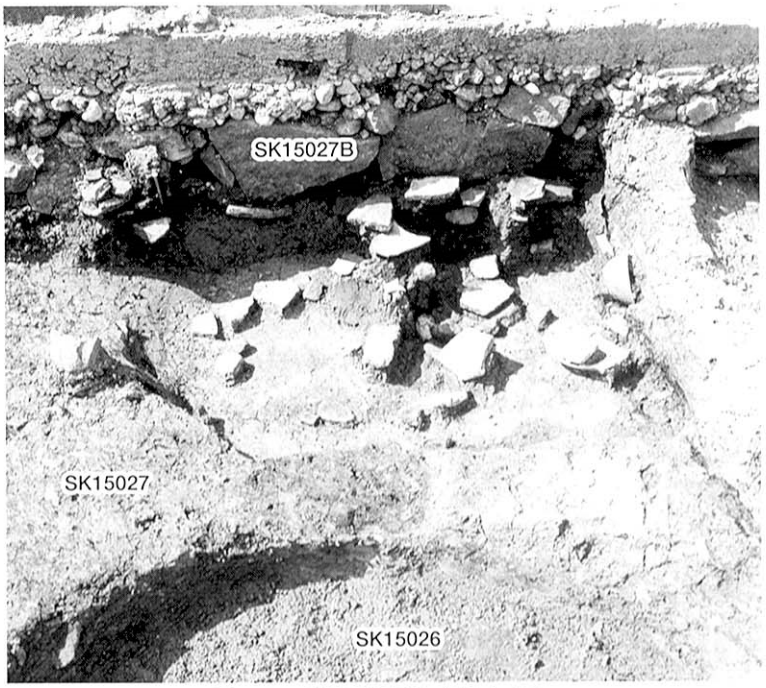
SK15027B

梵鐘鋳造遺構SK15027を切る土坑である。当初SK15027と合わせて単一の遺構と考えたが、遺物の出土状況、埋土の堆積状況から切り合い関係が判明した。また、東側では、SK15028に切られる。

北側は、兵舎基礎の下になっていたが、SK15027の切り取り作業のため兵舎のコンクリート基礎を除去して遺構検出を試みたところ続き部分が遺存し、追加調査を実施した（平成17年度調査）。

瓦・初期貿易陶磁器・土師器・獣骨などを一括廃棄した土坑である。9世紀後半に当てられる。

詳細は、次年度の報告書で述べる予定である。



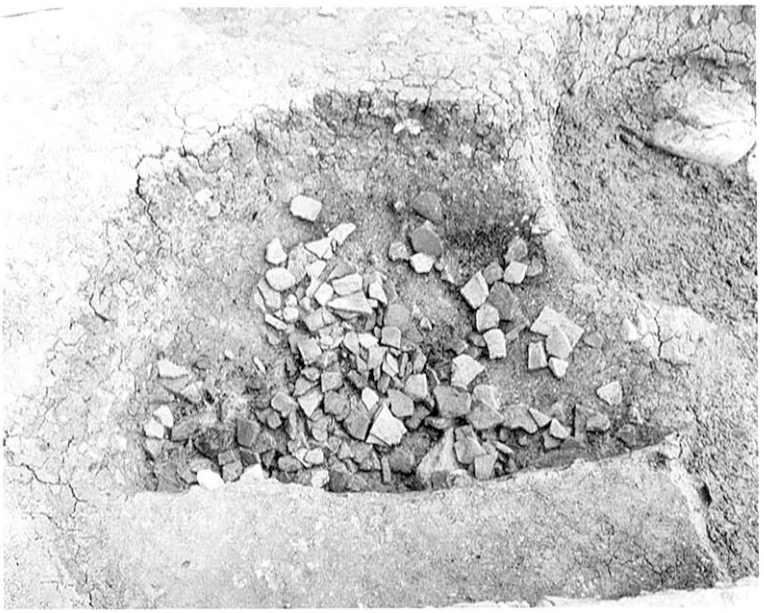
Ph.57　SK15027B（南より）

SK15028

SK15027Bを切る円形土坑である。埋土中には、二層にわたって炭・灰層が広がっており、獣骨が含まれるなど、食物残滓を廃棄した色彩が強く感じられた。また、瓦・初期貿易陶磁器・土師器も一緒に廃棄されている。

9世紀後半に属する。

SK15027B同様に兵舎基礎の下に続いていたが、平成17年度で追加調査を行った。


Ph.58　SK15028（北より）

詳細は、次年度の報告書に譲る。

⑥　第Ⅴ期の遺構（10世紀後半～11世紀前半）

第Ⅴ期の遺構としては、廃棄土坑と溝状遺構がある。溝状遺構 としては、東西溝 SD15052と南北溝 SD15098が検出された。両者は、それぞれの東端と北端が560cmほどの間隔をあけて直角に折れており、溝による区画の北東角を形作っている。鴻臚館の盛り土整地面は、この溝による区画の少し内側から傾斜を始め、溝の外側で急速に傾斜を強めて谷に落ち込んでいく。すなわち、最終段階での鴻臚南館敷地の北東角を検出したものと考えられる。

SK15015C

前述したようにSK15015から分離した土坑で（P.54参照）、長辺230cm短辺150cmのひずんだ長方形を呈する。遺構検出面から床面までの深さは40cm程度で、埋め土の下半分に瓦を主とした遺物が廃棄されていた。

出土遺物の一部を**Fig.38**に示す。**1～8**は、**土師器**である。**1～3**は坏で、腰の丸みが強く、口縁は外反する。**4**は小椀で、低い高台が付く。器面は荒れ、調整不明。**5～6**は椀で、外方に踏ん張った細く高い高台を持つ。**6**の腰部には、内外面ともに指押さえの痕跡が見られる。**8**は、脚付の鉢である。底部から体部に移行する内面には、絞り痕跡が並ぶ。**9**は、**黒色土器B類**椀である。内外面ともにへら磨きされる。**10～12**は、**越州窯系青磁**碗である。**11**の見込みには、毛彫りで草文が描かれる。**13・14**は、**白磁**の大型鉢である。**15**は、鴻臚館式**軒平瓦**である。小口は、へらで面取りした後、縦方向に撫でを加える。

このほかに出土した平瓦・丸瓦については、叩き文様による分類表をP.57、**Tab.5**に示している。

土師器・黒色土器の特徴から、10世紀後半の廃棄土坑と考えられる。



Ph.59　SK15015C（北西より）

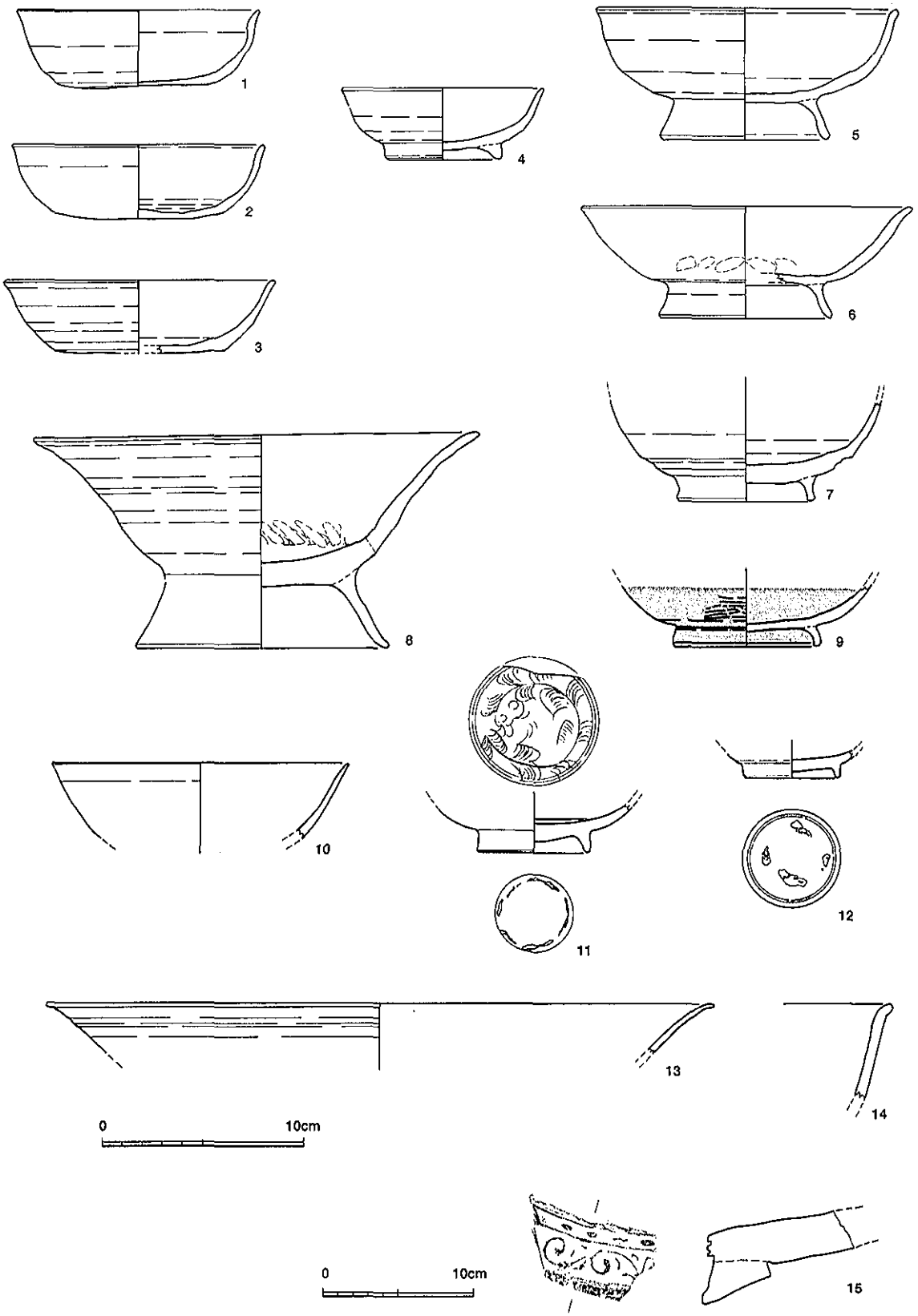


Fig.38　SK15015C出土遺物実測図（1/3,1/4）

SD15052

鴻臚南館の東を画する南北溝である。土層断面の観察では、4～5回程度の掘り直しがあるようで、複雑な状況を呈している。精査するに当たっては、 鍵になる層を基準に大まかに分層して掘削し、遺物を取り上げた。また、最下層部分の溝については、SD15052Bとして調査している。

SD15052は、全体としては幅340cm、深さ90cmを測る。SD15052Bは、その床面からさらに幅110cm、深さ30cm掘り込んだもので、最下部の底面は、凹凸を持っている。

出土遺物をFig.41～48に示す。1は、⑦層から出土した**石印**である。下面は3.6～3.7cmの正方形で、その中3.3cm四方を印面とし「開」の一字を刻み出す。紐は菅紐で、銅印の形態を忠実に模している。また、一側面には、印面の天地を示すため、「上」の刻字がある。石材は滑石であるが、比較的硬質で、滑石特有のズルズルとした柔らかさは感じられない。

その他の出土遺物については、出土層位ごとに述べる。2～4・68は、①～②層出土。2は**土師器**皿で、口径10.5cm。3は、国産の**灰釉陶器**碗である。4は**褐釉陶器**の鉢で、緑茶色の釉を施す。68は、「賀茂」銘の**平瓦**である。

5～45・69～76は、③層出土。5～18は、**土師器**である。5～9は皿で、口径9.8～10.4cmを測る。外底部は、回転ヘラ切りする。10は高台付き皿、11～18は椀である。11は、内外面ともに密にへら磨きする。12は、内外面とも横撫で調整である。18の外底部には、墨書が見られる。漢字一文字と思われるが、判読できない。19～25は**黒色土器A類**、26～29は**黒色土器B類**である。A類は体部内面へら磨き・外面横撫で、B類は内外面ともにへら磨きをおこなう。23～25は、いわゆる托上椀である。



Ph.60　SD15052（南より）

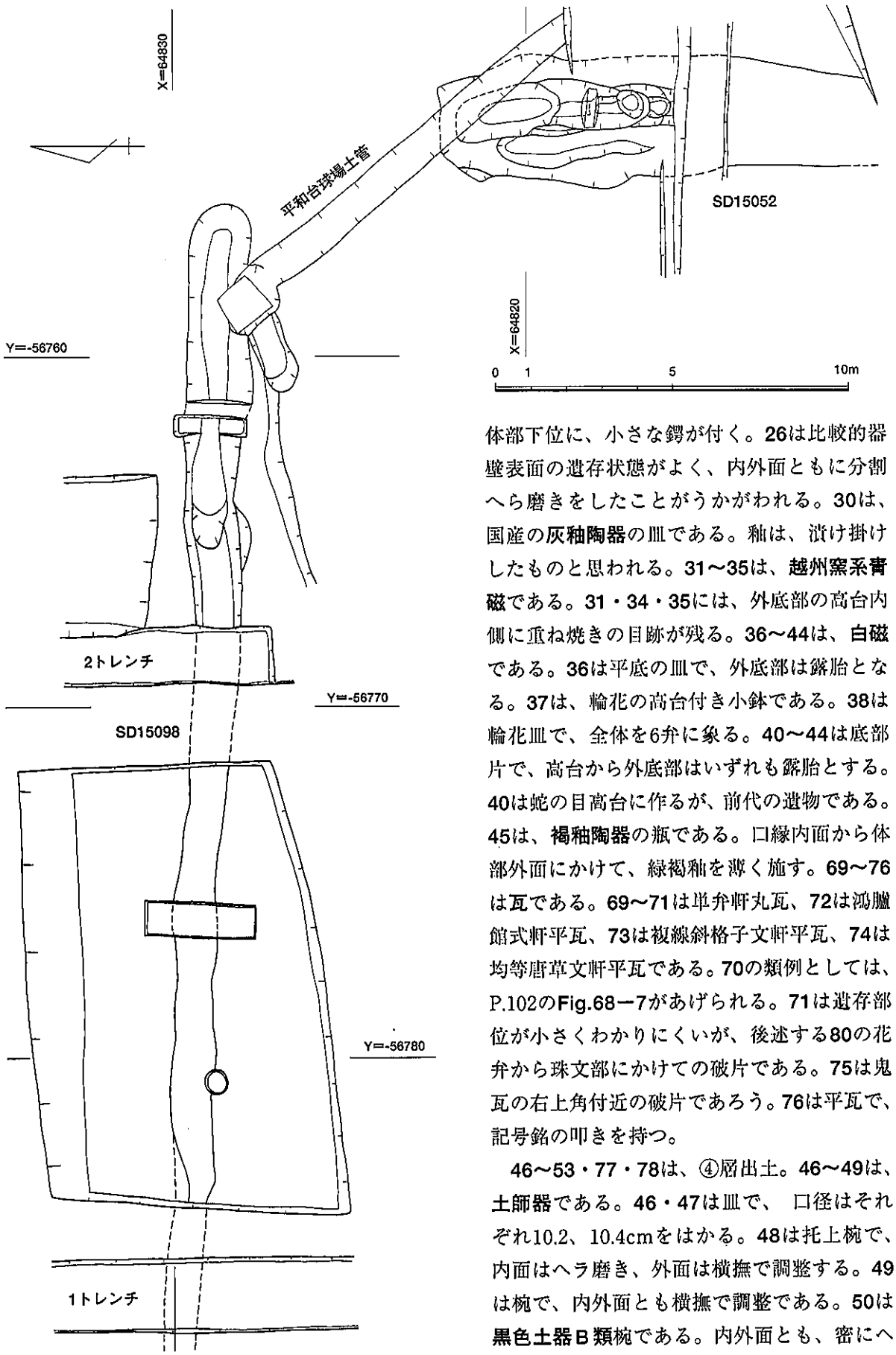


Fig.39　SD15052・15098実測図（1/160）

体部下位に、小さな鍔が付く。26は比較的器壁表面の遺存状態がよく、内外面ともに分割へら磨きをしたことがうかがわれる。30は、国産の**灰釉陶器**の皿である。釉は、漬け掛けしたものと思われる。31～35は、**越州窯系青磁**である。31・34・35には、外底部の高台内側に重ね焼きの目跡が残る。36～44は、**白磁**である。36は平底の皿で、外底部は露胎となる。37は、輪花の高台付き小鉢である。38は輪花皿で、全体を6弁に象る。40～44は底部片で、高台から外底部はいずれも露胎とする。40は蛇の目高台に作るが、前代の遺物である。45は、**褐釉陶器**の瓶である。口縁内面から体部外面にかけて、緑褐釉を薄く施す。69～76は**瓦**である。69～71は単弁軒丸瓦、72は鴻臚館式軒平瓦、73は複線斜格子文軒平瓦、74は均等唐草文軒平瓦である。70の類例としては、P.102のFig.68－7があげられる。71は遺存部位が小さくわかりにくいが、後述する80の花弁から珠文部にかけての破片である。75は鬼瓦の右上角付近の破片であろう。76は平瓦で、記号銘の叩きを持つ。

46～53・77・78は、④層出土。46～49は、**土師器**である。46・47は皿で、口径はそれぞれ10.2、10.4cmをはかる。48は托上椀で、内面はヘラ磨き、外面は横撫で調整する。49は椀で、内外面とも横撫で調整である。50は**黒色土器B類**椀である。内外面とも、密にヘ

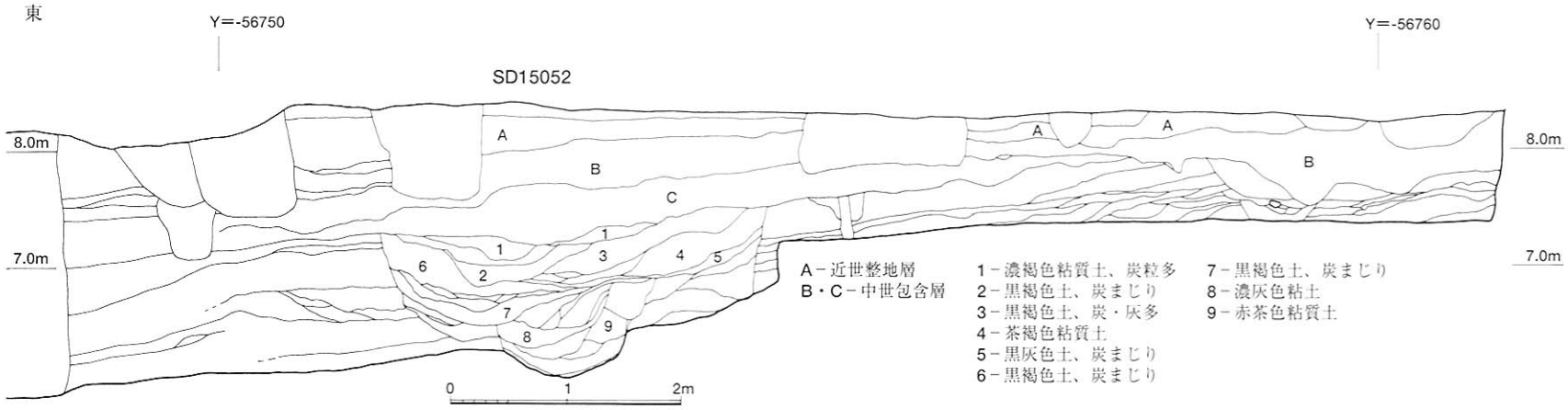
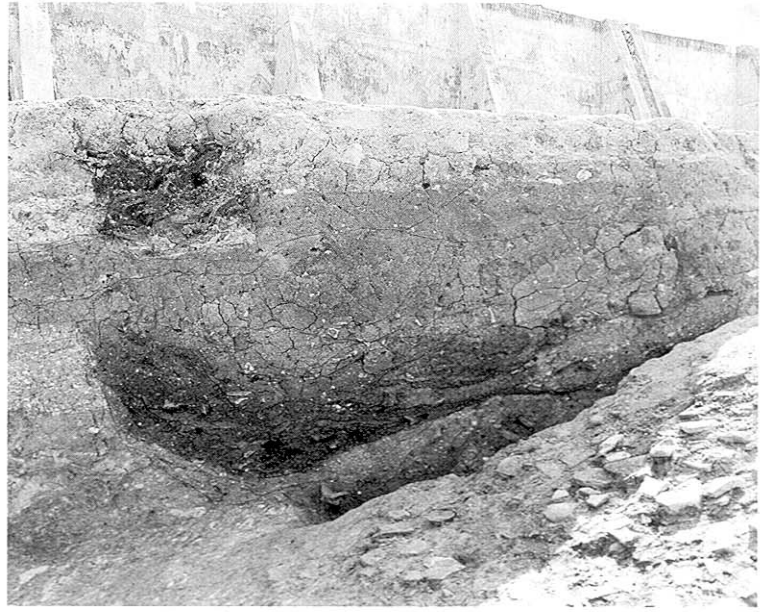


Fig.40　SD15052土層実測図（1/60）



Ph.62　SD15052B（北より）



Ph.61　SD15052断面土層（北より）

ラ磨きを施す。51は、**白磁**の輪花小鉢である。52は**越州窯系青磁**の輪花碗で、高台内側に目跡が認められる。53は、**無釉陶器**のこね鉢である。内底部は使用のため磨耗しているが、体部との屈折部付近が特に顕著である。77・78は「賀茂」銘をもつ**平瓦**の破片である。

54～58・79は、⑦層出土。54は、**土師器**椀である。体部は、内外面とも横撫で調整、内底部は、指削りする。55～58は、**越州窯系青磁**である。56～58の碗は、全面施釉で、高台畳み付きに目跡が残る。79は、鴻臚館式**軒平瓦**である。縄目叩きを持つ。

59～65・80～86は、⑧層出土。59は、**土師器**の皿で口径9.8cm、底部は回転へら切りする。60は、**黒色土器B類**の小型壺である。内外面は密なへら磨きで、外面には部分的に煤が付着している。61は、国産の**灰釉陶器**皿である。釉は漬け掛けする。62・63は、**新羅陶器**の壺である。64・65は**越州窯系青磁**碗で、毛彫りで草花文を描く。80・81は軒丸瓦、82は均等唐草文軒平瓦、84～86は平瓦である。83は、内外面に刷毛目を持つ。84の下面は平行叩きであるが、刷毛目を加える。胎土中には籾ガラを含んでいる。85は、「作」の左字銘の叩きを持つ。

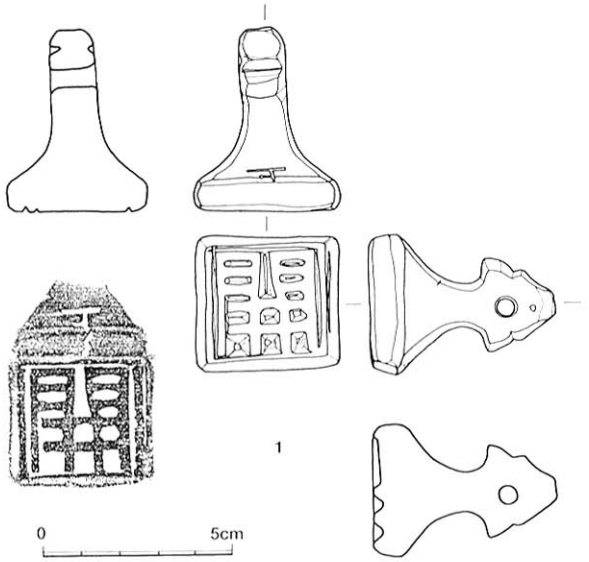
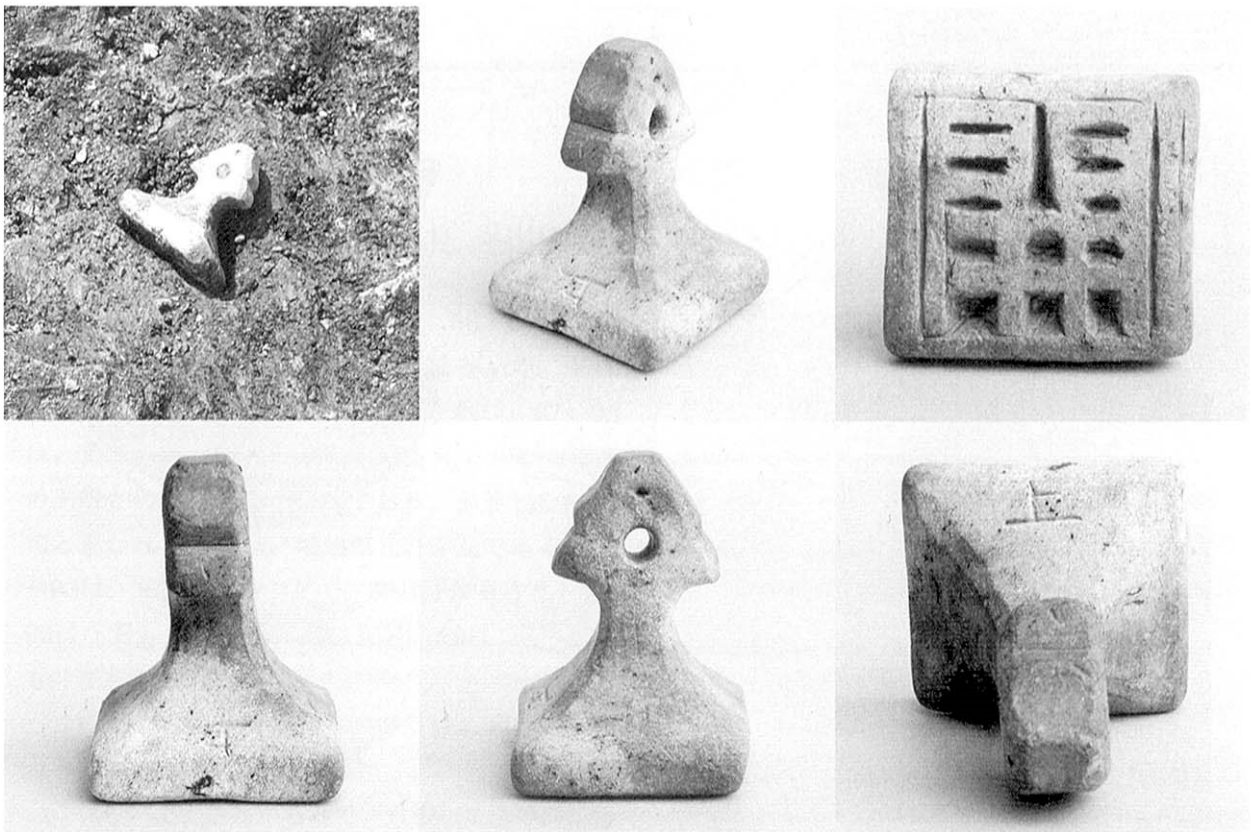


Fig.41　SD15052出土遺物実測図1（1/2）



Ph.63　SD15052出土石製印

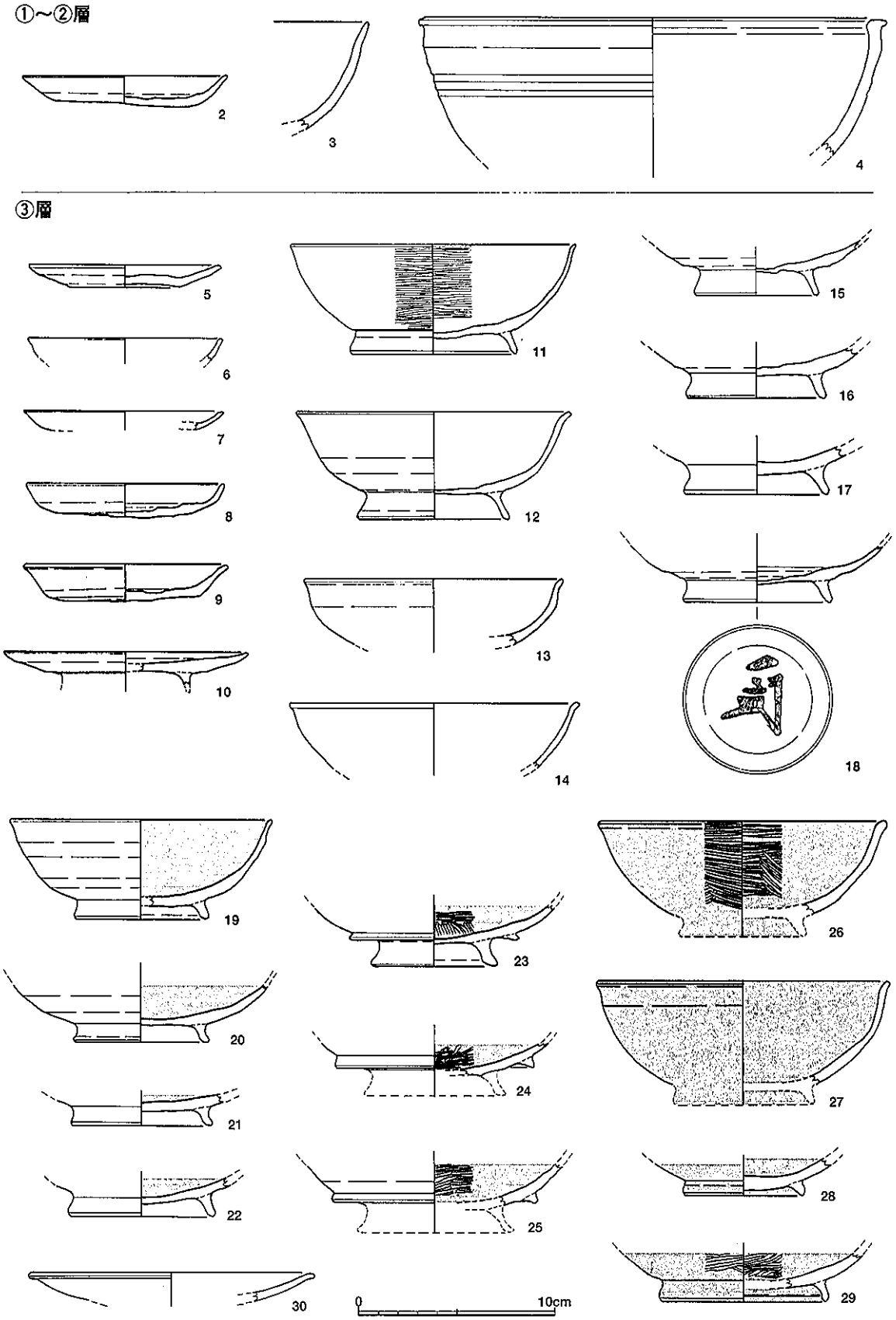


Fig.42　SD15052出土遺物実測図2（1/3）

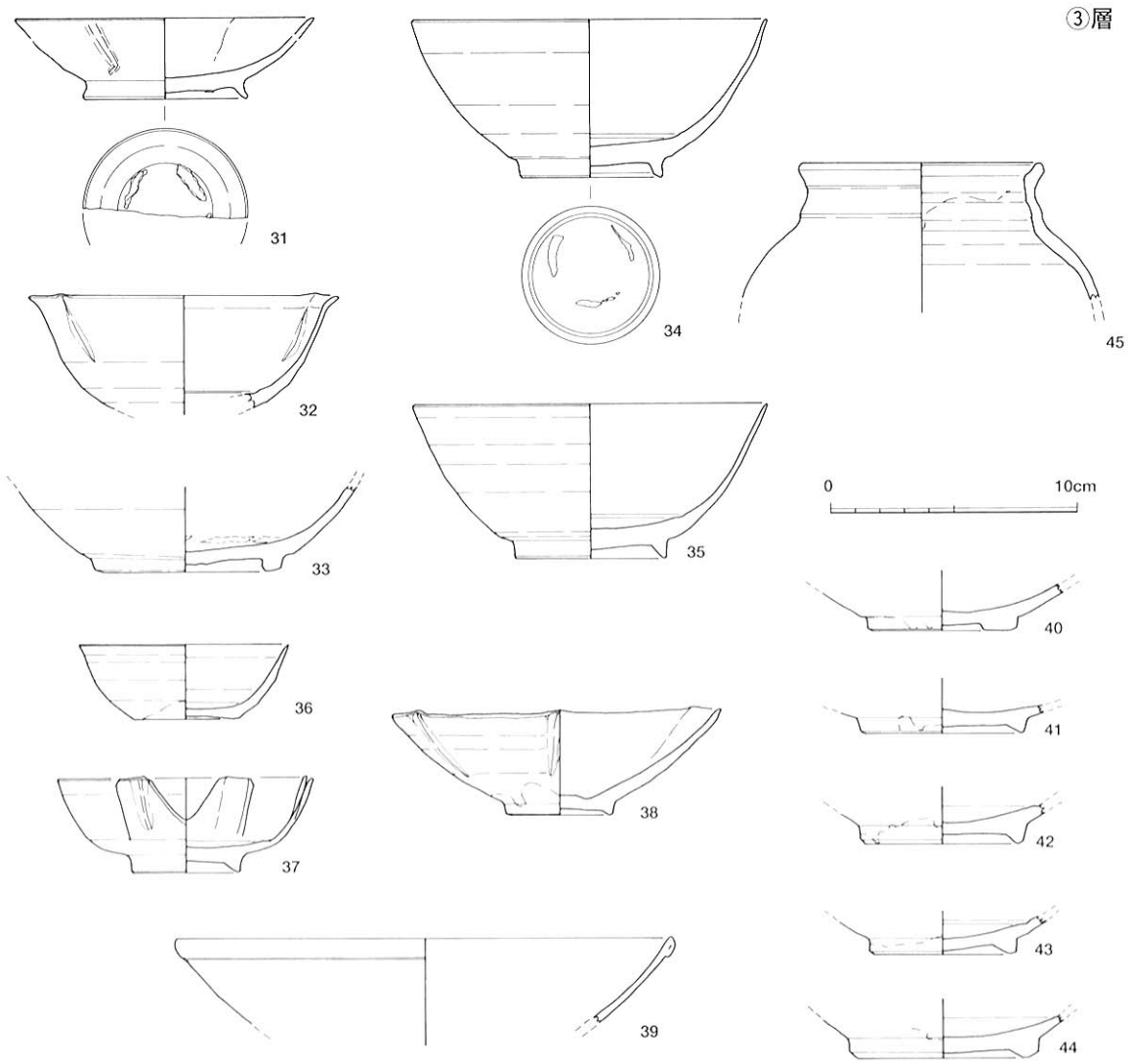


Fig.43　SD15052出土遺物実測図3（1/3）

66・67・87～93は、⑨層出土。66・67は、**越州窯系青磁**碗である。薄手・精緻な釉調で、66は内面に、67は内外面に毛彫り文様を持つ。87～93は、**瓦**である。87は、単弁の軒丸瓦である。花弁の先端と外縁の珠文が残っており、前述した69の類と思われる。88は、鴻臚館式軒平瓦である。89～93は、文字銘を持つ瓦で、89は「伊貴作瓦」銘、90は「賀」の左字か、91は記号、92は「左」、93も「左」であろうか。

このほかの平瓦・丸瓦については、叩き文様による分類表をTab.8に示す。

これらの出土遺物からみて、重複した溝の間に時期差は認められず、11世紀前半の溝と考えられる。



Ph.64　SD15052出土土師器墨書

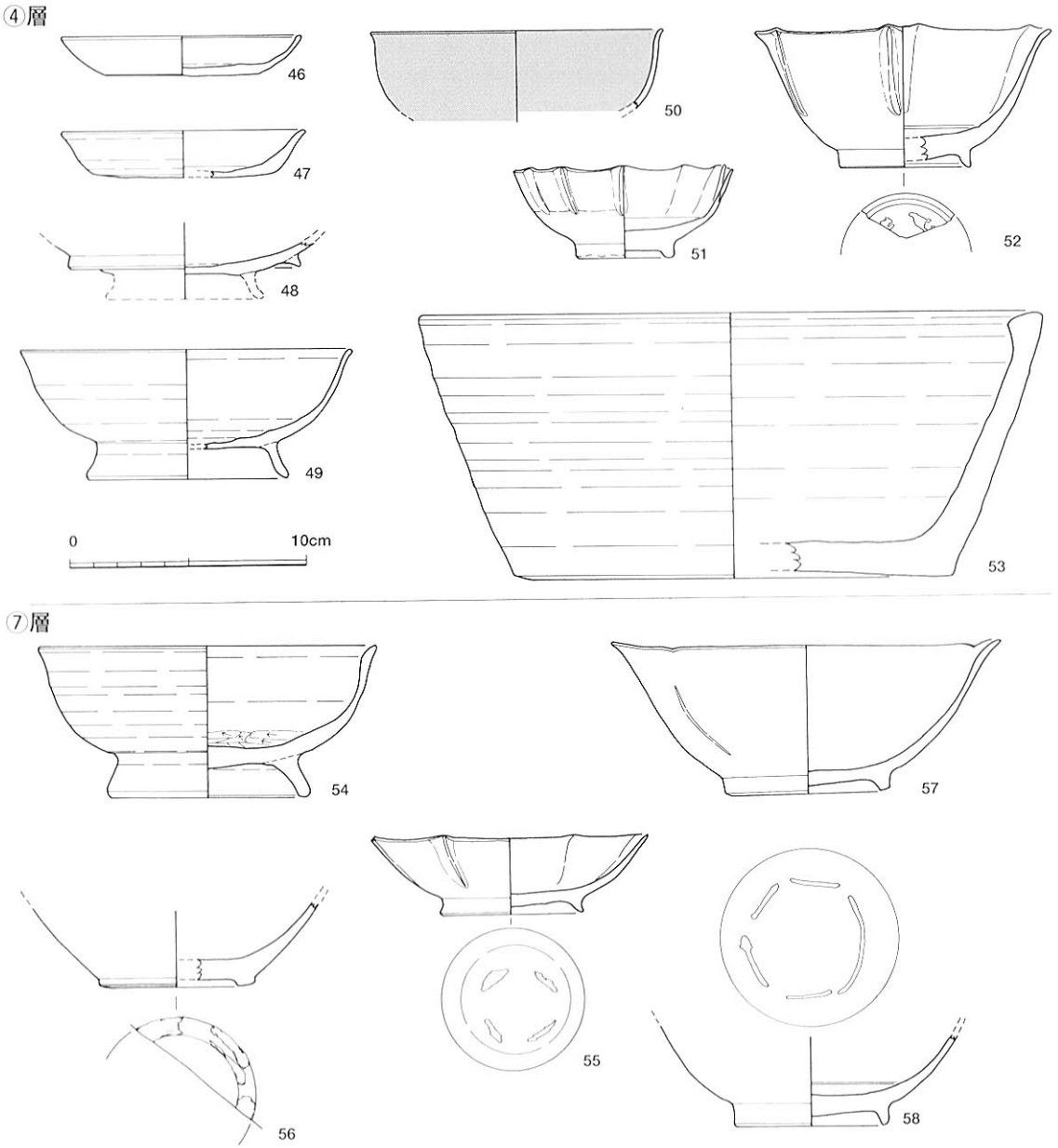
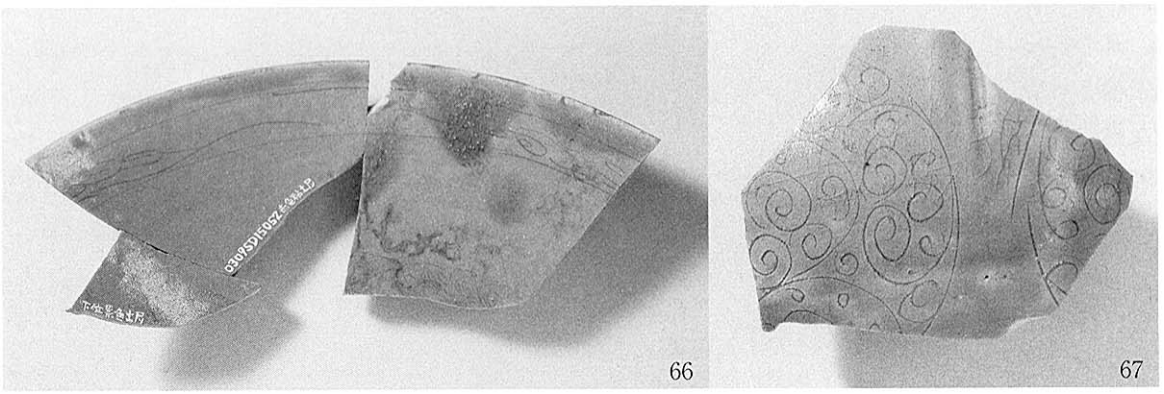


Fig.44　SD15052出土遺物実測図4（1/3）



Ph.65　SD15052出土越州窯系青磁毛彫り碗

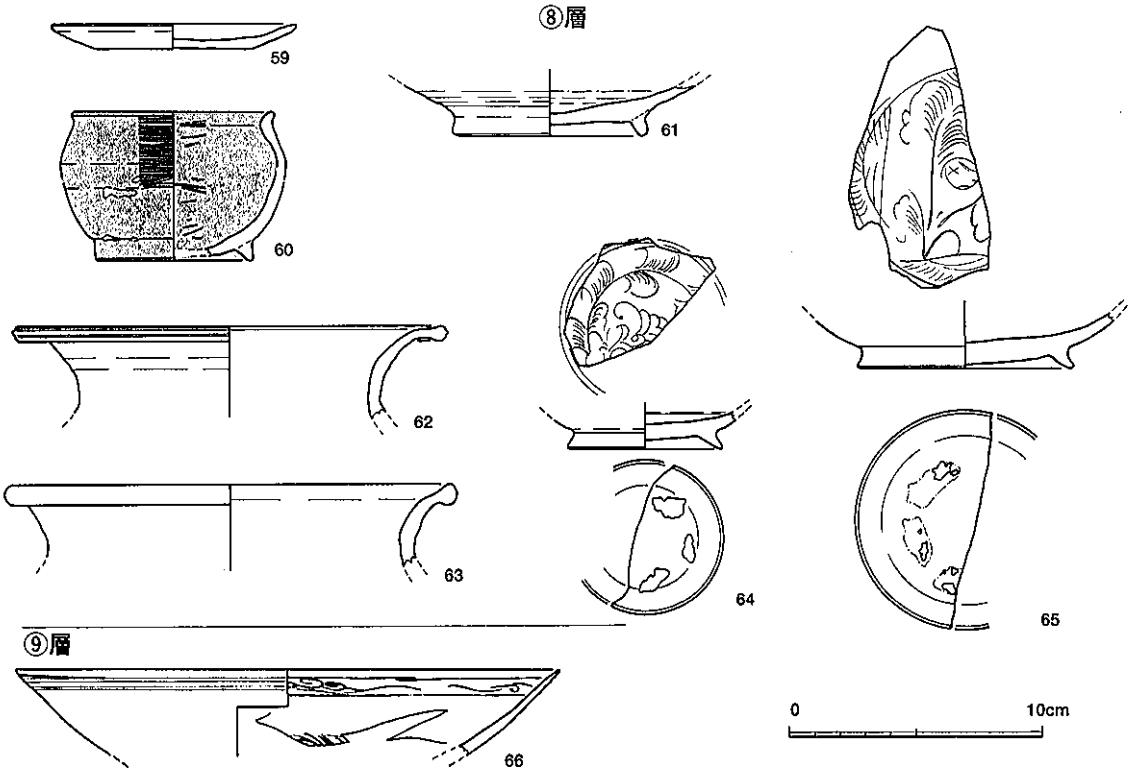


Fig.45　SD15052出土遺物実測図5（1/3）

Tab. 8　SD15052出土瓦分類

叩き分類	1		2A		2B		2C		3Aa1		3Aa2		3Aa老		3Ab		3Ac1		3Ac2	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SD15052 ③層								○	○	○	○	○			○	○	○	○		
SD15052 ④層								○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		
SD15052 ⑦層									○	○	○	○			○	○	○			
SD15052 ⑧層							○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		
SD15052 ⑨層								○	○	○	○				○	○	○			

叩き分類	3Ba1		3Ba2		3Ba3		3Bb1		3Bb2		3Bc		3Bd		3Be		4A		4Ba		4Bb	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SD15052 ③層	○		○	○																		
SD15052 ④層	○		○						○				○									
SD15052 ⑦層	○		○						○													
SD15052 ⑧層	○		○										○									
SD15052 ⑨層	○																					

叩き分類	5A		5B		5C		6A		6B		6C		6D		6E		6F		6G		6H		縄目		無文	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SD15052 ③層	○	○	○				○		○				○	○	○						○		○	○		
SD15052 ④層	○	○	○																				○	○		
SD15052 ⑦層			○				○				○			○									○	○		
SD15052 ⑧層	○	○	○				○					○	○		○						○	○	○	○		
SD15052 ⑨層													○										○	○		

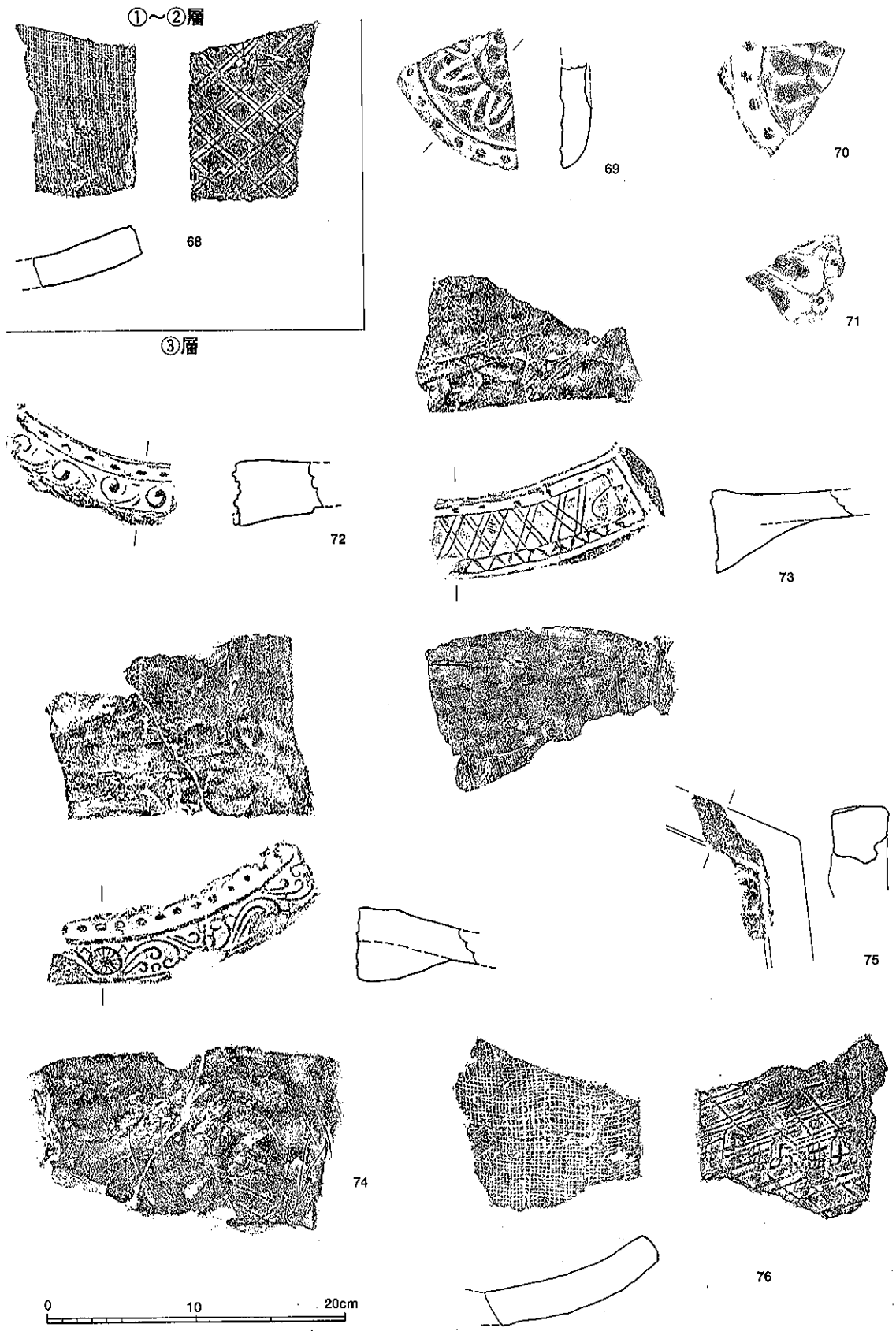


Fig.46　SD15052出土遺物実測図6（1/4）

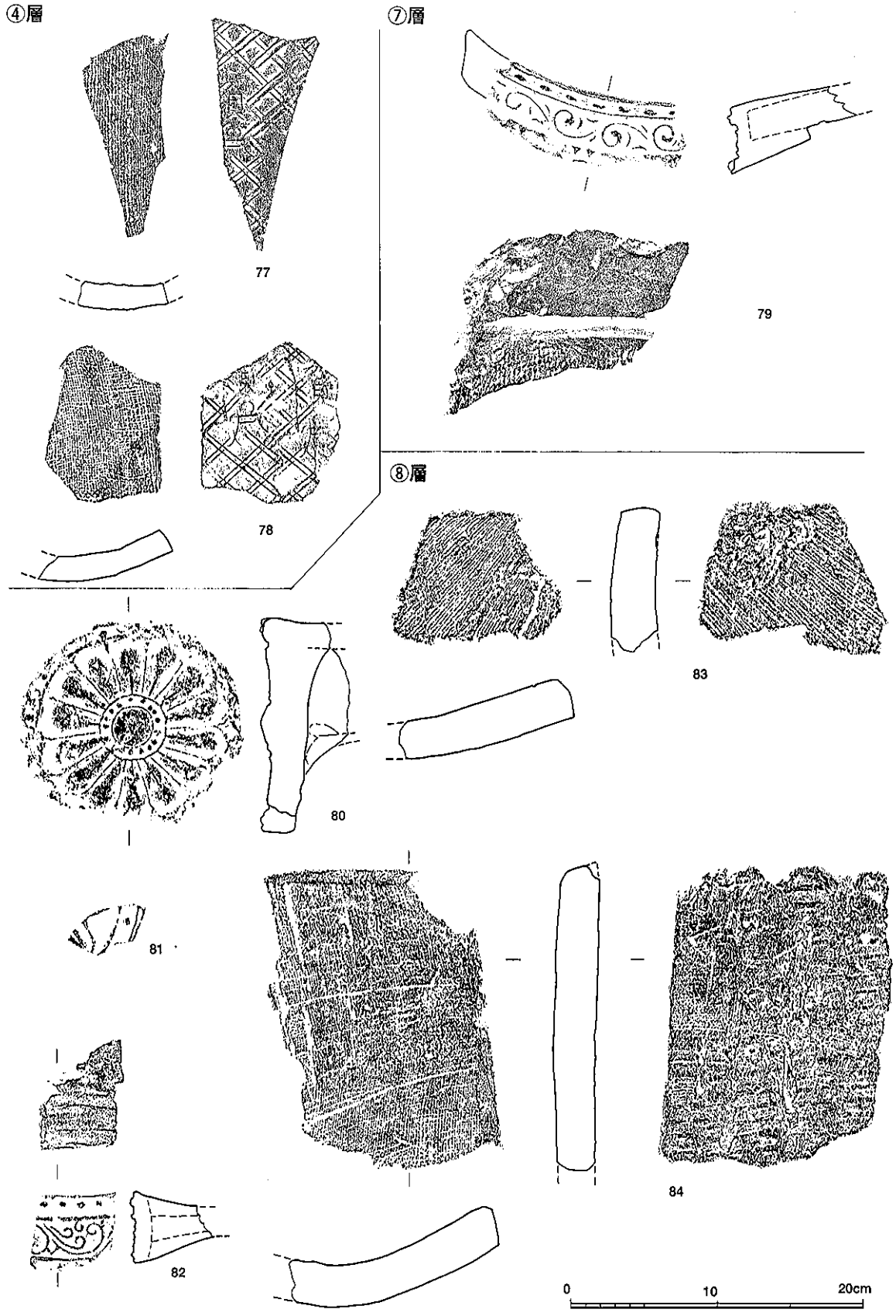


Fig.47　SD15052出土遺物実測図7（1/4）

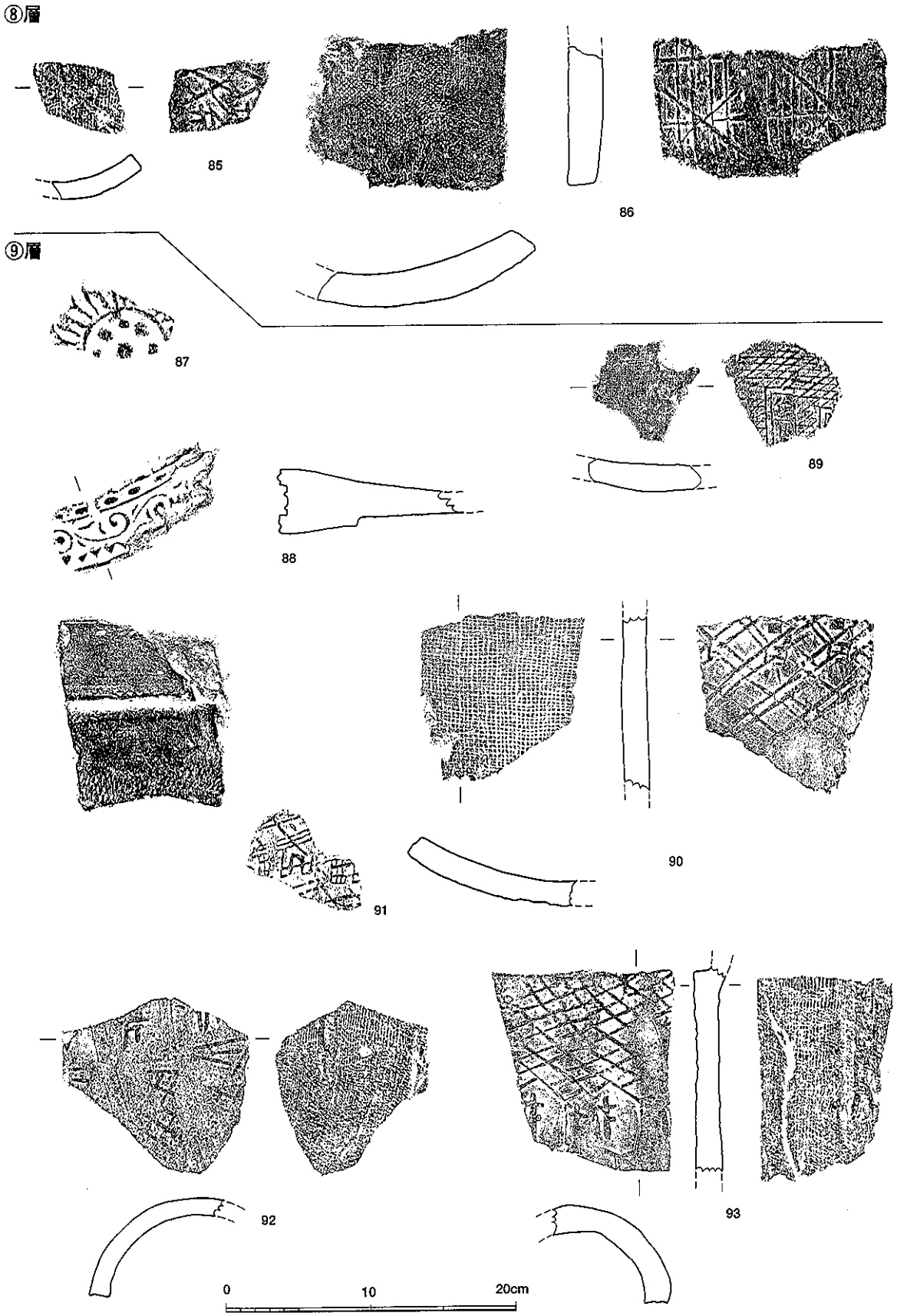


Fig.48　SD15052出土遺物実測図8（1/4）

SD15098

鴻臚南館の北を画する東西溝である。鴻臚北館と南館とを隔てる東西堀（＝谷）の肩に掘られたもので、35m分を調査した。なお、床面まで掘削して調査したのは2トレンチ東側部分であり、1トレンチと2トレンチの間は、平面確認にとどめている。

調査した範囲で、幅95～175cm、深さ75～140cmを図る。3回程度の掘り直しが想定できる。

出土遺物の一部を**Fig.50・51**に示す。**1**は、**土師器**の坏である。口径13.0cm。器壁は磨滅していて調整痕は認められない。**2・3**は、**白磁**である。2は合子の蓋で、渦状に凹線を刻む。3は平底皿で、底部は露胎となる。**4～8**は、**越州窯系青磁**である。4～7は碗で、高台内側に目跡を持つ。5の外面には、片切り彫りと毛彫りで花文をあしらう。6は全面施釉で、見込みには丸く目跡が廻る。8は、香炉である。身の外底部に目跡がめぐる。9は、**陶器**の卸皿である。薄い茶褐色のきめ細かい胎土にベージュ色の化粧土を掛け、口縁部のみ緑褐釉を漬け掛けする。内面には7本単位の櫛状工具で、卸目を刻む。外面の露胎部分には墨書が見られるが、判読できない。**10～13**は、**瓦**である。10は、「賀茂」銘の平瓦である。11は、陰文の格子叩きで、Fig.69－15のような「平井」銘の丸瓦と思われる。12は、「賀」の左字であろうか。13は、丸瓦の背の脇側に文字風の線刻がある。判読不能。

その他の平瓦・丸瓦については、分類表をTab.9に示す。

11世紀前半の溝である。

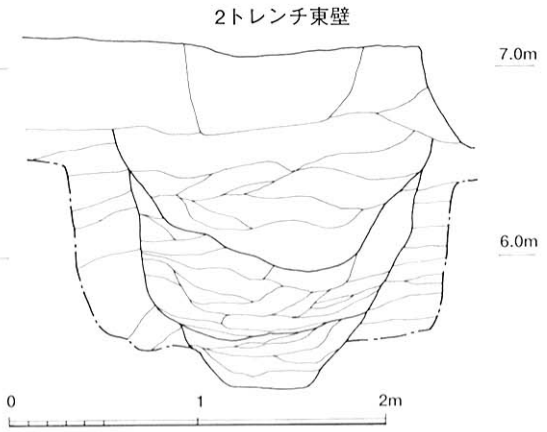


Fig.49　SD15098土層断面図（1/40）



Ph.66　SD15098東端（東より）

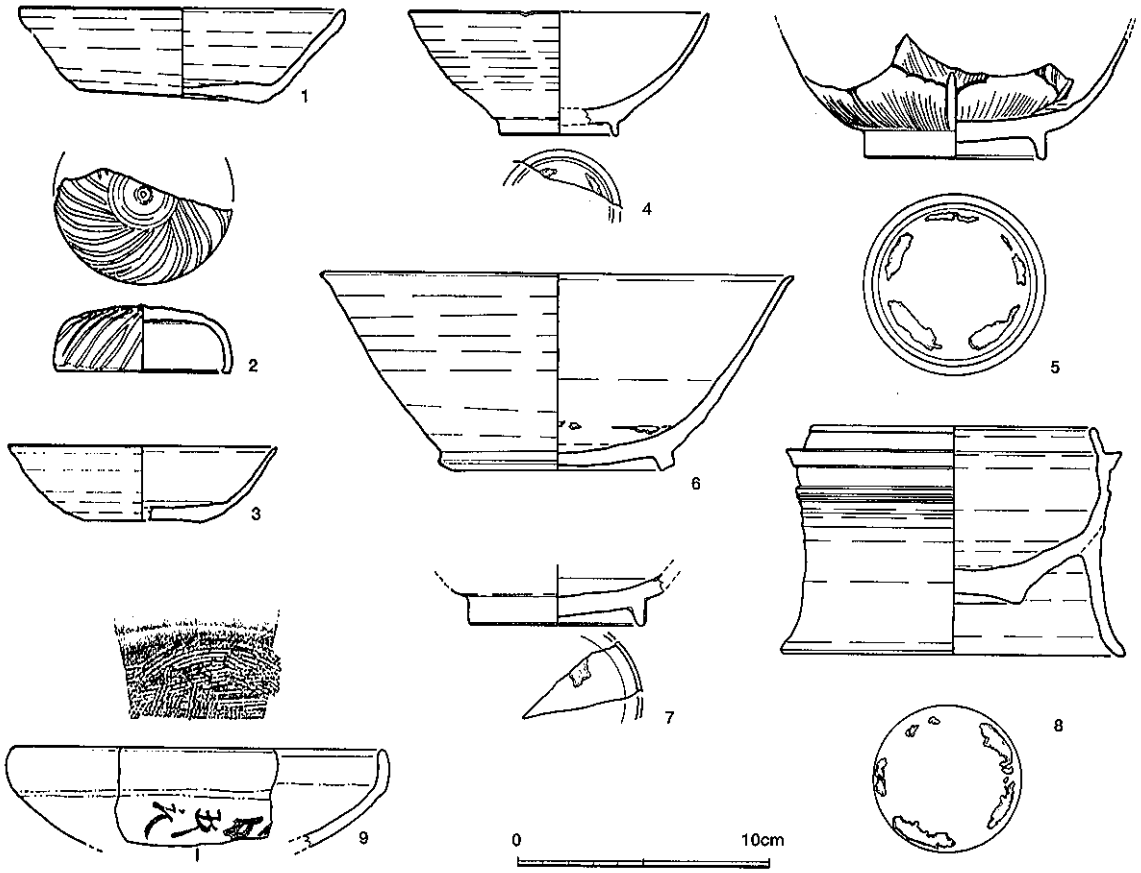


Fig.50　SD15098出土遺物実測図1（1/3）

Tab. 9　SD15098出土瓦分類

叩き分類	1		2A		2B		2C		3Aa1		3Aa2		3Aa老		3Ab		3Ac1		3Ac2	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SD15098					○		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		
SD15098中位									○	○	○				○					
SD15098下部								○	○	○	○				○		○			

叩き分類	3Ba1		3Ba2		3Ba3		3Bb1		3Bb2		3Bc		3Bd		3Be		4A		4Ba		4Bb	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SD15098	○		○	○	○		○		○					○	○							
SD15098中位																						
SD15098下部	○																					

叩き分類	5A		5B		5C		6A		6B		6C		6D		6E		6F		6G		6H		縄目		無文	
	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸	平	丸
SD15098	○	○	○		○						○	○	○			○					○		○	○		
SD15098中位					○																		○	○		
SD15098下部	○		○																				○	○		

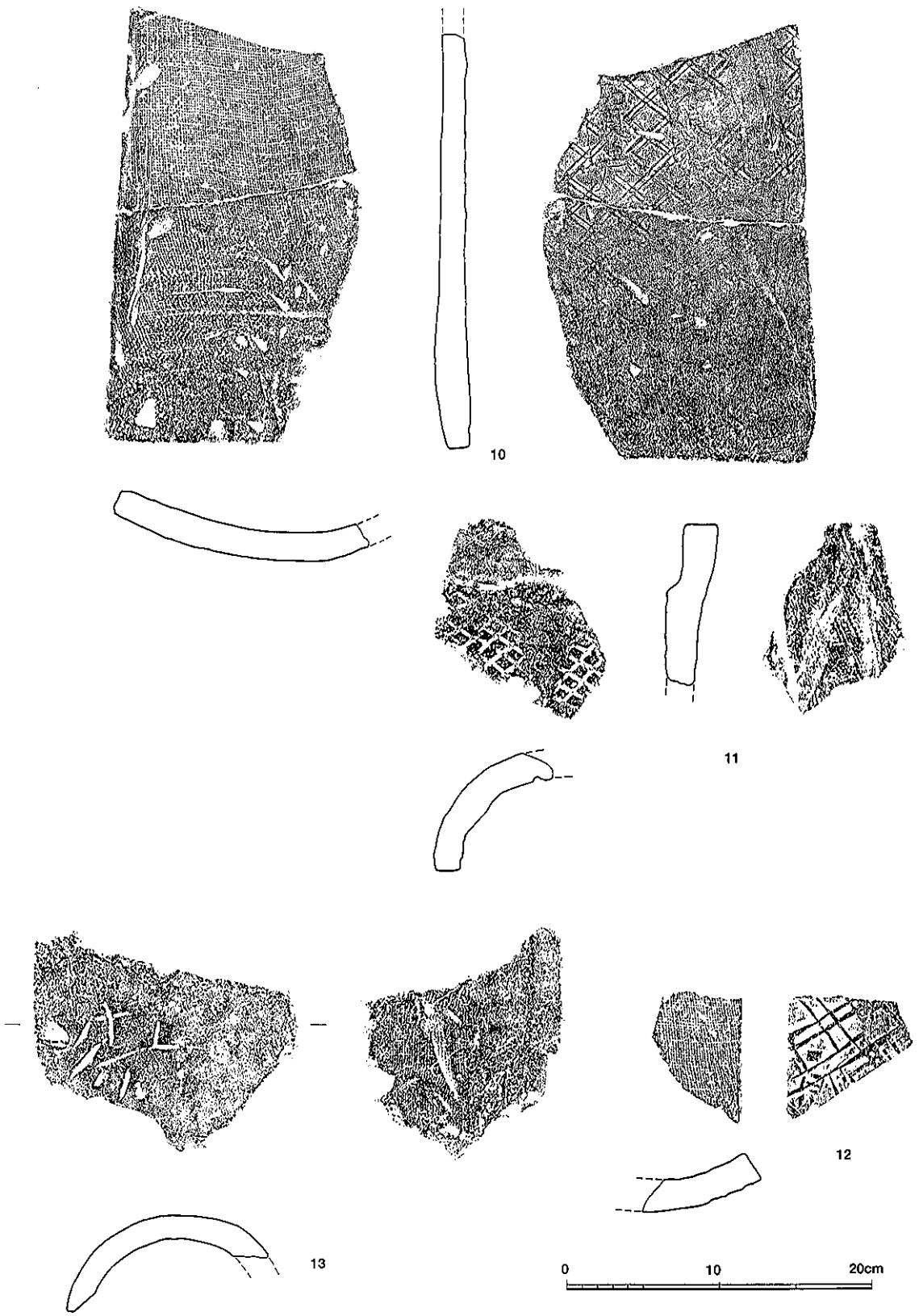


Fig.51　SD15098出土遺物実測図2（1/4）

SK15185

南館のSD15052とSD15098による区画の外側から検出した土坑である。検出段階では、長楕円形の土坑を想定したが、精査の結果、2基の土坑の重複であった。遺物は、南側の土坑から陶器鉢と土師器皿が出土したのみである。出土状況から、意図的に埋置したものと考えられる。

出土遺物を**Fig.53**に示す。**1**は、**土師器**の皿である。口径10.0cmで、底部はへら切りする。**2**は、**陶器**の鉢である。砂粒の多い灰色の胎土に白化粧土を粗くかけ、灰緑色の釉を施す。

11世紀前半の土坑である。



Ph.67　SK15185遺物出土状況（東より）

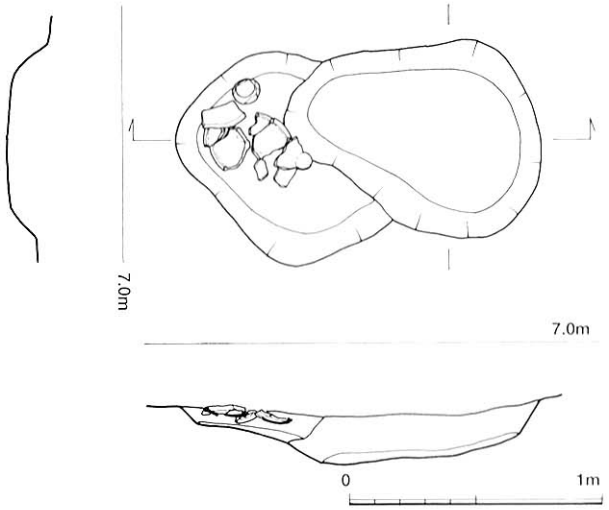


Fig.52　SK15185実測図（1/30）

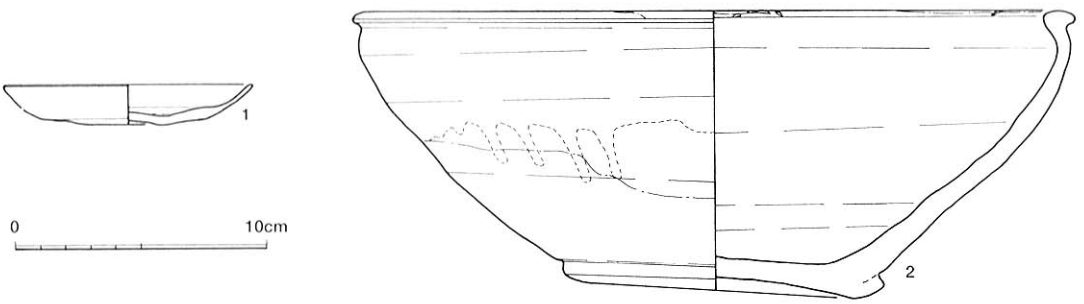
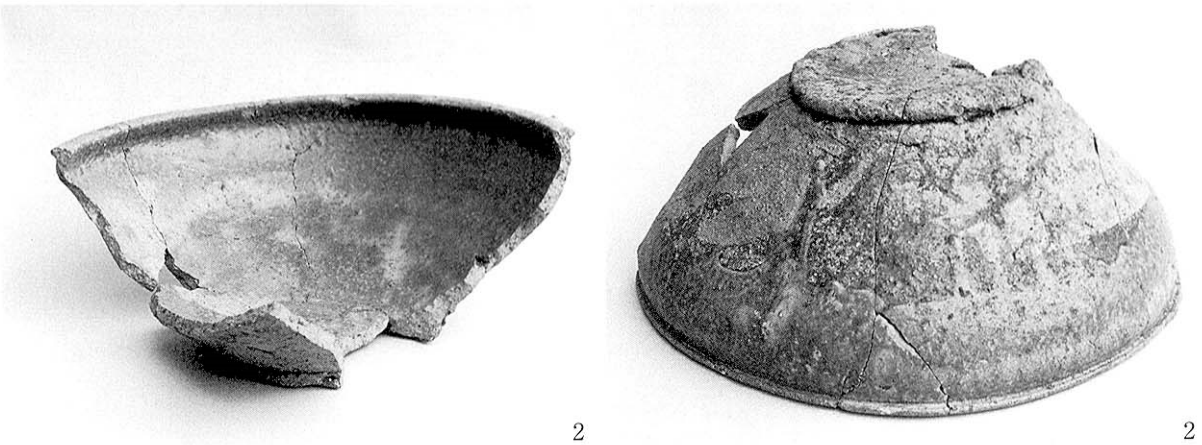


Fig.53　SK15185出土遺物実測図（1/3）



2　　2

Ph.68　SK15185出土遺物

（4）０３－４区

平成12年度調査で、便所遺構の可能性を想定しながら時間の制約から調査を行わず、保留していた2基の遺構について、精査を実施した。当該遺構は、北館第Ⅱ期布掘り掘立柱列SA1104の南西角のすぐ西側で、南北に並ぶ土坑SK1124とSK1125である。

平成15年度調査では、当該遺構を含み、第Ⅱ期布掘り掘立柱列の一部が確認できる位置に調査区を設定し、遺構と布掘り掘立柱列との関係が検証できる形での調査を実施した。調査区の面積は、115㎡である。

遺構検出面は、鴻臚館時代の盛り土整地面で、調査区を斜めに横切って、地山の粘質土が広がる。便所遺構は盛り土整地の中に掘り込まれており、壁面が崩落する危険が想定されたため、両便所遺構を縦断する軸線を設け、それから東側に幅2mの部分を深さ1m強まで掘り下げ、二段掘りで調査を実施した。

便所遺構は、第Ⅱ期布掘り掘立柱列の西辺から中心距離で3.5m離れて、これと並行していた。

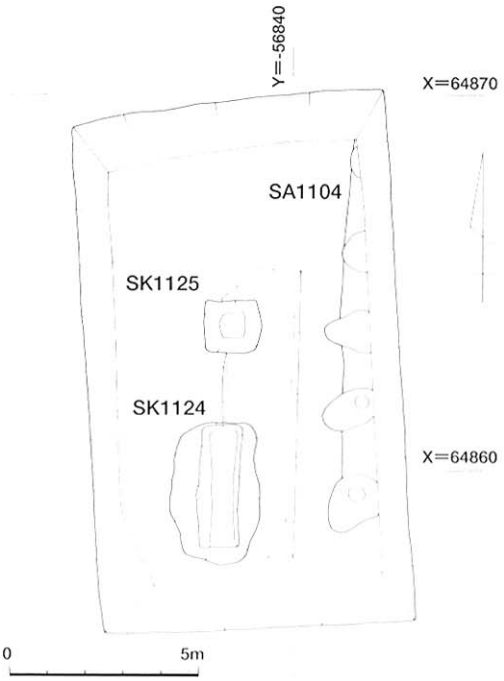


Fig.54　03-4区遺構全体図（1/200）



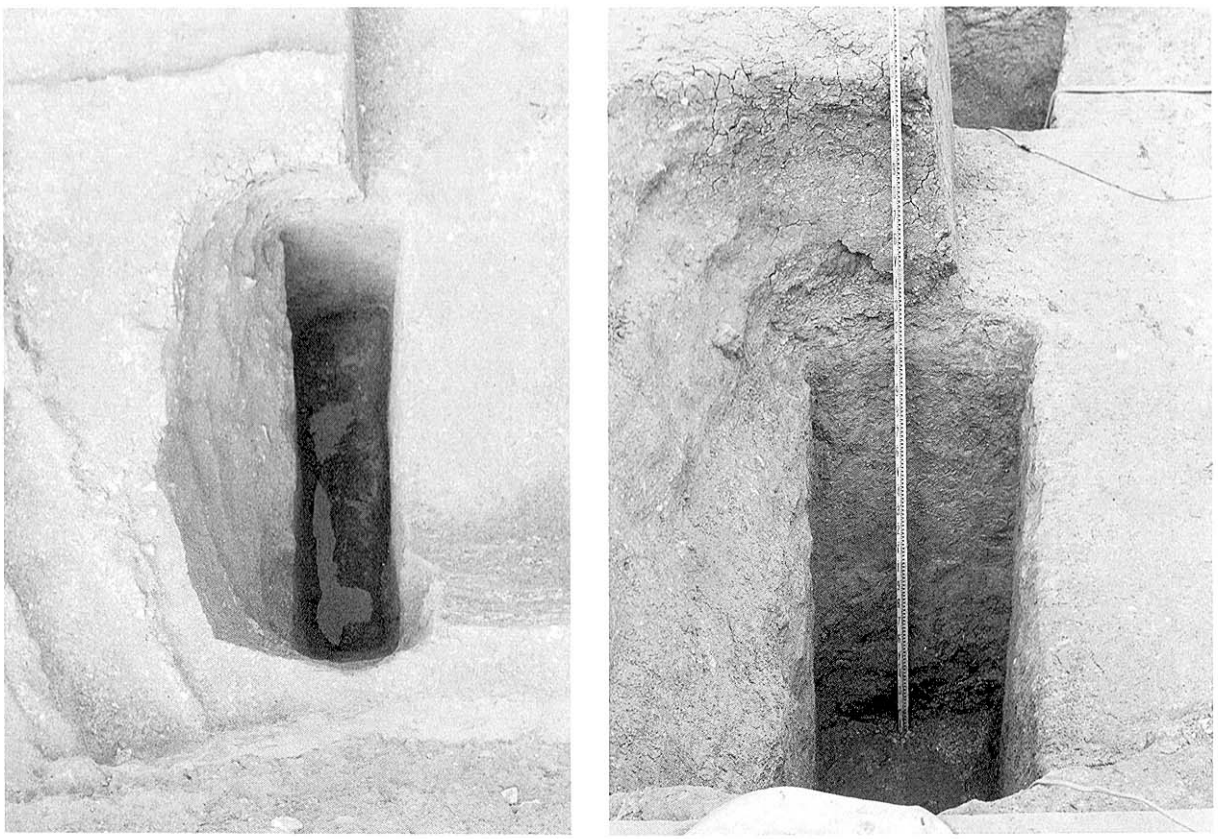
Ph.69　03－4区遠景（北西より）

SK1124

長辺330cm、短辺100cmの長方形を呈し、遺構検出面からの深さは340cmをはかる。土坑の上半分は、早い段階で崩落し、漏斗状を呈している。

土層図の9層に集中して籌木等の木片が出土しており、8層以上は人為的に埋められた堆積土と思われる。9層は土壌の締まりもなく、排泄によって堆積した層であろう。

出土遺物をFig.56～61に示す。**1～9**は、**須恵器**である。**1～6**は蓋で、**1**の内面には「十」の墨書が見られる。**7・8**は高台坏、**9**は横瓶の口縁部である。**2・3・7・8**は9層、**6**は10層から出土した。**10～13**は**土師器**である。**10**は蓋で、調整技法等は須恵器と共通する。6層出土。**11**は、高台坏である。内外面は、横方向に密なへら磨きを施す。**12**は、脚付皿である。皿の内外面は密にへら磨きされる。脚部は横撫で調整である。脚部と皿部は直接接合できない。**13**は、高台付き皿である。内面には意匠的な暗文を施し、外面は横へら磨きする。都城系土器であるが、胎土は他の土師器と共通しており、在地で模倣されたものである。**11・13**は、10層から出土した。**14～46・Ph.71－61～70**は、**木製品**である。**14**は、櫛である。歯はすべて欠損している。遺存状態は悪いが、黒漆を塗ったものと思われる。**15**は、木簡である。板状の板目材の断片で、少なくとも二行の文字が書かれている。遺存した字画と、第6次調査SK57出土木簡から類推して一行目は竹冠、二行目は豊前国京都郡の「京」と思われる。竹冠を筑前国の筑とすれば、この木簡には少なくとも筑前国内と豊前国京都郡の二ヶ所の地名が併記されていたことになる。**16**は、軸状の木製品で、蒲鉾型の断面を持つ。両端は直裁される。**17**は、折敷底板の断片であろう。**18～46**は、荷札である。赤外線をかけたが、墨書は確認できなかった。**61～70**は棒状を呈し、一端が焼け焦げる。火を灯火器に移す際に用いた火付け木であろう。**14・61～65**は9層、**15～46・66～70**は10層出土である。**47～60**は**瓦**である。**47～54**は埋土上部、**55・56**は埋土



Ph.70　SK1124（南より）

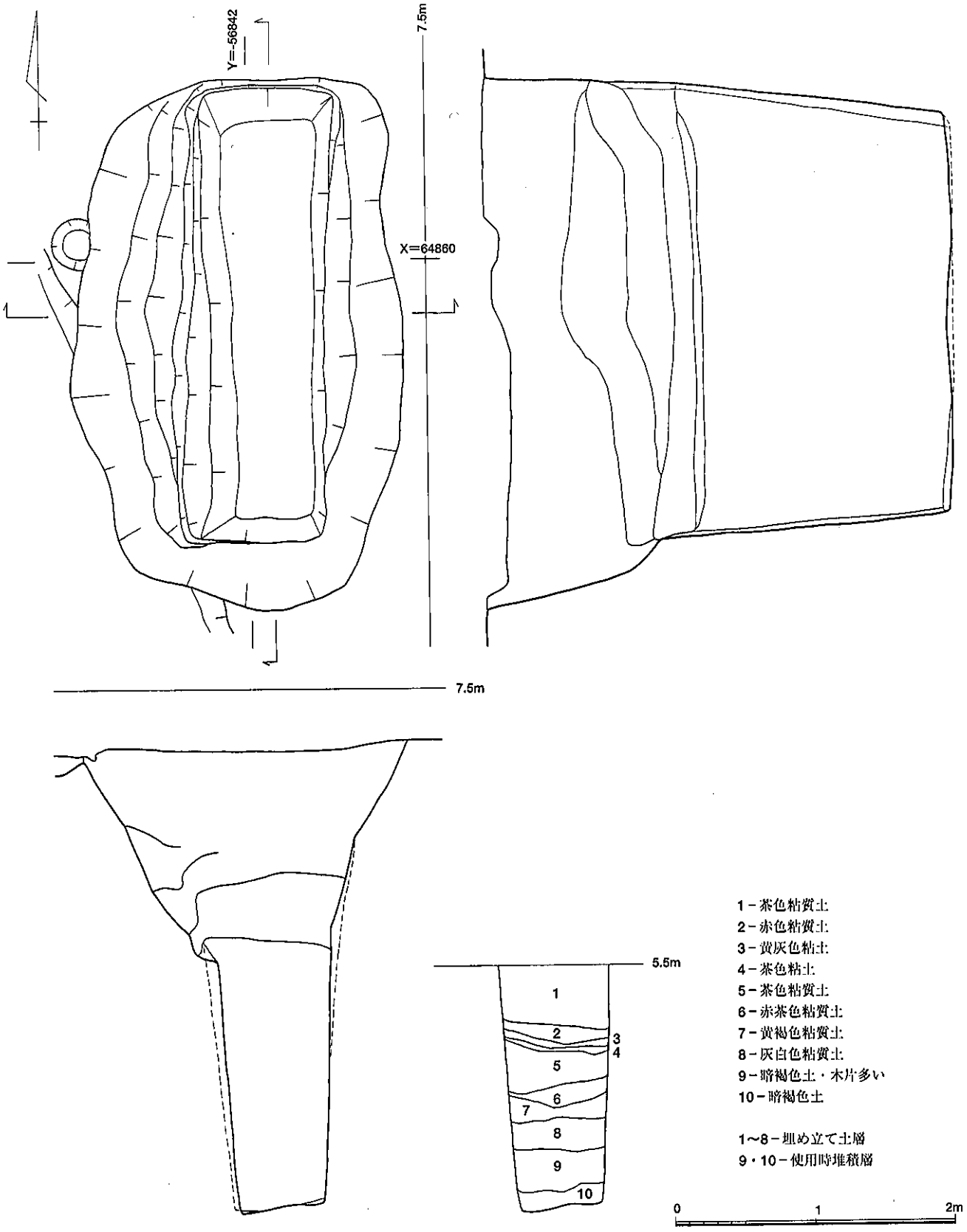


Fig.55　SK1124実測図（1/40）

中位、57・58・60は第9層、59は第10層出土である。47は、老司式軒平瓦の破片である。59は、縦方向にのびる平行叩きをもつ平瓦片である。鴻臚館式軒平瓦にはしばしば縦方向の平行叩きが見られる。60は、鴻臚館式軒丸瓦である。筒部の上面は縦方向に削り、叩き目は残っていない。その他の瓦は、すべて縄目叩きを持つ。この他、第10層からパン箱2箱分の籾木が出土した。

出土した須恵器・土師器は、8世紀前半～中頃の時期を示している。

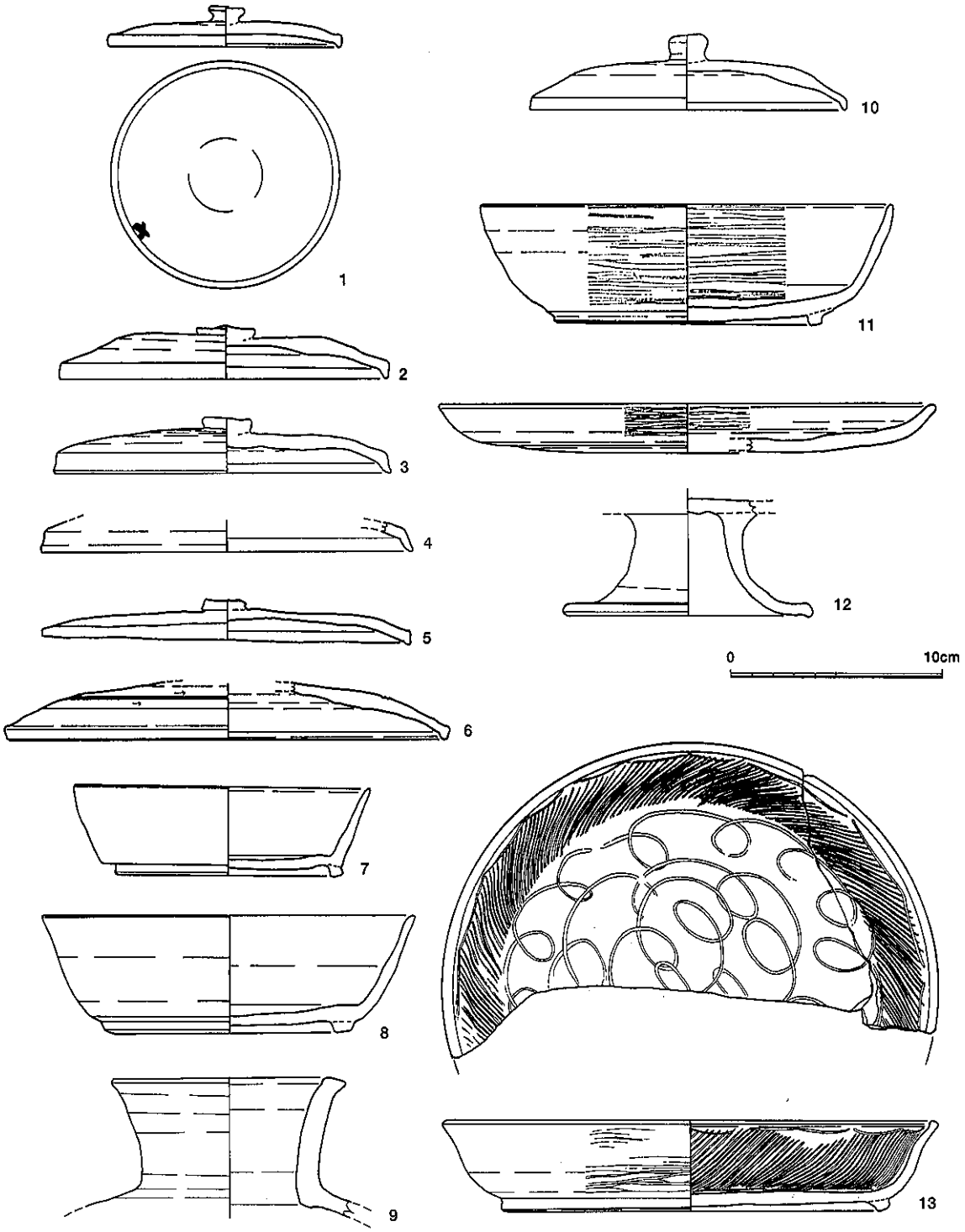
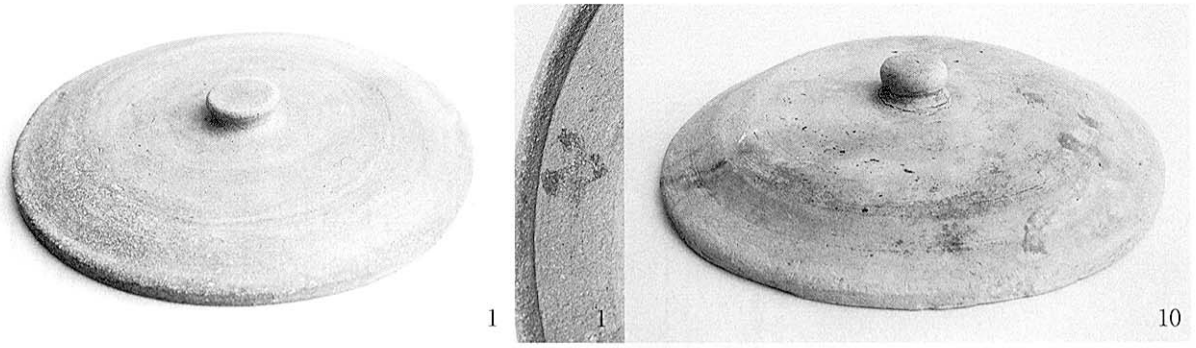
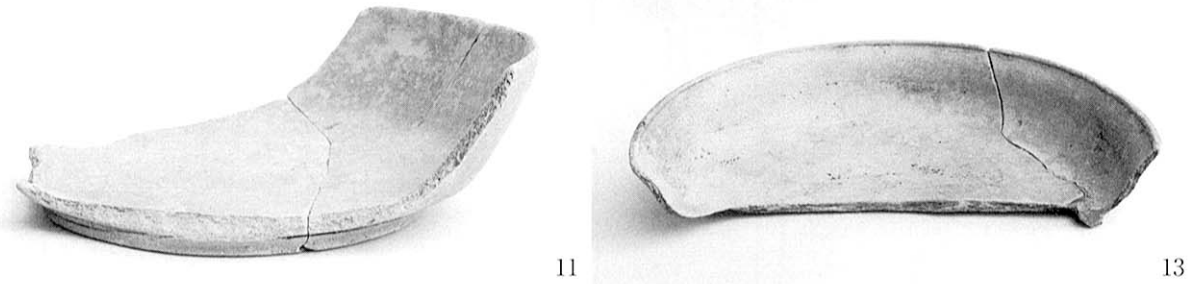
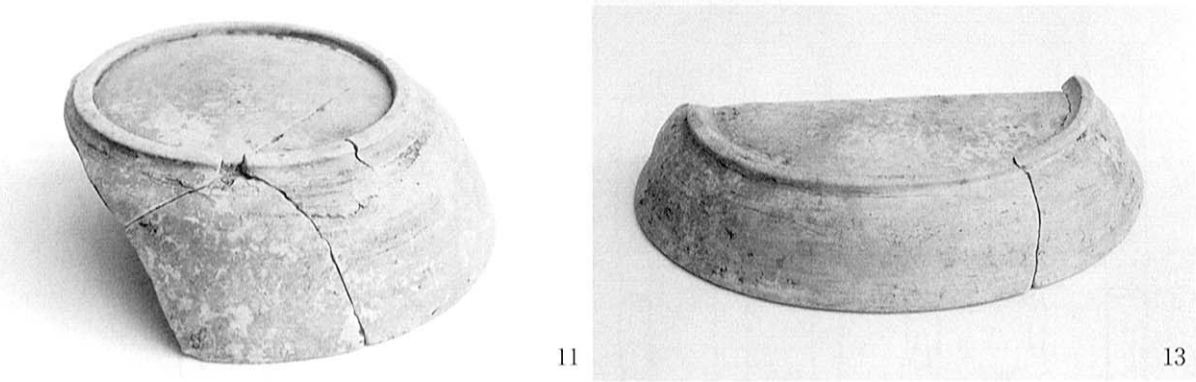
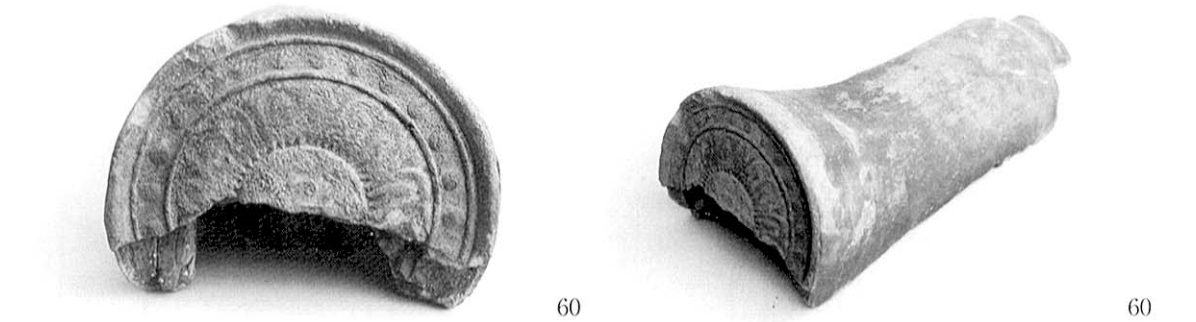


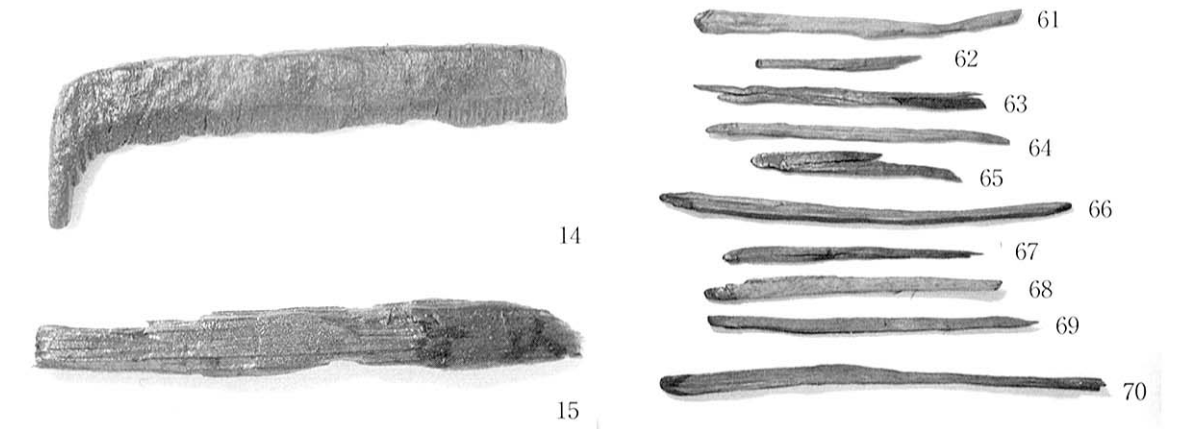
Fig.56　SK1124出土遺物実測図1（1/3）











Ph.71　SK1124出土遺物

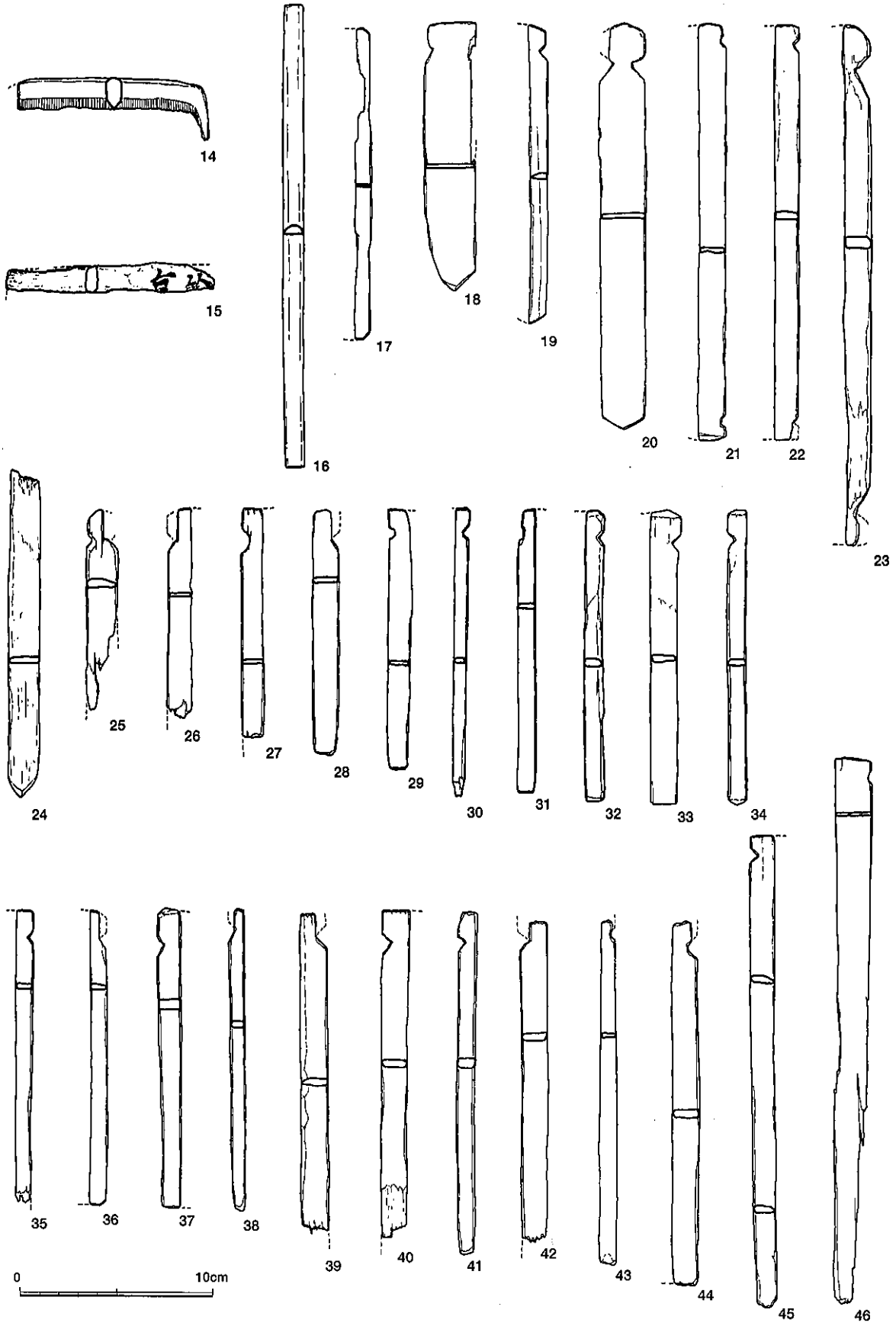


Fig.57　SK1124出土遺物実測図2（1/3）

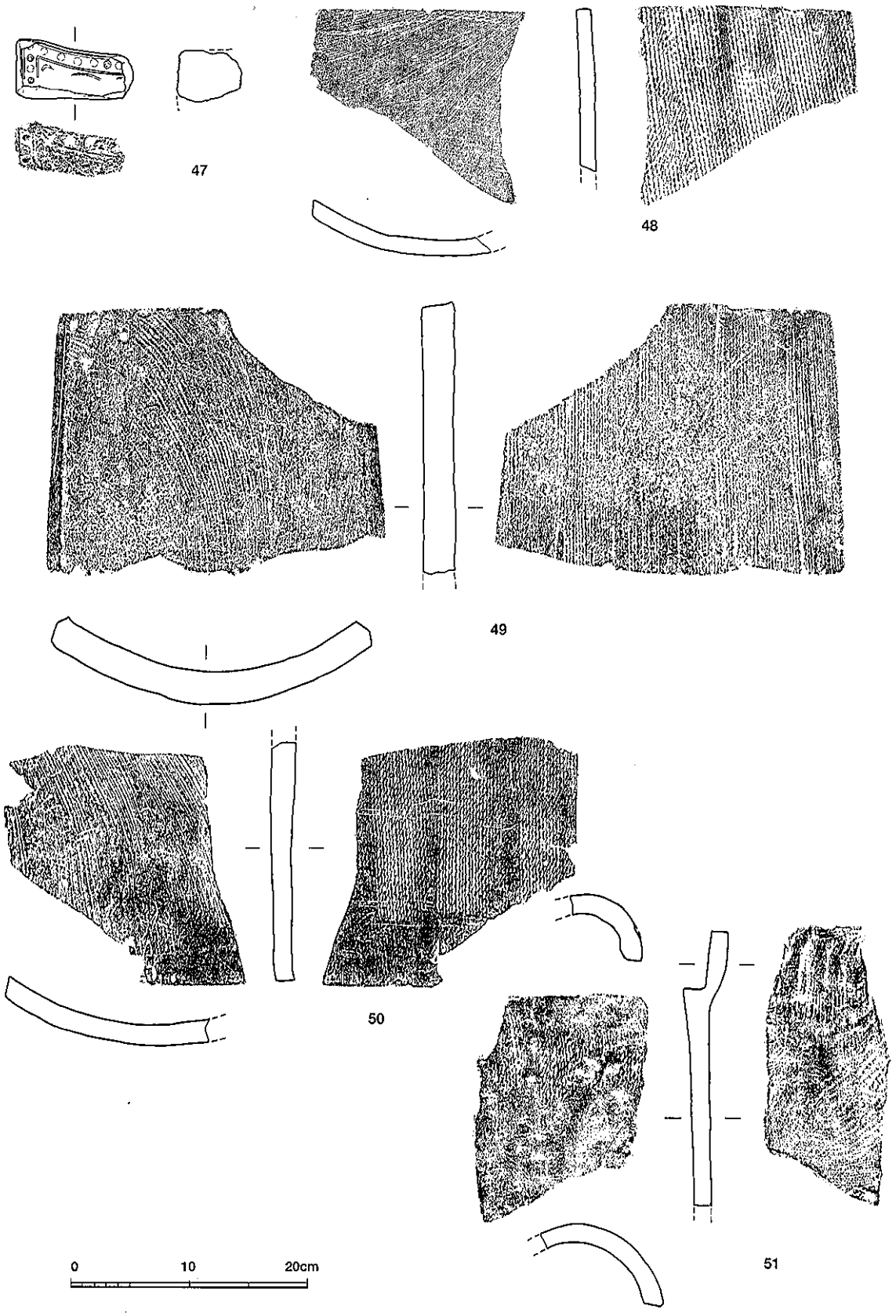


Fig.58　SK1124出土遺物実測図3（1/5）

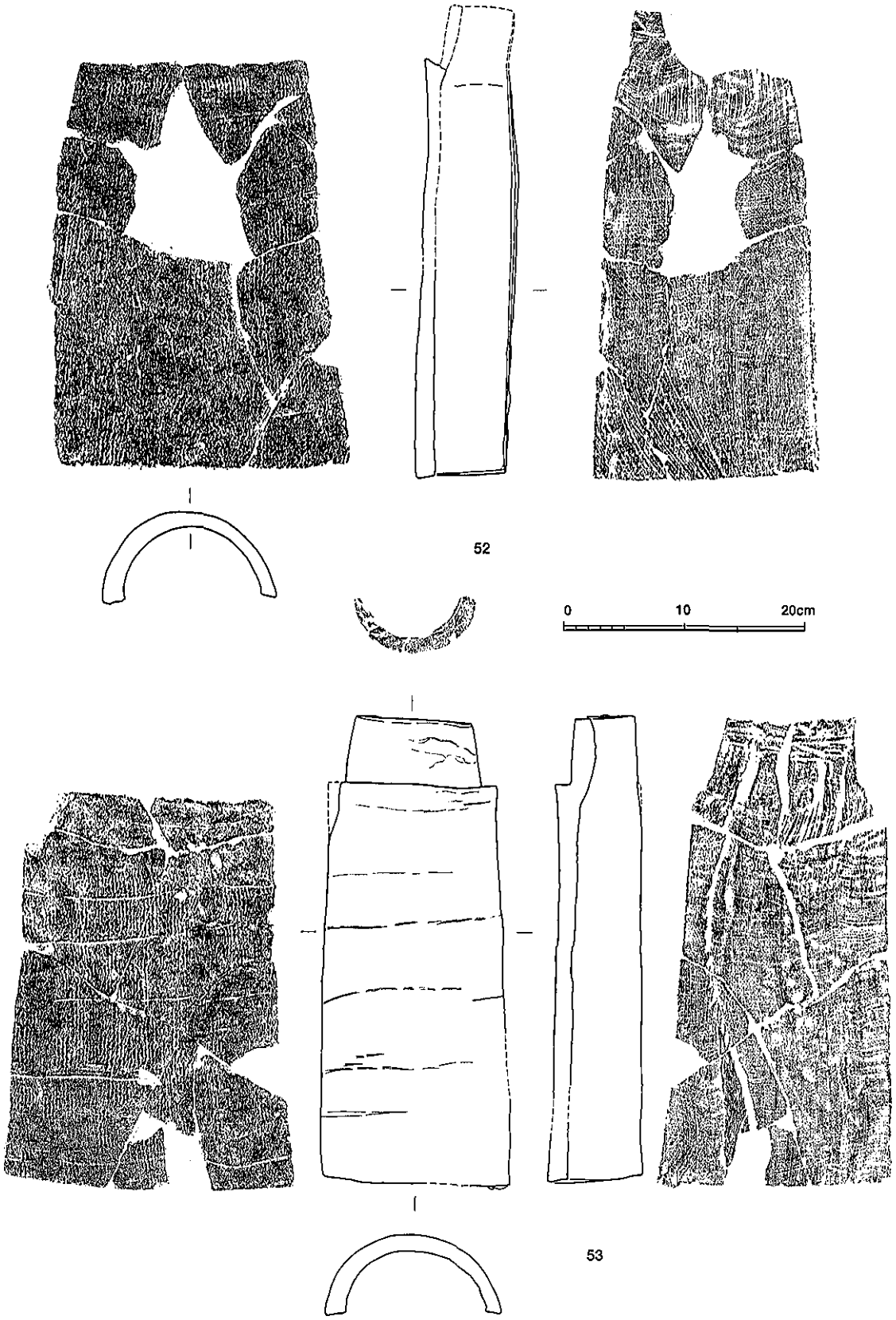


Fig.59　SK1124出土遺物実測図4（1/5）

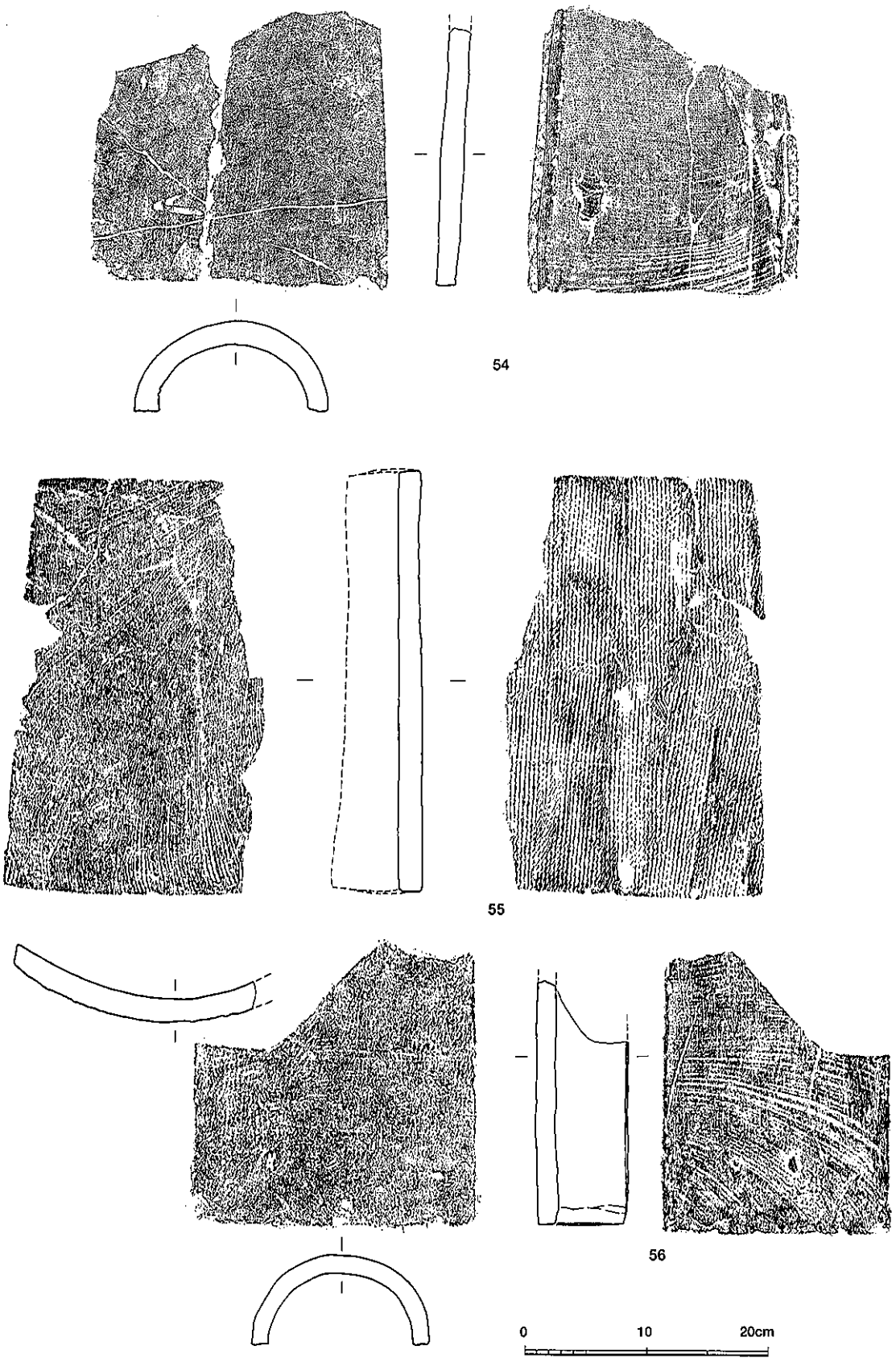


Fig.60　SK1124出土遺物実測図5（1/4）

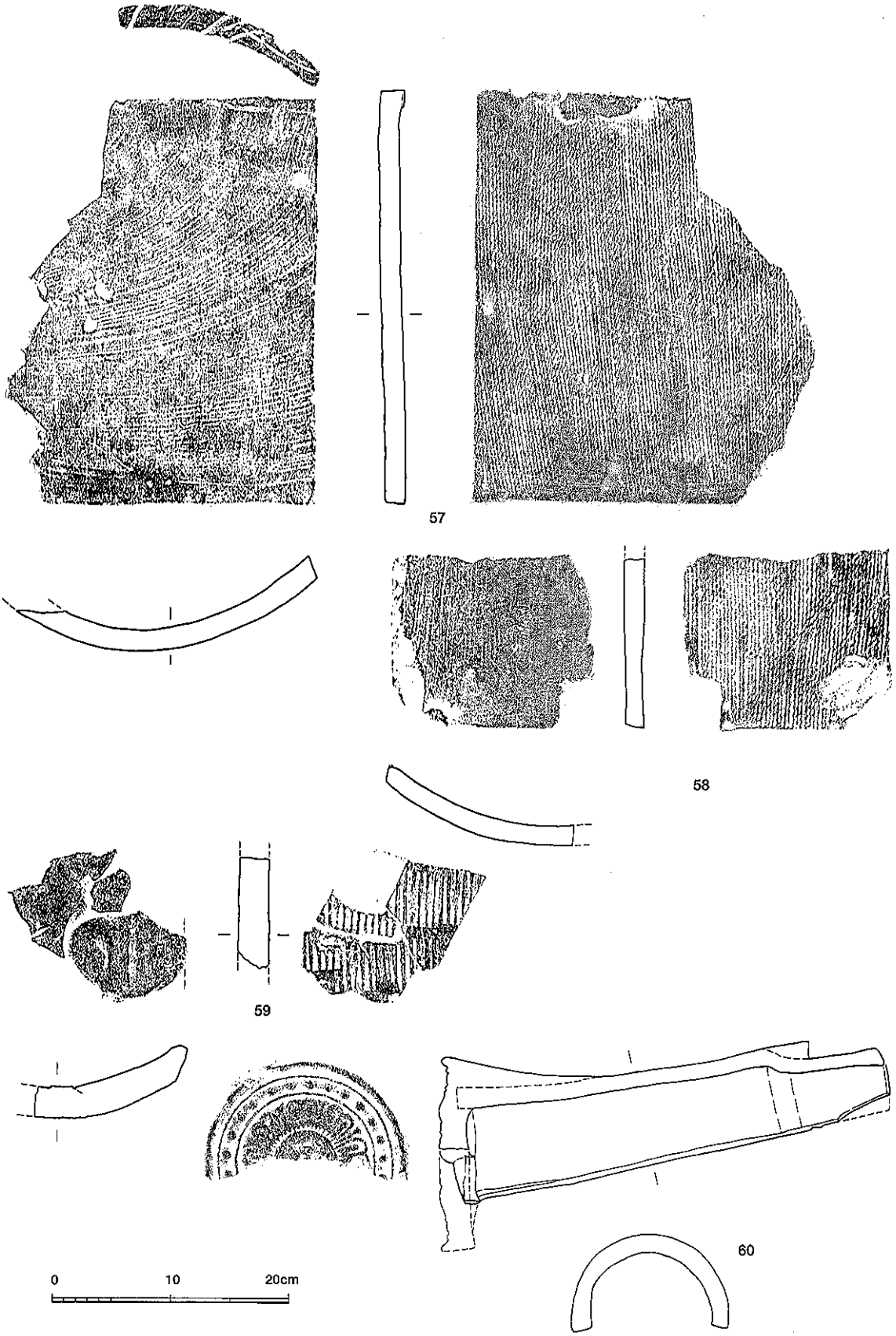


Fig.61　SK1124出土遺物実測図6（1/5）

SK1125

一辺120cmの正方形を呈し、遺構検出面からの深さは350cmをはかる。最上部が三方向に広がるが、後世の掘削によるものと思われる。土層図の5層が排泄物層にあたり、籌木等の木製品が集中して出土している。4層以上は、便所を廃して、埋め戻した際の堆積土である。

出土遺物をFig.63～67に示す。1～11は、須恵器である。1～7は坏蓋、8～11は高台坏である。8の外底部には、墨書が残る。判読は困難であるが、関東学院大学田中史生氏によれば「伴」の可能性があると言う。また、内底部には墨が付着している。**12は、土師器**の皿である。底部は回転ヘラ削り、

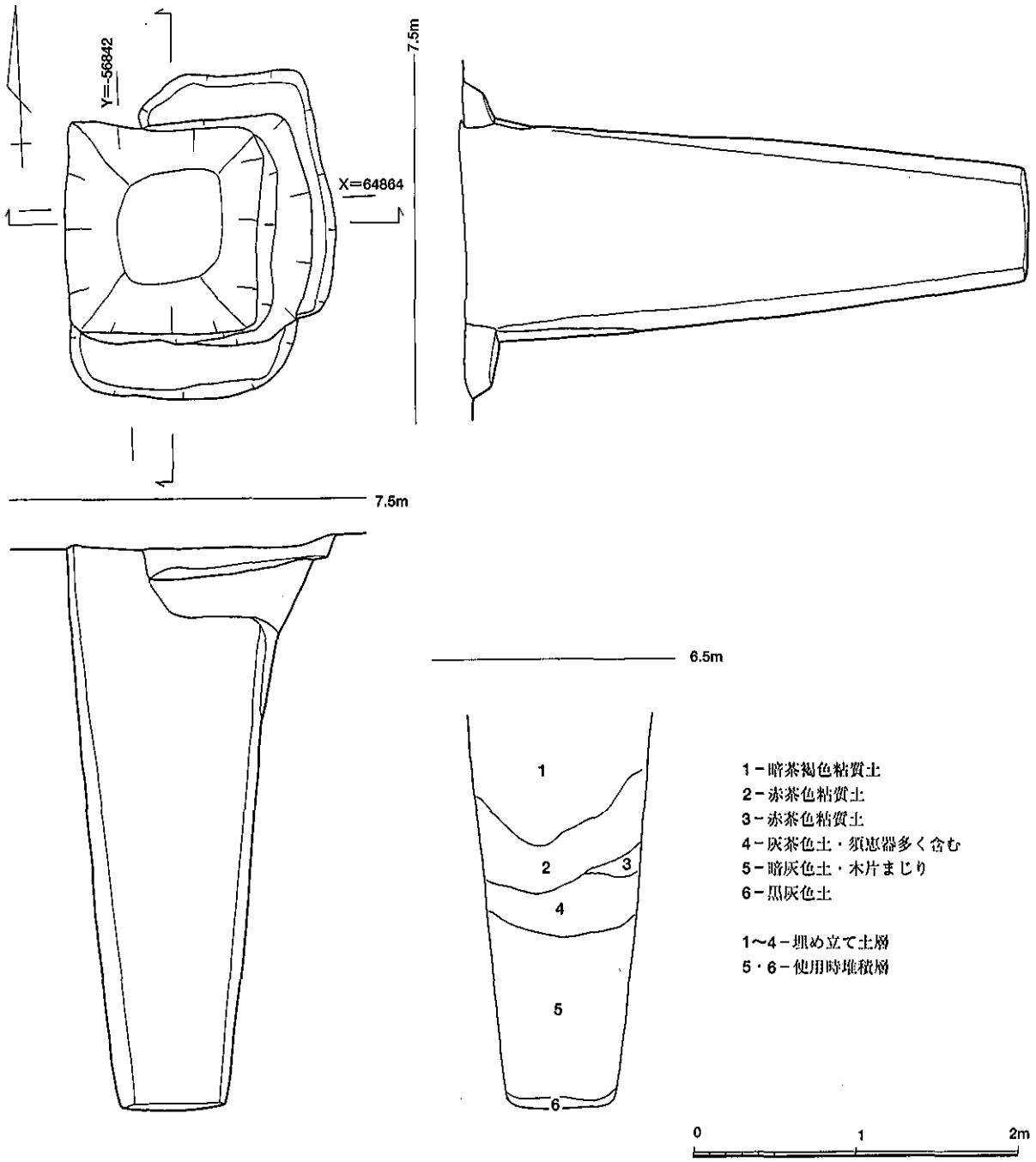


Fig.62　SK1125実測図（1/40）

体部は器壁が剥離し調整不明、おそらく横位のへら磨きであろう。13・Ph.73－32～37は、**木製品**である。31は黒漆をかけた棒状製品で、両端を欠く。笄と思われる。32～36は籌木、37は火付け木である。籌木は、パン箱1箱弱程度出土している。14～31は**瓦**である。14～19は埋土上部、20・21は埋土中位、22～31は第5層出土から出土した。14・26は、老司式に伴う丸瓦片である。20は、縦方向の平行叩きをおこなう平瓦である。23は道具瓦である。　全形は知りがたい。24は、老司式軒平瓦の外縁部であろう。25は、鴻臚館式軒丸瓦である。30は熨斗瓦で、両側面と下端の小口が遺存している。幅は11.2cm。平瓦・丸瓦のほとんどは、縄目叩きを持つ

須恵器・土師器等は8世紀前半に属する。



Ph.72　SK1125（南より）

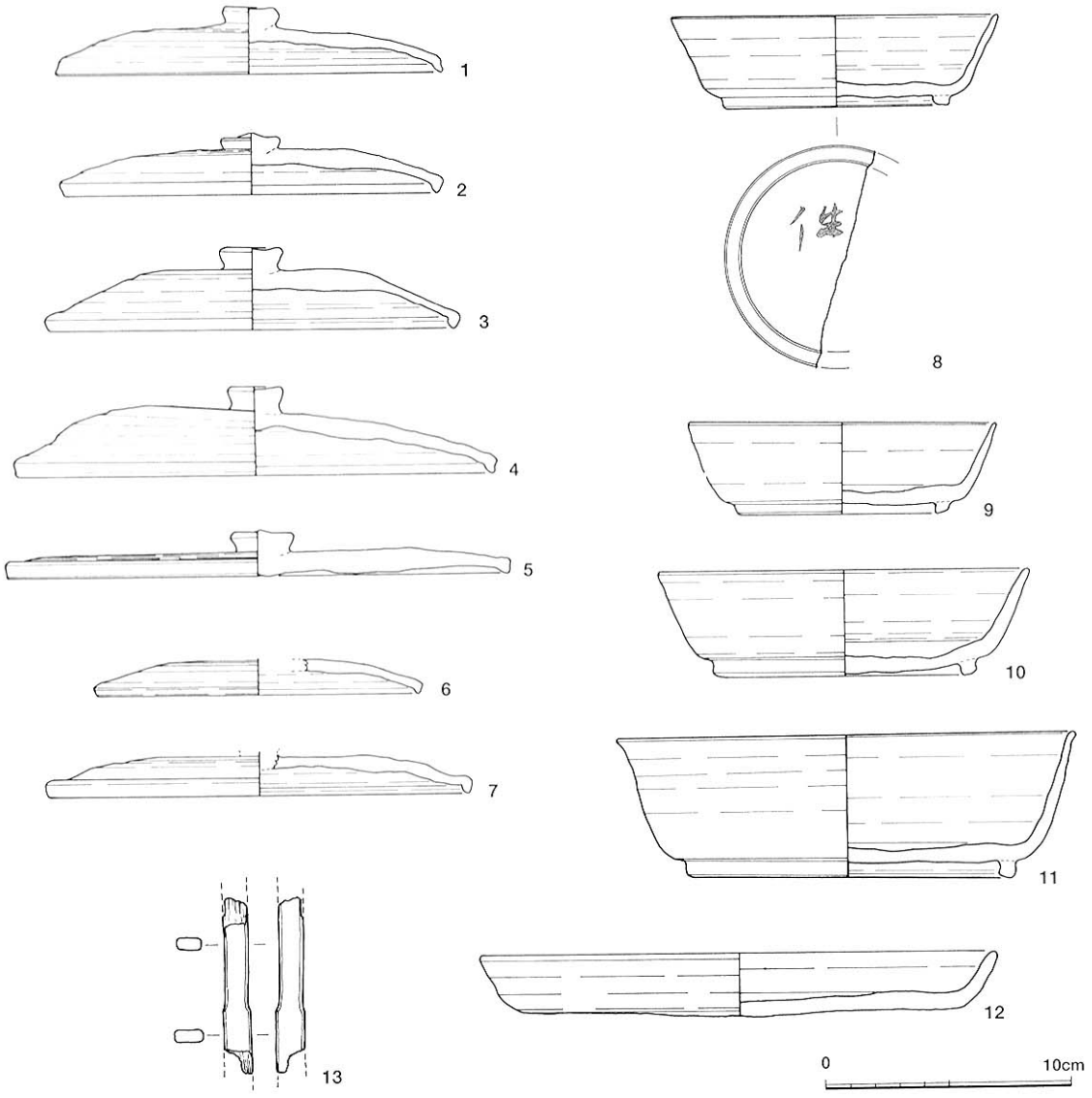


Fig.63　SK1125出土遺物実測図1（1/3）



2



8



11



8



11



8



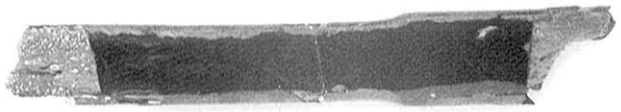
23



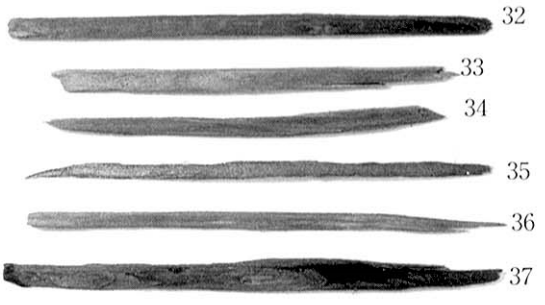
23



25



13



32

33

34

35

36

37

Ph.73　SK1125出土遺物

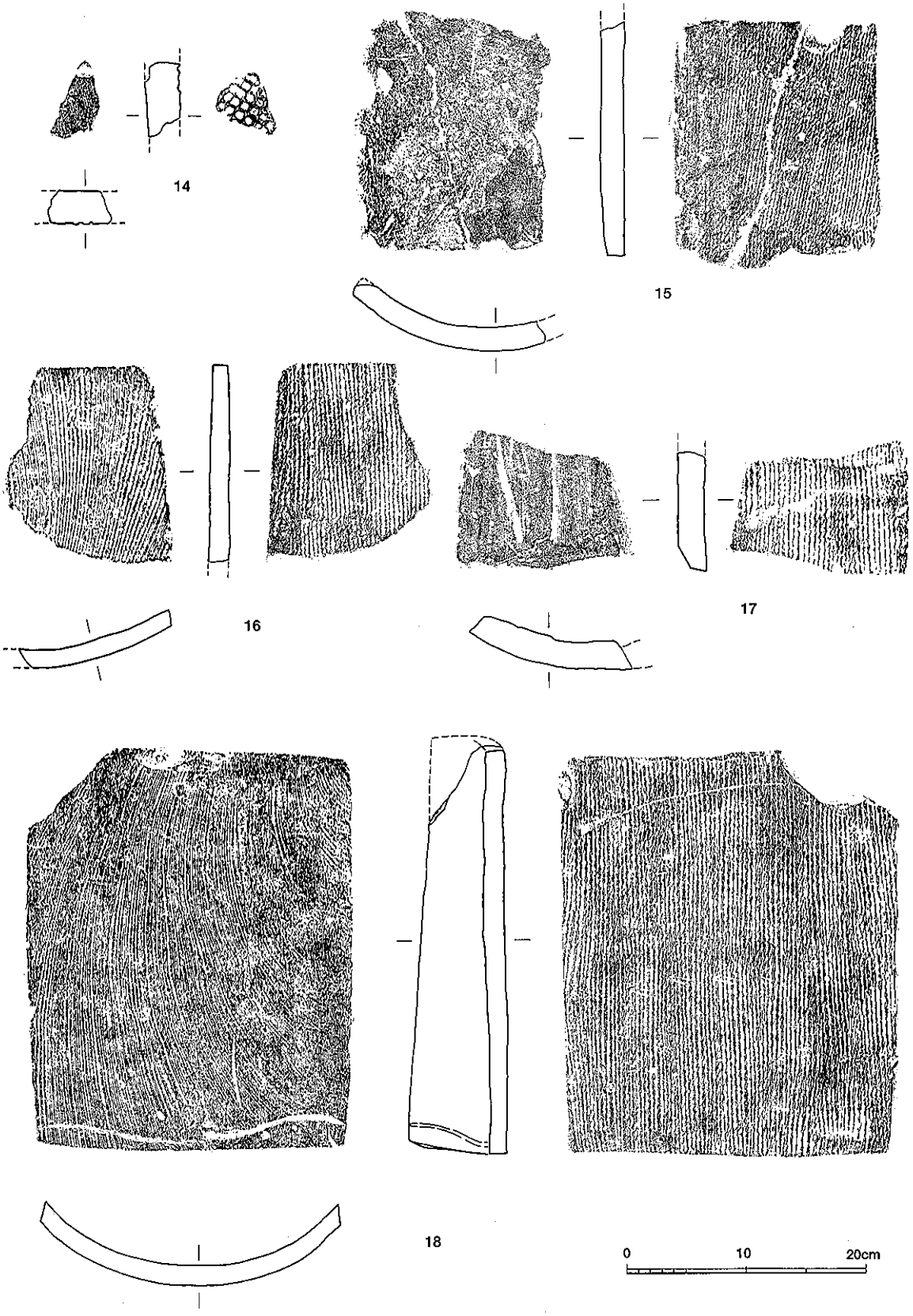


Fig.64　SK1125出土遺物実測図2（1/5）

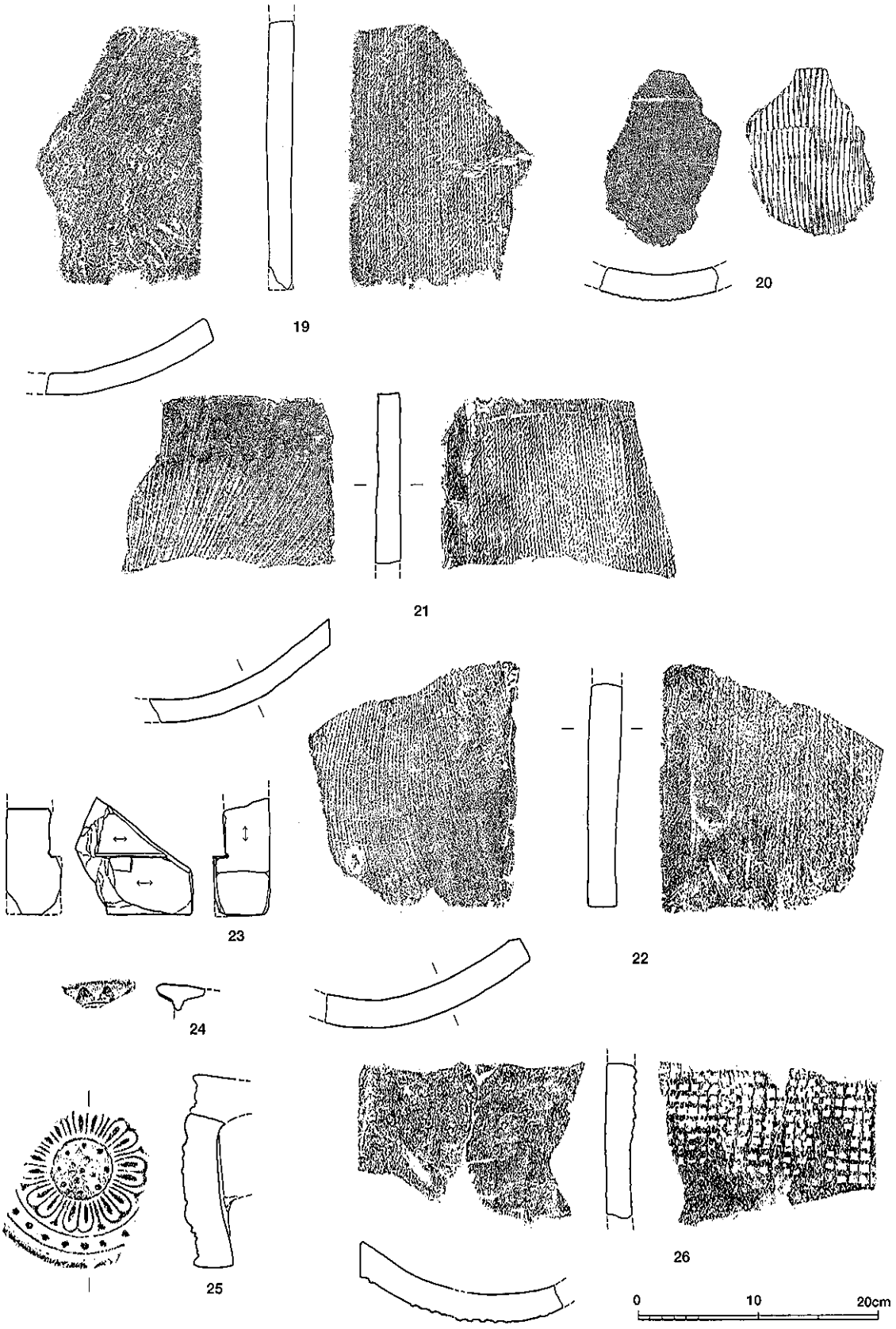


Fig.65　SK1125出土遺物実測図3（1/5）

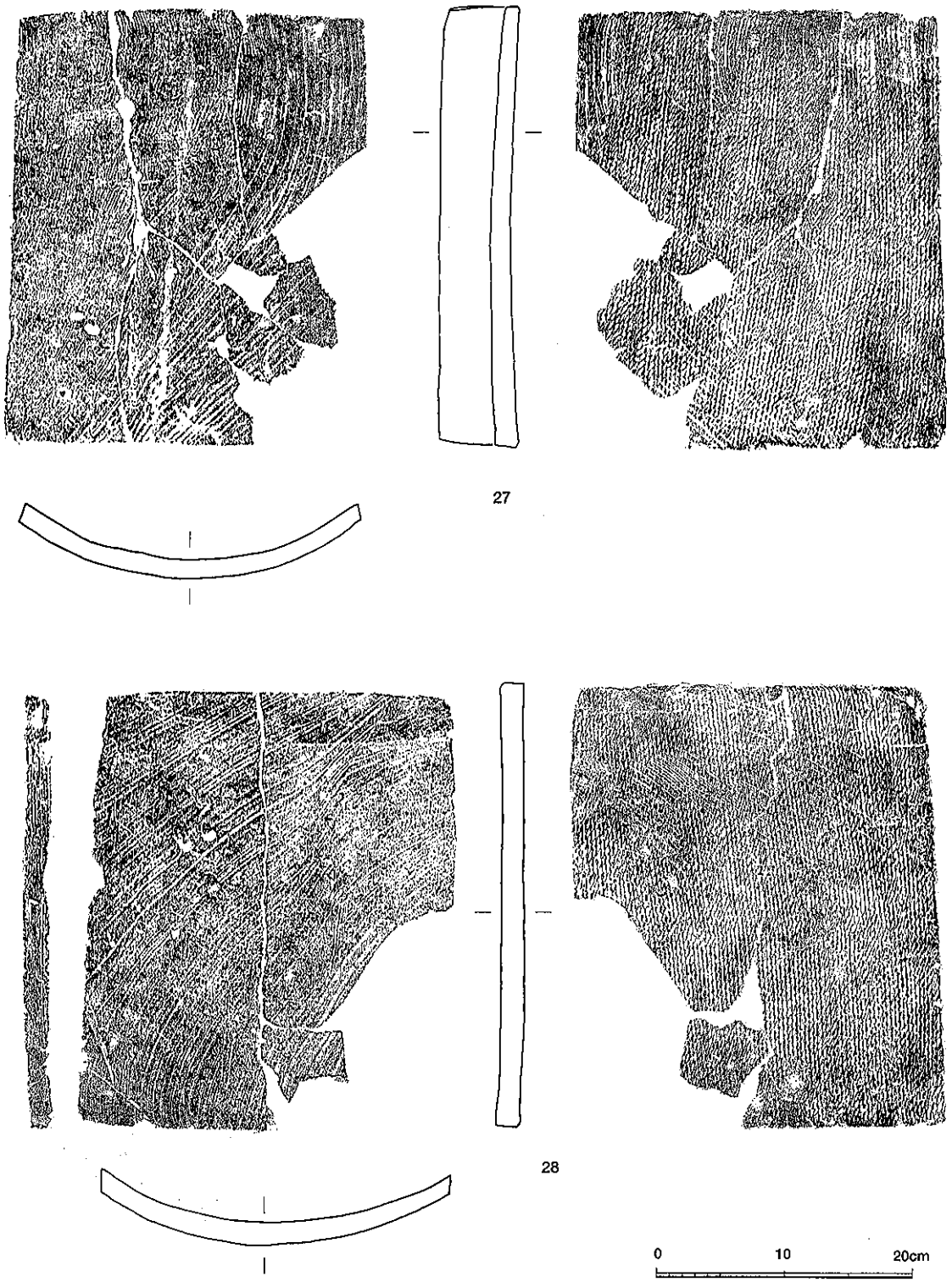


Fig.66　SK1125出土遺物実測図4（1/5）

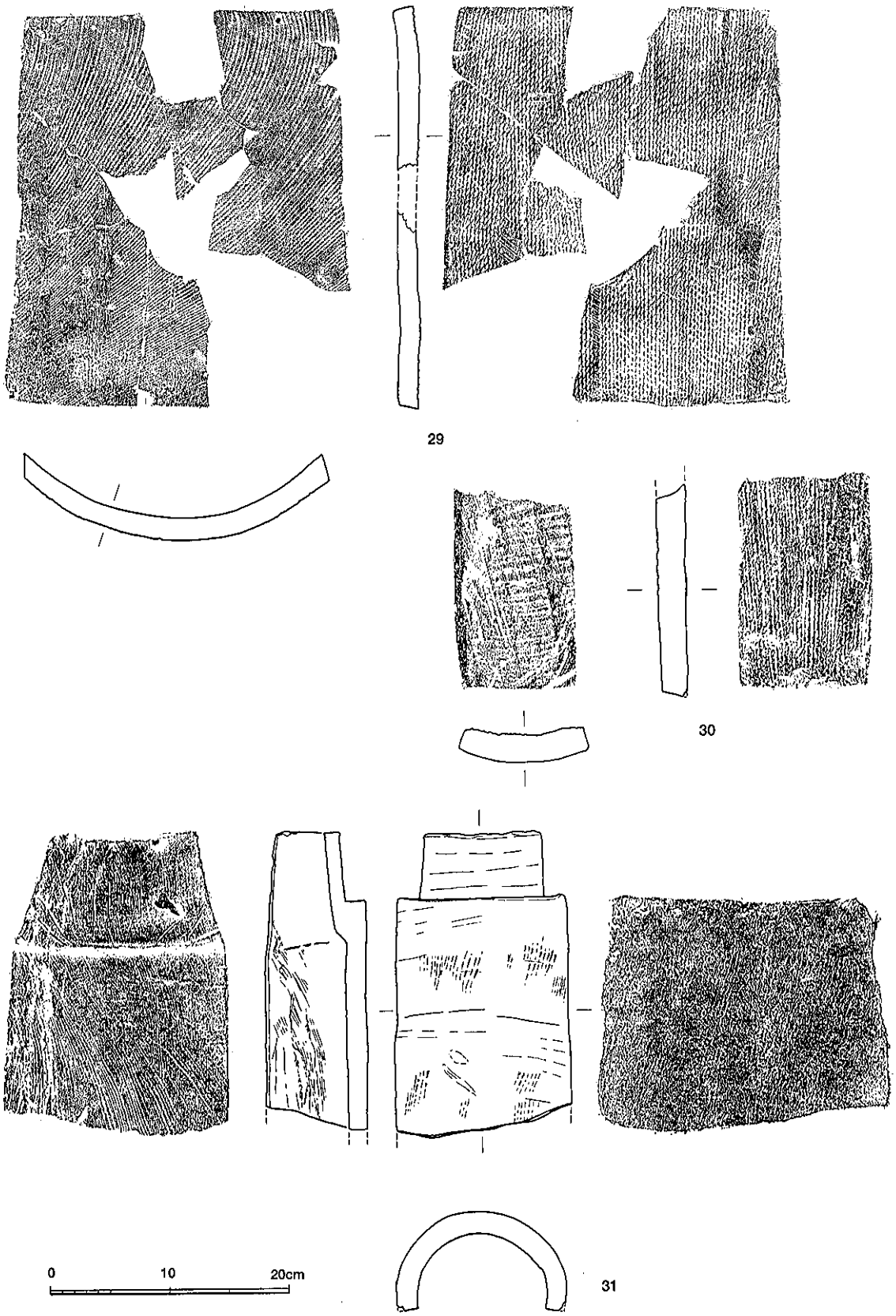


Fig.67　SK1125出土遺物実測図5（1/5）

（5）その他の出土遺物

以下に、前節までの記述から漏れた遺物の中から特徴的ないくつかを紹介する（Fig.68・Fig.69）。

1は**石製蓋**である。滑石製で、新羅の製品と思われる。03－4区出土。2は、**新羅陶器**の坏である。縦に連続馬蹄形文を印花する。03－3区下層遺構面出土。3・4は、国産の**緑釉陶器**である。3は口縁部で周防産で03－3区上層遺構面出土、4は底部で近江産と思われSK15080から出土した。5は、**須恵器**の平底坏である。口縁部から内面は横撫で、体部中位以下外底部は回転へら削りをおこなう。03－3区1トレンチと2トレンチの間に設けたグリッドからの出土。6は**須恵器**の壺である。03－4区出土。7～15は**瓦**である。7は単弁軒丸瓦で、 花弁の表出は甘く、中心には珠文をひとつ配するのみである。中世の地下式横穴であるSK15013から出土した。8は、単弁軒丸瓦の小片である。Fig.47－80のタイプであろう。SK15028出土。9・10は、均等唐草文軒平瓦である。9はSK15027、10は03－3区下層遺構面出土。11は、老司式軒平瓦であろう。額の下面には縄目が残る。12・13は「伊貴作瓦」銘平瓦である。12はSB15011（ 兵舎基礎 ） 、13はSK15027出土。14は「左」銘の平瓦で、SK15013出土。15は、「平井」銘丸瓦である。斜格子叩きは陰文となる。SB15011から出土している。

このほか、巻頭カラー写真に示したイスラム陶器片が、SK15027や03－3区から出土している。

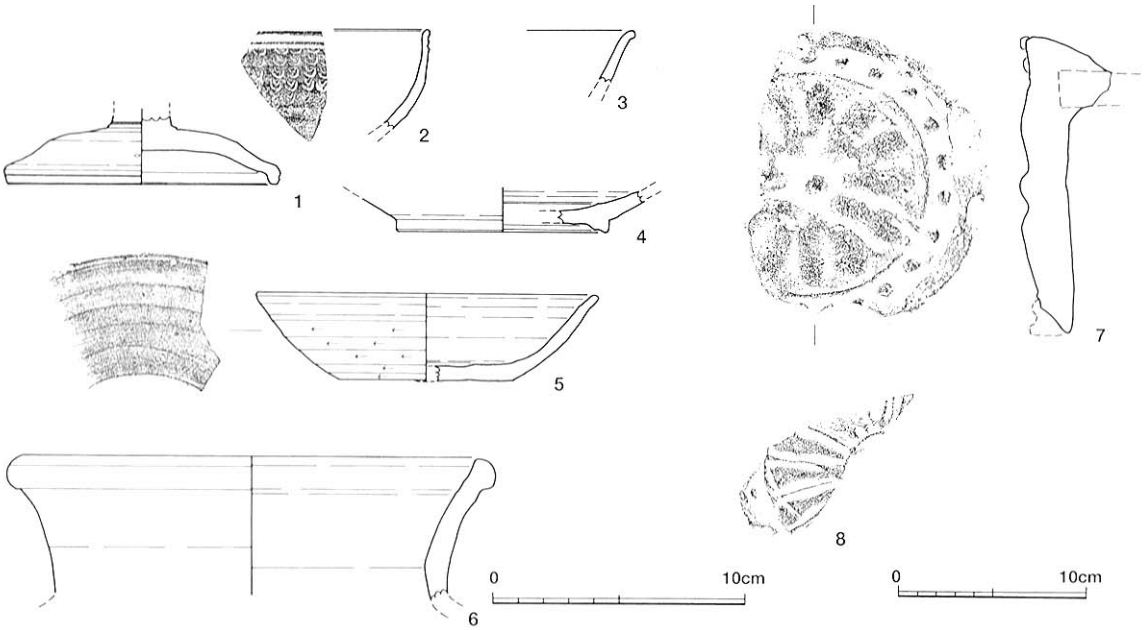
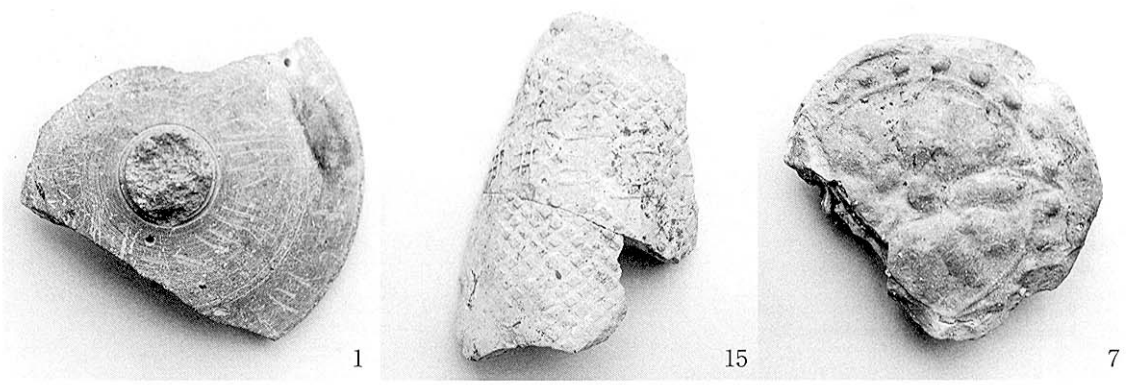


Fig.68　その他の出土遺物1（1/3、1/4）



Ph.74　その他の出土遺物

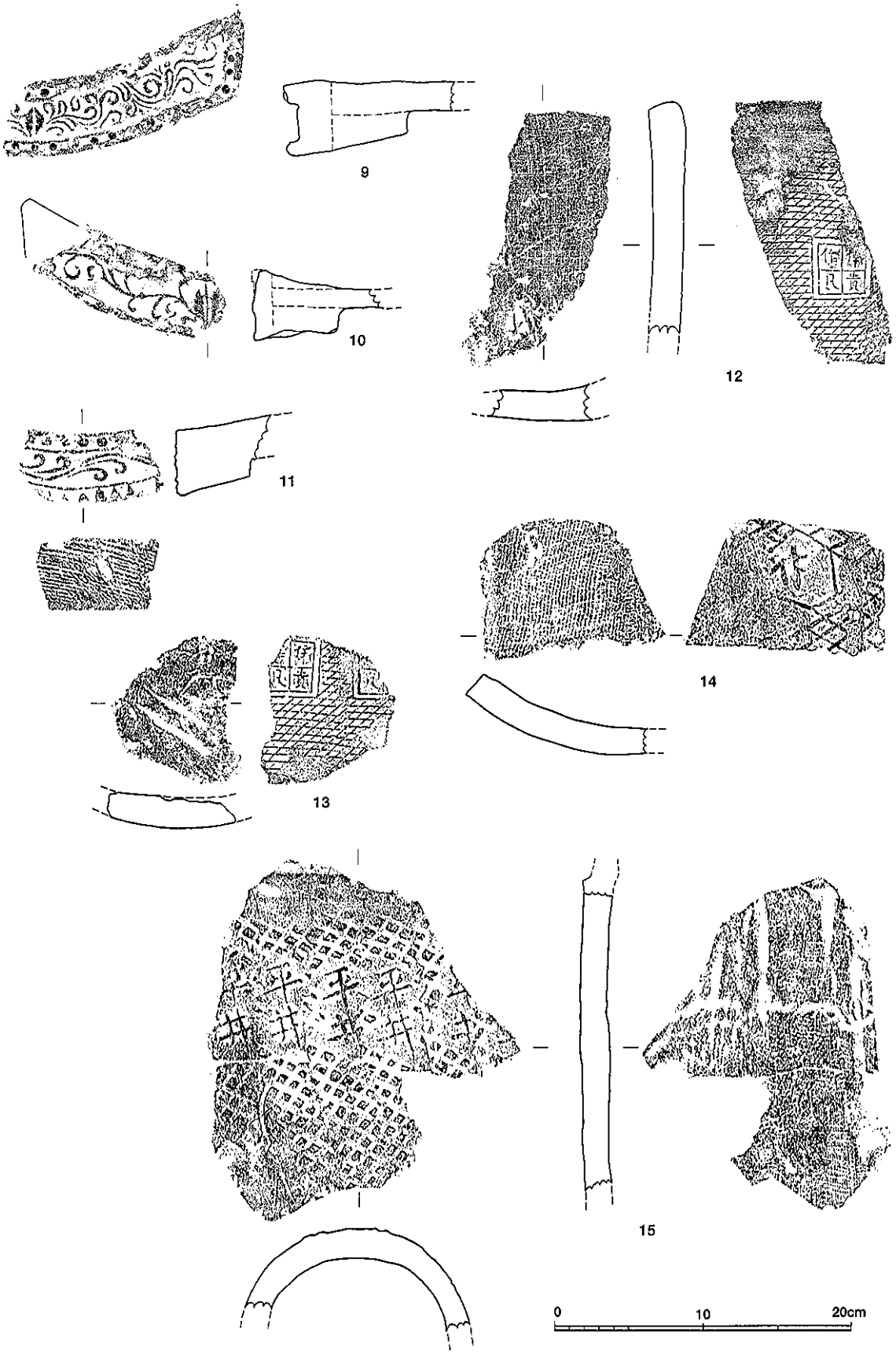


Fig.69　その他の出土遺物実測図2（1/4）

第三章　まとめ

平成15年度調査の成果について、いくつかの点についてまとめを試みる。

１．鴻臚館跡の国史跡指定について

平成14年度鴻臚館跡調査研究指導委員会の審議において、現在調査中の平和台球場跡地を中心とした地点について、鴻臚館関連遺構の北側部分での広がりを確認したのち、国史跡に申請するという方針が了承された。平成15年度調査の03－1区・03－2区は、その指導に基づいて鴻臚北館の北辺を確認するために設定した調査区である。

平成15年度調査においては、年度当初の4・5月で両調査区の確認調査を実施し、鴻臚北館第Ⅱ期布掘り掘立柱列の北西角・北東角を検出したことは前章で述べたとおりである。福岡市教育委員会文化財部では、この成果をもって鴻臚館の遺構が福岡城堀際まで遺存しているとし、文化庁に史跡指定申請を行なうことが可能になったものとした。

平成15年9月26日、鴻臚館跡調査研究指導委員会において、史跡指定申請を行なうことが了承された。その後準備作業に入り、あけて平成16年1月9日鴻臚館跡の史跡指定申請書を文化庁長官宛に提出した。同5月21日、国の文化審議会は鴻臚館跡を史跡指定するように河村健夫文部科学大臣に答申、9月30日付官報号外で告示されたのである。

指定面積は48,027㎡で、平和台球場跡地を中心として、南側の旧テニスコート部分（ 第Ⅰ期整備完了部分 ）、北側の福岡城堀南側縁の範囲に当たる。鴻臚館跡の史跡指定地は、国史跡「福岡城跡」内に含まれており、前例のない二重指定となった。

２．北館第Ⅱ期便所遺構について

03－4区において調査した便所遺構SK1124・SK1125は、鴻臚北館第Ⅱ期布掘り掘立柱列南西角の外側に位置し、その西辺に沿って並んでいた。第Ⅱ期布掘りは、北西角の南面でちょうど一間分途切れている。仮にここに柱列による塀の切れ目があり、門（通用口）が設けられていたと見れば、門を出て西に回りこんだ位置という配置となる。

便所遺構は方形土坑と長方形土坑が並んでおり、何らかの使い分けを予想させる。特に根拠はないが、一人用と数人用という身分に基づく使用者の区分けを想定したい。両土坑は、近接して営まれている点から、一棟の建物で覆われていたものと推測できる。便所が素掘りの土坑である点から見ても、建物を伴わない露天状態は考えにくい。第Ⅱ期の他の建物遺構同様、礎石が削平によって失われたものと考えたい。便所遺構から出土している瓦のほとんどは、便所廃止後の埋め土から出土したもので、便所棟の屋根を葺いていた瓦の一部と考えるのが妥当であろう。

便所には、灯火器（おそらく土師器や須恵器の皿を用いた灯明皿）がおかれ、木切れに火種を移して来て灯したと思われる。用便後の処理には、籌木を用いている。

なお、第6次調査で南館において調査した便所も規模的には同様で、しかも同時期の遺構であった。鴻臚館跡のこれまでの発掘調査では、他の時期に属する便所は検出されておらず、なぜこの時期に限って便所が営まれたのか、他の時期は用便をどのように処理したのか、今後の課題である。

3．北館第Ⅱ期の時期比定について

03－3区に設けた2トレンチ北端の調査では、平成13年度調査の第Ⅱ期布掘り掘立柱列SA1227とそれに先行する整地層からまとまった量の遺物が出土した。従来の発掘調査では、南館を中心に削平された地山面上で遺構を調査することが多く、包含層による層位的な前後関係は検討されてこなかった。平成15年度調査は、それを可能にしたのである。

従来の南館の成果による年代観では、第Ⅱ期は布掘り中から鴻臚館式瓦が出土していること、南館の便所遺構が8世紀前半と考えられることを根拠に、8世紀前半の時期比定がなされてきた。これに対し、北館では平成11年度調査で布掘りSA1104の柱抜き跡から白磁碗片が出土したことにより、布掘り掘立柱列が8世紀半ば以降まで存続したものとした。

今回の発掘成果によると、SA1227によって切られた盛り土整地層から、8世紀前半～中頃の須恵器が出土した。遺物が出土したH層群からSA1227の掘り込み面までは、G・F・E・D層群の堆積があり(Fig.16)、 SA1227が8世紀中頃以前に遡り得ないのは明らかである。これは平成11年度のSA1104から白磁碗片が出土した事実と符合している。

また、北館の便所遺構は、SK1124から8世紀中頃の都城系土師器が出土しており、8世紀前半には遡りえない。北館の便所遺構と布掘り掘立柱列は、その位置関係から見て、無関係ではありえず、この点からも北館の第Ⅱ期が8世紀後半に位置づけられることは明らかであると言える。

このことは、様々な問題を惹起する。すなわち、南館の第Ⅱ期との関係は如何。南館と北館の第Ⅱ期区画の規則性を見れば、両者が同一規格・同一基軸で営まれたことは間違いない。それを同時に測量・設計されたものとして南館の時期を北館に合わせて引き下げるか、南館が先行しそれを規範として北館が営まれたものとして時期差を想定するか。また、8世紀後半～9世紀前半と位置づけられている第Ⅲ期礎石建物の経営時期はどうかわるのか。検討課題は大きい。

4．南館第Ⅴ期区画について

平成15年度調査では、南館の北東を区画する溝SD15052とSD15098を検出した。いずれも11世紀前半の溝で、鴻臚館の最終段階に属する。鴻臚館の造成面は、この区画溝を境に東と北で急激に傾斜を強め、東では谷地形に、北では堀に落ち込む。すなわち、南館の敷地を画した溝といえる。と同時に第Ⅳ期以降まったく建物遺構が検出されていない中にあって、南館敷地が依然として東西・南北の溝で区画されていたという事実は、11世紀中頃の鴻臚館廃絶にいたるまで、前代の方向軸を踏襲しつつ南館の施設が維持されていたことを暗示するものといえよう。

5． 石印について

SK15052から出土した石印は、私印ではあるが、蒼紐形式の銅印を忠実に模したことから見ても文書に押されたものと推測される。11世紀前半の、中国人商人の宿館と化した鴻臚館にあって、どういう場面で印が使われたのか、いかなる階層の人物によって用いられたのか、興味は尽きない。

時代はやや下るが、長治二年（1105）8月20日博多湾に宋船が姿を現したことを大宰府に報じたのは、警固所の解文であった（朝野群載巻第20大宰府附異国大宋商客事）。同解文をしたためたのは、鎰取田口言任と本司兼監代百済惟助である。博多警固所は、もともと鴻臚館に併設されており、警固

所司が常駐して博多湾の出入りを監視していたとすれば、鴻臚館から発給された文書として警固所解文はもっともふさわしい。鴻臚館がその機能を失った12世紀初頭においても、博多湾への船舶出入りの監視を警固所が担っていたとすれば、11世紀前半段階においても、それは同様であろう。石印の所持者として警固所司、その使用場面として警固所解文を考えるのは、あながち的外れではないのではなかろうか。とはいえ、警固所司が所持していた印が、なぜ中国人商人宿館の区画溝から出土したのか、疑問は残る。

6．梵鐘鋳造遺構について

鴻臚南館から、9世紀前半の梵鐘鋳造遺構SK15027を検出した。平成15年度調査区では、9世紀前半にあたる第Ⅲ期の建物遺構は、削平のため確認されていない。しかし、これまでの発掘調査で、第Ⅲ期の施設の外縁を廻る廊状の建物は、第Ⅱ期布掘り区画とほぼ重複することが明らかとなっている。それを参考にすれば、SK15027は第Ⅲ期回廊北東角のすぐ内側に当たる。客館である鴻臚館の施設内にあって、梵鐘を鋳造したという事実は、その機能、懸架場所等さまざまな疑問を投げかける。

梵鐘鋳造遺構の発見を報告した平成16年度鴻臚館跡調査研究指導委員会の審議において、梵鐘の機能として、時鐘である可能性が指摘された。また、古代においては、梵鐘は、使用場所に近接して鋳造されることが多いという事実も示された。

すなわち、南館北東角付近に鐘楼が築かれ、梵鐘を吊るして時を報せていたということになる。

なお、SK15027については、平成17年度でレプリカ作成・切り取り保存処理が行なわれている。

平成15年度調査区における発掘調査は、梵鐘鋳造遺構の保存・切り取り処理に伴う追加調査、南館と北館をつなぐ橋の思われる橋脚柱穴の追加調査など、平成16年度以降に継続している。平成18年度では、平成16・17年度調査の概要を報告する予定であり、詳細は平成18年度報告書に譲る。

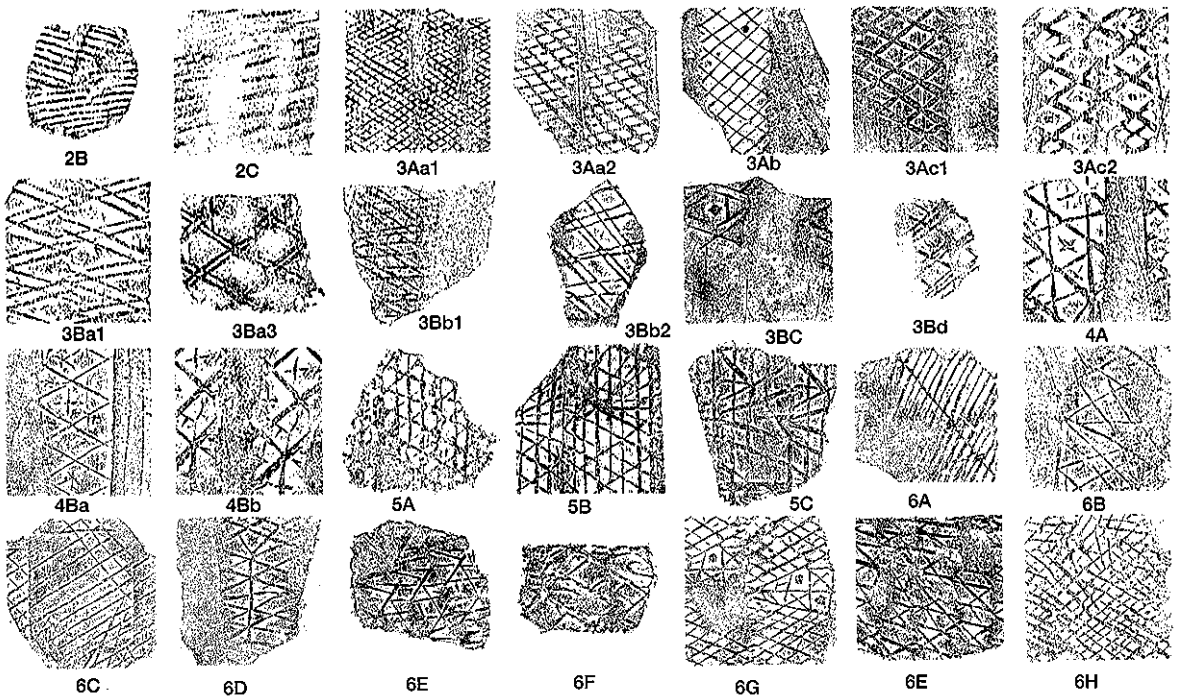


Fig.70　瓦叩き文様分類図（1/5）

報 告 書 抄 録

ふりがな	こうろかんあと
書　　名	鴻臚館跡
副 書 名	平成15年度発掘調査報告書
巻　　次	16
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第875集
編著者名	第875集
編集機関	福岡市教育委員会　鴻臚館跡調査担当
所 在 地	〒810-8621　福岡市中央区天神1−8−1　　TEL 092−711−4783
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
こうろかんあと 鴻臚館跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 ちゅうおうくじょうない 中央区城内1	40132	0192	33° 34′ 59″	130° 23′ 18″	2003.4.7 〜2004.3.31	約2425	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鴻臚館跡	集落 官衙	古墳時代 〜現代	掘立柱塀　1棟 土杭　51基 柱元　147基 溝　11条	須恵器 土師器 石製品 貿易陶磁器	古代の迎賓館である 鴻臚館の遺構

福岡市埋蔵文化財調査報告書第875集

鴻臚館跡16

－平成15年度発掘調査報告書－

平成18年3月31日

発　行　福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　有限会社 瀧川印刷
〒812-0051 福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6－46

図書
九州国立博物館